

I あいさつ



N I Eの発展を願って

宮城県N I E委員会

会 長 星 豪
(大崎市立古川中学校長)

本県のN I E活動は本年度で28年目を迎えました。各学校、関係機関等の御協力により、教育現場と地元新聞社・全国紙・通信社等が一体となり協力して普及、実践、研究に努められ、研修会や研究大会などを通じて県内全域への「新聞に親しませる」、「授業に新聞を活用する」などの取り組みの浸透を図ってきており大きな成果をあげております。

本年度も活動の集大成としてN I E実践報告書第28号が関係の皆様御協力で発刊されましたことに深く感謝を申し上げます。

さて、本年度の宮城県N I E研究大会は、平成27年・28年度日本新聞協会実践指定校として取り組んでいただいた、宮城学院中学校を会場にして11月9日に開催されました。「N I Eは伝え合う力」と題した大会では、宮城学院中学校の特色ある取り組みが実践資料の展示などで多数紹介されました。実践報告では、自分自身が新聞記者となり、世の中に平和についてのメッセージを「長崎新聞」として発信する実践や、世の中の平和に関する動向を新聞を通して学び、修学旅行で訪れる長崎の原爆の悲劇から世界平和を訴える「平和宣言文」にも毎年取り組まれ、これら一連の流れを長年にわたって継続し、大きな成果を得られていることは素晴らしいと感じ、私学ならではの特色ある充実した取り組みを拝見させていただいたことは大きな収穫となりました。

斎藤孝氏の著書「子どもに伝えたい三つの力、生きる力を鍛えるから」では「子どもにつけさせたい三つの力」として「コメント力」、「段取り力」、「あこがれ力」をあげています。「コメント力」とは言葉にして表す力、国語の力であり、コ

メントする習慣が欧米と比べて日本に乏しいのは、コメントすることが一つの責任という意識が希薄であることが一因と述べています。また、「段取り力」では、物事を先を見越して組み立てる力、場をつくる力は体験により鍛えることが大事で、学習発表会や職場体験などは段取り力を鍛える絶好の機会としています。更に「あこがれ力」では、憧れる存在を目指してまねるのが上手な子ほど伸びると述べています。こうした意味でN I E教育は、この三つの力を十分に引き出せる要素を備え持つものであるともいえます。新聞記事からコメントを考える。発表に向けた段取りを考え実行する。視野を広くし世界に目を向け様々なことに憧れを持つことは子供の能力開発に有効となり得るものと考えます。今後ますますその重要さが評価されていくものと考えます。

さて、国に於いては次期学習指導要領の改訂が進められ大詰めを迎えておりますが、この改訂の基本方針には、「アクティブ・ラーニング」の視点から学習過程を質的に改善することが掲げられています。学校に於ける質の高い学びを実現し、子供たち一人一人を「アクティブ・ラーナー」とすることを目的としています。N I Eは正に課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に学ぶ「アクティブ・ラーナー」を育成する手法として大きく期待される分野であり、今後めざましく進展するものと期待するところであります。

結びに、本県N I Eの充実した活動と更なる発展を祈念しますとともに、これまでの活動に対する関係各位の皆様からの御協力・御支援、並びに御指導に心より感謝申し上げます。



N I E教育の『カリキュラム化・ マネジメント力・日常化』

宮城県N I E推進委員会

委員長 森屋 勝治

(仙台市立七北田小学校長)

教育課程の編成と実践の中で、N I E教育の充実が極めて有効であることが言われています。仙台市『杜の都の学校教育』では、「新聞の利用を通して、読む、書く、考える、まとめる、表現するなどの言語活動を充実させる。」を目標にしています。そして、施策として宮城県N I E委員会等、関連する機関との連携を推進することが明記されています。これに応え『教育に新聞を』という取組を大いに発信できた年になりました。この中で「生きた学習材」としての新聞の良さを、一人ひとりの教員に伝え、教員のマネジメント力を高めていくことが一層肝要であることを再認識しました。今年の県大会の実践発表校宮城学院中学校や本校の取組に触れながら振り返ります。

①【N I Eのカリキュラム化】

「年間指導計画への位置づけ」についてです。宮城学院中では、N I Eを取り入れた平和教育として、2年間にわたり、指導計画に位置づけていました。2年次6月の職場訪問から始まり、3年次には学校行事として校外研修旅行を実施して現地に赴き学びの集大成を行うことなど、「学校組織として取り組むN I E」の姿がありました。

②【カリキュラム・マネジメント力】

年間指導計画を基に、「生きた学習材」にする教員のマネジメント力についてです。

各教科の教育内容を相互の関係でとらえ、必要な内容を組織的に配列し、さらに必要な資源を投入することが言われています。

発表の中に「一人一人が自分の言葉で平和についてまとめること・国や他国に〇〇してほしいではなく、自分が何をすべきかを書くように指示した。」とありました。

ここに、学習内容と社会を結びつけ、その延長

として社会参画意識を育てるという指導者の姿勢と「生きた学習材」にするための考えが明確に現れていたと思います。

出前授業については、求めれば新聞社の方々をゲストティーチャーとしてお願いできることがあります。そこでは、「確かな事実による根拠が示されること」など、「生きた学習材」になり得ることなどの利点が挙げられます。広く活用したいと思うところです。

③【N I Eの日常化】

「朝新聞」の取組・N I E実践指定校としての取組を紹介いただきました。昨年度のN I E実践報告書第27号に掲載されましたので、省きますが、興味深いものがありました。

本校でも実践指定校として取り組んでおりましたので少し触れます。渡邊裕子先生からご紹介ご指導をいただいた「言葉の貯金箱」の取組を全校で始めて3年目になりました。1年から6年まで、特別支援学級の子どもたちも指導する教員も楽しく取り組んでいます。朝のN I Eタイムの設定など「学校組織として取り組むN I E」にすることができました。

また、実践推進として、7月に仙台市小学校教育課程研究協議会において、5年生の国語科の中でN I Eの実践に触れて本校教諭・N I Eアドバイザーの今藤正彦先生が発表しました。参会の先生方にその良さを汎化することができました。

結に、各学校におけるN I E教育の「カリキュラム化・マネジメント力・日常化」をさらに推進することを期待するとともに、これまでのご指導、ご支援をいただきました事務局並びに関係各位の皆様には厚く御礼を申し上げ挨拶いたします。

II 寄稿



教育に新聞社を

宮城県N I E委員会

副委員長 武 田 真 一
(河北新報社 防災・教育室長)

N I Eに関わるようになって一つ思うことがあります。「教育に新聞を」という呼び掛けの解釈、「幅」についてです。

教育現場で「新聞」をもっと活用し、授業の内容に新聞記事や紙面を積極的に取り入れよう、という運動・メッセージであることはご承知の通りです。ニュースや話題を扱う媒体としての「新聞」を教育に活用することで、子どもたちが地域や社会に興味を深める機会を増やし、読み書きなどの学習効果を高め、人間性もはぐくむ。そんな願いを教育側と新聞側が共有しながら、呼び掛けは実践されてきました。

当然ながら、そこで使われるのは直接的には新聞そのもの、印刷された紙面や記事、ネット公開されたデータになりますが、それだけで十分なかなあ、との思いをこのところ強くしています。

「新聞社」はいったい何をする会社か。業界内ではそんな問いかけが重みを増しています。もちろん新聞発行が第一、大前提にはなりますが、いろんな意味でそれだけでは済まなくなっているのです。

たとえば、当方の「防災・教育室」が一つの例でしょう。東日本大震災の伝承と教訓に基づく防災啓発のプロジェクトを専任体制で進めるため、教育関係のプロジェクトと一体化し、昨年4月に新設されました。教育関係も含めて、新聞発行の枠にとどまることなく、社会との幅広い関わり、つながりを重視した部署になります。

「むすび塾」と名付けた月1度の防災ワークショップを開催するほか、宮城県内の防災に関わる産学官民、報道機関の連携組織を運営しています。この4月からは震災伝承の担い手になる若者を育成するための講座もスタートさせま

す。これらは行政や企業、大学、NPOなど社会資源に中間的な立場からアクセスでき、それらを横断的につなげる新聞社ならではの機能を生かす取り組みと言えます。いずれも「被災地新聞社の責務」と位置づけられた企画であり、利益の視点はメインではありません。

もとより、N I Eも同じような姿勢を基盤にしています。新聞の普及を願うのは当然としても、それ以前に地域や社会、教育の発展に貢献する方向性を重視しているところに最大の意義があります。

であれば、印刷された紙面や記事、ネット公開されたデータを授業でどのように使うか、というテクニカルな次元で解釈しているだけでいいのだろうか、もったいないなあ、という感想になるわけです。

「アクセス力」「コーディネート力」を持つ新聞社という資源を、教育現場にフル活用してみるとどうなるでしょう。

研究機関や企業、NPOをはじめとしたあらゆる地域セクターとのつながりが生まれ、学校現場をより開放的にし、教育内容の幅が広がる方向性が見えてこないでしょうか。媒体としての紙面や記事も絡めることで、さらにN I Eの実質的な活動も深まるような気がしています。

皆さん、勇気を持って新聞社にもっとアクセスしてみてもどうでしょう。こちらにはそれなりの構えは既にできています。あとは教育現場の意欲一つ。

「教育に新聞社を」。教育現場は新聞社をもっと活用する、新聞社は教育現場に積極的に活用メニューを提示していく。その相互交流がN I Eの未来を開く鍵になると、初心者わたしは考えています。

Ⅲ 研究実践報告

1 実践指定校報告

(1) 塩竈市立第一小学校 (平成 27・28 年度実践指定校)

生きる言葉の力を高める N I E

1 はじめに

本校では「生きる言葉の力を高める N I E」をテーマとして設定し、平成 27 年度から N I E の実践に取り組んできた。

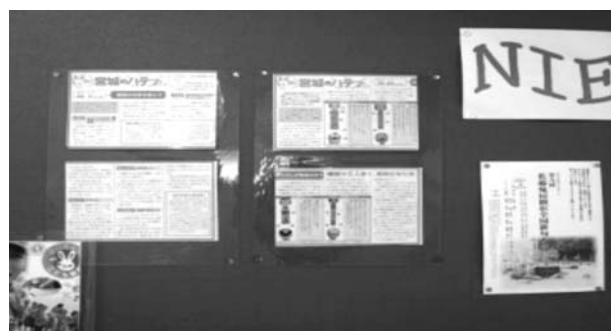
児童に話を聞いてみると、新聞をとっていても見たり読んだりする機会が少ない児童が多くなっている。そこで、2 年目である本年度も、昨年度に引き続き、新聞に興味を持たせること、実際に触れさせることに重点をおき、高学年の児童を対象に実践を進めてきた。

2 これまでの取組

(1) 環境整備

高学年の児童がよく通る校舎 3 階廊下に、新聞コーナーを設置した。日付ごとにファイルボックスにストックしていき、自由に読めるようにした。休み時間に立ち止まって眺めたり、近くに置いたテーブルや床に新聞を広げて読んだりする姿が見られた。朝の読書タイム等に学級で活用することもあった。

また、職員室前の掲示板に本校児童が載った河北新報の記事を紹介する N I E コーナーを設けた。



〔N I E 掲示板〕

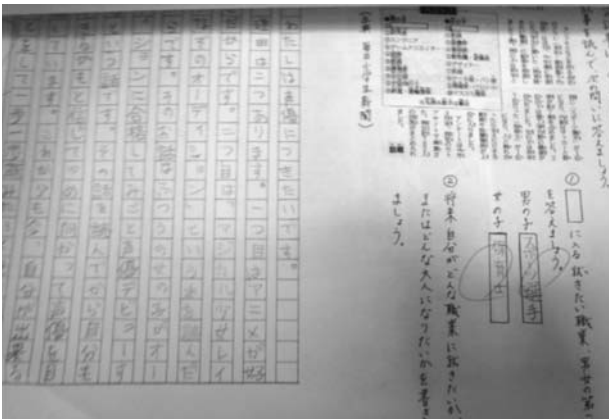
(2) N I E タイム〔5・6 年〕

月曜日と木曜日の朝の活動時間を利用し、新聞記事を題材にした問題に取り組ませた。記事を読んで 1～3 問程度の設問に答えるもの。新聞記事の文章から大事なことを読み取る力を育てたいと考え、高学年担当が児童の実態に合わせて問題を作成した。



〔問題プリント〕

また、週末の家庭学習の課題として、切り抜いた新聞記事を題材にした問題に取り組ませた。その記事を読んで考えたことを、文章にまとめさせることで、書く力も伸ばしたいと考えた。



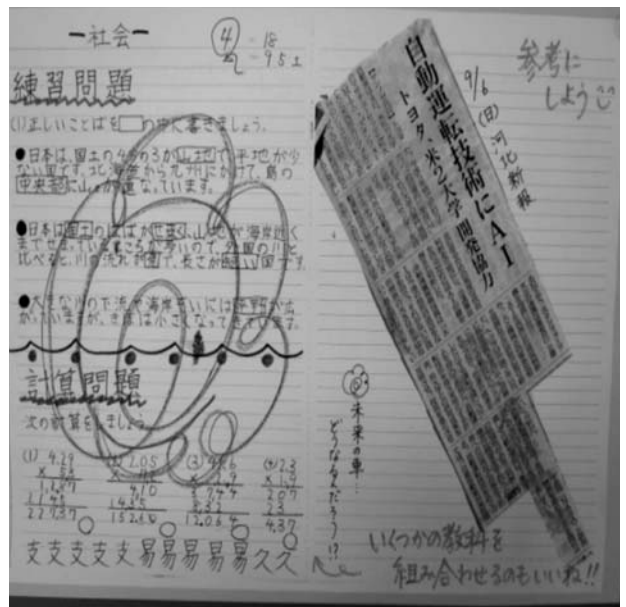
〔問題プリント〕

(3) 新聞記事の切り抜き

自主学習ノートに自分が気になった新聞記事の切り抜きを貼り、文章にサイドラインを引いたり、一言感想を書かせたりした。新聞を取っていない家庭の児童用に、教室に新聞ボックスを設置して古い新聞をストックし、自由に切り抜いて持って行ってよいこととした。最初は貼るだけだった児童も、慣れてくると記事に対しての感想が書けるようになった。工夫している児童のノートを掲示して、参考となるようにした。

(4) 委員会活動

広報委員会の児童が毎朝、新聞ボックスから新聞を取り出し、新聞コーナーのファイルボックスに整理した。また、委員会活動の中で『広報新聞』や『まわし読み新聞』作りに取り組み、廊下の掲示板に掲示した。



〔児童の自主勉強ノート〕



〔広報委員会の新聞〕



(5) 授業での活用

◎27年度

【5年国語「資料を生かして考えたことを書こう」】

1学期に「新聞記事を読み比べよう」という単元で、記事の中の写真の役割や効果について学習したことを生かして、2学期は一人一人自由に新聞を読ませ、気になる記事を選ばせた。そこから読み取った情報を活用して文章を書き、紹介するポスターにまとめさせた。児童は、改めて記事の中で使われている写真の効果や情報量の多さ、見出しの大切さに気付くことができた。

【6年社会「新聞広告で近代の日本を調べよう」】

明治・大正・第二次世界大戦中・戦後それぞれの時代の新聞広告から、気付いたことをまとめさせ、時代毎の特徴を発表し共有させた。児童は初めて見る新聞広告に興味を持ち、自分の見ている広告がいつの時代のものかを表す手がかりを真剣に探していた。新聞の持つその時代を反映する媒体として新聞





〔授業の様子：隣の子に説明〕

広告を活用し、教科書で学んできた歴史を振り返りながら、近代日本の特徴を捉えさせることができた。

◎28年度

【4年「まわし読み新聞を作ろう」】

新聞を読んでいる児童が少ないという実態から、学級でまわし読み新聞作りに取り組んだ。自分が選んだ記事について一言コメントを書き、グループで読み合った。普段新聞を読まない児童も楽しんで活動する姿が見られ、新聞を少しでも身近に感じさせることができた。



〔4年生が作ったまわし読み新聞〕

【6年国語「新聞の投書を読み比べよう」】

教科書に載っている新聞の投書を読み比べることで、読み手を納得させるための工夫を読み取り、それを参考に意見文を書かせた。教科書だけでなく、河北新報「声の交差点」の投書も紹介し、文章の書き方を学ばせた。自分の意見を書くことに意欲的に取り組む姿が見られた。できあがった作品の中から数点を、河北新報投稿欄「声の交差点」や新聞記事コンクールに応募した。

この学習をきっかけにして、さらに新聞に興味をもち、新聞に載っていたことを話してくれる児童もできた。夏休みには河北新報スクラップ作品コンクールに応募した児童もいた。

【6年総合「塩竈発信探検隊」】

福島県会津若松方面への修学旅行を通して学んだことを、ふるさとの塩竈をPRすることに生かしていく学習。中間のまとめとして、壁新聞を作った。新聞に載せる際に気をつけることを確認したことで、テーマを絞って分かりやすくまとめさせることができた。最後に5年生に発表して感想をもらうことで、自分たちの学習を客観的に振り返らせることもできた。



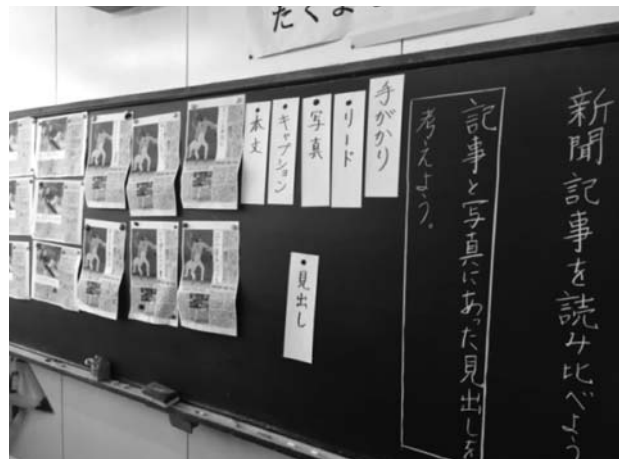
【3年社会「店ではたらく人」】

ヨークベニマルに見学に行って分かったことを新聞にまとめさせた。3年生の児童が割り付けに悩まなくてすむよう、決まったフォーマットを使うことで、分かりやすくまとめさせることができた。



【5年国語「新聞記事を読み比べよう」】

新聞の特徴や役割を知り、記事の構成や写真の役割について学んだ上で、教科書の2つの新聞記事を読み比べて、記事の内容やねらいの違いを読み取る学習。新聞に触れる機会がないという児童にも興味を持たせるために、教材を工夫した。教科書の記事以外の楽天対巨人の野球の試合の記事を取り上げ、二つの記事のリード、本文、写真などから、適切な見出しを考えさせた。児童は書き手のねらいを読み取り、書き手が巨人目線なのか楽天目線なのかで、見出しの言葉を選ぶことができた。同じ試合のことも、書き手のねらいや思いによって、記事の書かれ方が異なるということを実感させることができた。





必要がある。

- 新聞を購読していない家庭の方が多くなってきているため、新聞を持ってこさせたり、宿題として取り組ませたりすることが難しくなっている。切り抜きなどをさせるためには、こちらで用意するなどの工夫が必要である。

(担当 教諭 佐々木 恵)



3 成果と課題

【成果】

- これまで新聞を見たり、手に取って読んだりしたことがなかった児童も、「新聞コーナー」があることで少しずつ興味を持つようになった。常に新聞が読める環境があるということは大きい。
- 新聞に触れることを通して、社会のこと、世の中のことに興味を持つようになった児童が増えた。
- 新聞の「相手を意識した」文章の書き方を学んだことで、国語や社会、総合的な学習の時間などでまとめる新聞を書く際に生かすことができた。
- 新聞記事や投書を参考に文章を書かせることで、内容や要点を簡潔にまとめる意識を持たせることにつながった。
- 6種類の新聞が届くことで、児童だけでなく教職員も新聞に触れる機会が増え、授業づくりに生かすことができた。

【課題】

- 校内でNIEの実践を行う組織づくりやカリキュラムの位置づけなど、教職員間の共通理解を図る



(2) 登米市立上沼小学校 (平成 27・28 年度実践指定校)

新聞に親しみ、「読む」・「考える」・「発表する」・ 「活用する」力の育成

1 はじめに

本校は昨年度から2か年(平成27・28年度)に渡りNIE実践指定校となった。

本校の児童の実態として、「自分の考えを主張することがあまりできない。」「テレビ、ビデオ、ゲームの時間が全国や宮城県平均を上回り、読書を全くしない児童の割合も全国や宮城県平均を上回り、活字離れが進んでいる。」「地域上、グローバルな視点での職業に接する機会が相対的に少ない。」ことが挙げられる。

今回、NIE実践指定校となることで、学びの活動に新聞を活用し教職員の指導力の充実を図りながら、本校児童の課題を克服し、確かな学力向上に結び付けられると考えた。また、志教育・キャリア教育の一環としても、新聞を通して社会の出来事や世界に視野を向けること、マスメディアへの関心を高めることは、将来の社会人としてのよりよい生き方を主体的に求めていくことにつながると考えた。

2 実践の概要

NIEに取り組むにあたって事前に行った児童の実態調査からは、新聞を読むことに対して半数以上が「嫌い」「どちらかといえば嫌い」と答えていた。また、新聞を読む頻度についても「読まない」と答えた児童が約半数いることが分かった。

本校職員のほとんどがNIEには初めて取り組むという点からも、次の2つの視点でNIEに取り組もうと考えた。

○新聞を身近なものに感じ、新聞をはじめとした活字に親しむよう児童の意欲を高める。

○新聞を身近なものとして感じられるよう、新聞を活用した様々な実践を積み重ねる。

2つの視点に基づいた2年間の実践は以下の通りである。

1年目の取組

(1) 職員研修

本校では、NIEに初めて取り組む職員がほとんどであった。そこで、河北新報社に協力を頂きNIEについてのオリエンテーションを実施した。オリエンテーションでは、新聞のつくり、記事の書き方と見出しの役割など「新聞の読み方」について教えていた

だいたい「5W1H探し」を実際に新聞を手にとって体験したりと、職員全員でNIEについての理解を深めることができた。



【NIE研修会】

(2) 「NIEコーナー」の設置

児童の新聞への親しみを深め、興味関心を高めるために、1階図書コーナーの壁面を利用し「NIEコーナー」を設置した。



【NIEコーナー】

掲示板は、NIE担当職員が次のような記事を掲示し、児童の新聞へ興味関心を高めるようにした。

①季節や地域に関する記事

②児童の興味関心を高める特集

・戦後70年特集

・血液型特集

・速く走るコツ特集 など

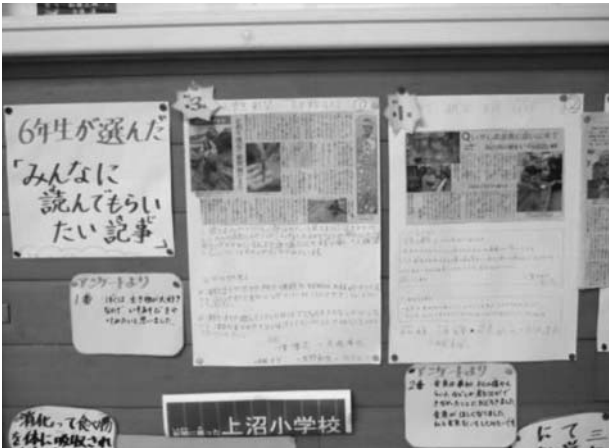
③「新聞タイム」で活用した児童のワークの提示

(例)新聞タイムで作成した6年生児童の「おすす
めの記事とその紹介文」を掲示し、全校児童を対象
に、どの記事がよかったのかを投票させた。

④本校または、本校児童を取り上げた記事



【戦後70年特集】



【6年生が選んだ「みんなに読んでもらいたい記事」】

NIEコーナーには、休み時間や放課後に自然と児童が集まり、記事を読み合う様子が見られるようになってきた。新聞への興味関心は、少しずつではあるが確実に高まってきた。

(3) 新聞タイムの実践

4～6年生を対象に、毎週金曜日の15:00～15:15を「新聞タイム」とし、新聞を活用した実践を積み上げた。

主な実践は以下の通りである。

- ・みんなに読んでもらいたい記事
- ・お気に入りの写真の紹介
- ・「かほくワークシート」の活用 など



【かほくワークシートの活用】



【お気に入りの記事の紹介】

(4) 小学生新聞の購読

新聞の購読と共に、小学生新聞を2紙購読することにした。児童も理解しやすい内容で読みやすいこともあり休み時間や放課後に気軽に手に取って子どもも新聞を読む姿がよく見られるようになってきた。



(5) 授業における新聞の活用

本校は27年度、国語科を研究教科とし、『確かに読み取り、伝え合う児童の育成を目指して～国語科における「読むこと」の指導の工夫を通して』を研究主題に取り組んだ。

NIEについても、「NIE活用の工夫」として研究の視点に取り入れた。

○6年 国語 単元名「町の幸福論」

・単元について

本単元は、図や表などを用いて自分の考えを説明する方法を教科書「町の幸福論」から学び、そのことに基づいて、自分で図表や資料を活用して自分たちの住む町の未来について発表することをねらいとしている。

・「NIE活用の工夫」

街づくりのために地域の住民などが取り組んでいる様子を、新聞から見つけさせ掲示して読み合わせる。

・活用してみて

どの新聞にも県内版があり、県内のさまざまな地域での街づくりの様子について具体的に知ることができた。

3 2年目の取組

(1) 新聞コーナーの設置

高学年の廊下の一角であるワークスペースに、河北新報・朝日新聞・産経新聞を置き、いつでも読めるようにした。しかし、子ども新聞には人が集まらなかった。そこで、新聞を開いたり読んだりして、気に入った記事があった時には自分の名前を書いた付箋を貼るようにさせた。

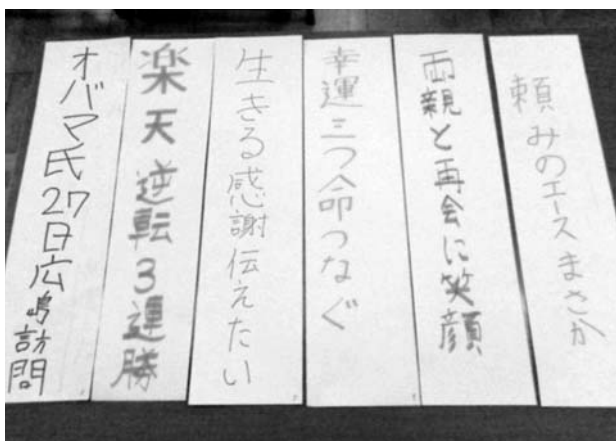


その結果、友達がどんな記事を見ているのか興味をもって新聞を開いたり、読んだりする児童が増えた。また、教師側としても、児童がどんな記事に興味があるのかを知る良い手立てとなった。

(2) お気に入りの見出し募集



新聞の「見出し」について注目させ、その特徴をつかませるために、お気に入りの見出しを募集して画用紙の短冊に書かせた。自分や友達が



【お気に入りの見出し】

気に入った見出しから、見出しは「短い」「インパクトがある」「大きい」「省略して書かれている」などという特徴があることに気付くことができた。

(3) 公開授業 6月17日

国語科では5年生が「新聞記事を読み比べよう」の学習を行った。河北新報、朝日新聞、読売新聞、産経新聞など、各社の同日の一面記事の読み比べなどをした。また、本単元では新聞記事を読んで書き手の意図をとらえ、自分で新聞記事の見出しを考える言語活動を設定した。



単元名 書き手の意図を考えながら新聞を読もう
「新聞記事を読み比べよう」

本時のねらい

記事の内容や写真に合う見出しを書き、互いに読み合って助言し合うことができる。

「記事の内容」(5W1H)と「使われている写真」について書き出し、要旨をとらえた上で見出しを考え、読みたくなるような見出しが次々に発表された。

授業の後

半には見出しクイズカードを交換し合い、友達の記事(見出しが隠されていて、裏に貼ってある)を読んで見出しを考える活動を取り入れた。授業を参観して下さったお客さんにもクイズを出し、意欲的に活動することができた。



指導過程

段階	学習活動と予想される児童の反応（・）	形態	〇指導上の留意点 ◎A 児への支援 ●C 児への支援 【観点】評価規準（方法）
導入 5分	1 本時の学習課題を知る。 <p style="text-align: center;">新聞記事に見出しをつけよう。</p>		〇見出しを空白にした新聞記事を紹介し、見出しがないと何について書かれた記事なのか一目で分からないことに気付かせる。 〇本時は記事に見出しをつけ、互いに見出しのよさや工夫を考える学習であることを確認する。
展開 35分	2 見出しの特徴をとらえる。 <p style="text-align: center;">お気に入りの見出しを紹介しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オバマ氏 27 日広島訪問 ・日本、タイに逆転勝ち ・時代の波にもまれた桃太郎 ・頼みのエースまさか <p style="text-align: center;">見出しの特徴で気付いたことを発表しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短い言葉でまとめている。 ・心に強く残る。 ・本文を読んでもみたくなる。 ・一目で何が起きてどうなったのかわかる。 ・面白い表現を使っている。 	一斉 〇「新聞タイム」で児童が選んだ「お気に入りの見出し」を紹介し、興味をもって取り組むことができるようにする。 〇それぞれの見出しを比べてみて、気付いたことを発表させる。 〇多くの見出しを見比べることで「何」のことだけでなく「何がどうなったか」というところまで表現していることや言葉を省略して書いていることに気付かせる。また、読み手の興味を引くような工夫をしていることにも気付かせるようにする。 ●助詞や動詞が省略されていない例を提示することで比較してとらえられるようにする。	
	3 見出しを考える。 <p style="text-align: center;">記事と写真に合った自分なりの見出しを考えましょう。</p> <p>4 全体で発表し合い、良い点や改善点を述べ合う。 <p style="text-align: center;">友達の考えた見出しを見て、良い点や改善点を伝え合いましょう。</p> <p>〈助言の例〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インパクトがある。 ・何がどうなったかわかる。 ・語尾を短くするともっとよくなる。 </p>	個人 〇記事の内容を読み取れるように、児童に黙読させた後、範読する。 〇「記事の内容」（いつどこでだれが何をしたか）「使われている写真」についてプリントに書き出す時間をとり、要旨をとらえた上で見出しを考えることができるようにする。 【読】新聞記事の内容と見出し、写真との関係を読み取っている。（発言・書いた見出し） ●プリントに書いた自分の考えを自信をもって話せるように机間指導をしながら支援する。 〇分かりやすく書かれている児童を意図的に指名し、発表させる。実際の見出しを提示する。その後、 一斉 〇当たり外れではなく、「何がどうなったか」といった視点で考えるように助言し、友達が書いた見出しのよさを伝え合わせる。	
	5 見出しクイズカードを友達と交換して見出しを考える。 <p>〈助言の例〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読んでみたくなるね。 ・何があってどうなったのかが一目で分かるね。 ・記事の内容がシンプルにまとまっているいいね。 ・面白い表現を使っているいいね。 ・文章にある言葉を使っているね。 ・省略のしすぎは読み手に内容が伝わらないから、もう少し具体的に書いてもいいかもしれないよ。 	〇カードを交換し合い、記事と写真に合った見出しを考える。 〇出題者は友達がつけた見出しに助言する。 【書】記事の内容や写真に合う効果的な見出しを書いたり、書いた見出しの表現について助言し合ったりしている。（発言・プリント） 〇友達の選んだ記事を読みたいという気持ちや、見出しを当てたいという気持ちが高まるようにする。 〇当たり外れではなく、「何がどうなったか」といった視点で考えるように助言し、友達が書いた見出しのよさを伝え合わせる。	
終末 5分	6 本時の学習を振り返る。	一斉 〇本時の学習のねらいを確認し、自ら身につけた力や友達の発表を聞いて新たに気付いたことなどを発表させる。	



【見出しのアイデア続々】



【見出しクイズカードおもて】



アホドリ 初の巣立ち
【裏】



【見出しクイズカードに挑戦】

(4) 研修会「もっと手軽にNIE」

NIEアドバイザー今藤正彦先生にお越し頂き、宮城県のNIEについてやNIEの実践例についてご講話を頂いた。

NIEについて職員一同理解を深めることができた。児童を新聞に親しませることへの抵抗感がなくなり、「これならできそう」「楽しそう」と感じさせられた研修会だった。



(5) 新聞印刷工場の見学



5年生は社会科「情報産業とわたしたちの暮らし」の学習の一環として、新聞印刷工場を見学した。河北新報の歴史を映像で学習した後、ガラス越しに印刷の様子を見たり様々な展示物を見たりした。新聞の構成や、どんなことを記事にしているのかなど展示物からも多くのことを学んでいた。インクのおいに包まれた工場で働く人の大変さも実感している様子だった。



(6) 総合的な学習の時間



3年生の総合的な学習の時間では米作りを行った。米の育ち方や、米の種類などを調べて新聞形式でまとめて発表した。絵や文の構成が工夫しており、読みやすかった。

(7) 新聞記事のスクラップ

4年生ではお気に入りの記事を切り抜き、まとめる活動を行った。なぜこの記事を気に入っているのか感想を書き、出来上がったスクラップは友達同士で交換して読み合った。幅広い記事について関心を持つことができた。



4 成果と課題

<成果>

- ◎新聞に親しみをもち、新聞を読むことに対する抵抗感がなくなった。
- ◎社会で起きている出来事に興味を持つようになり、読むだけでなく、読んで考え、意見を言える児童が増えた。
- ◎記事の中から5W1Hを探せるようになったことで、記事を読む際に必要な要約の力が付いてきた。

<課題>

- △低学年から新聞の面白さを感じ取れるような、系統性を踏まえた計画を立てる必要がある。
- △指導者が授業の中で新聞を効果的に活用できるよう各教科の年間指導計画を位置づける必要がある。

(担当 教諭 小関 麻衣子)

(3) 仙台市立中野栄小学校 (平成 27・28 年度実践指定校)

考える力・表す力を高める N I E

1 はじめに

本校では、協働型学校評価にかかわる重点目標である「子供たちの考える力や表す力の育成～ことばの力をみがいて～」や、校内研究テーマである「言語活動を通して思考力や表現力を育てる」など、子供たちの考える力や表す力を高めたいと考え、研究を進めている。

N I E 実践指定校 1 年目の 27 年度は、「ことばの貯金箱」をはじめとする新聞に慣れ親しむ実践に加え、新聞を用いた様々な実践を行った。また、思考力や表現力を高めるための、新聞を用いた授業実践についても全校で模索してきた。

2 年目の 28 年度は、「ことばの貯金箱」の活用を全校で継続しつつ、1 年目で成果のあった実践から、児童の実態や指導の方向性に応じたものを各学年で選択し、思考力や表現力の育成と関連させながら行ってきた。

2 実践の概要

(1) 環境づくり

【N I E コーナーの設置】

校舎 2 階中央階段の踊り場に「N I E コーナー」を設置し、各学年での活動の様子や作品などを掲示し、紹介した。



(2) 教員研修

【オリエンテーション】

27 年度 4 月初旬に河北新報社の N I E 教育プロジェクト事務局の方々をお招きし、研修会を開いた。N I E のねらいや活動を丁寧に教えていただいた。

【現職教育】

4 月には、渡邊裕子先生を講師としてお招きし、

「ことばの貯金箱」を学んだ。先生方が実際に活動することで、その楽しさや魅力を学ぶことができた。



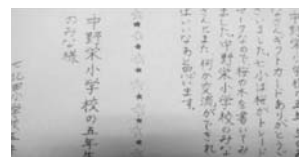
(3) N I E 週間

12 月に行われる授業参観に合わせて全校一斉に N I E 週間を設け、保護者にも活動の様子を紹介した。全校児童の「ことばの貯金箱シート」を廊下に掲示し互いの作品を見ることもできた。「ことばの貯金箱シート」を通じて、学級や学年をまたいだ交流を行うことができた。



(4) ギフトカードによる交流

「ことばのギフトカード」を作成し、七北田小学校の 5 年生にプレゼントすることで、温かい交流ができた。



(5) 小学生新聞の購読

一般紙だけでなく、小学生でも手に取りやすい小

学生新聞を1か月間1部
ずつ全クラスに配布し購
読した。

児童はより興味を持ち
読んでいた。



(6) 27年度 新聞の活用
【全校でのことばの貯金箱】



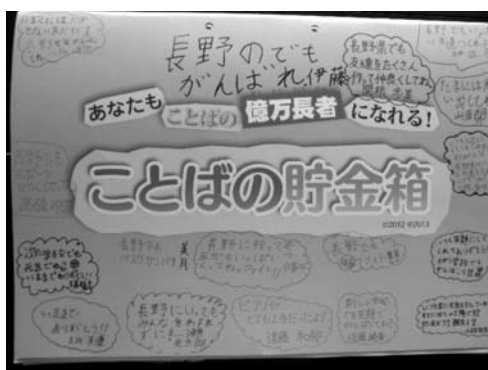
全校を代表して、5年生児童が渡邊裕子先生に「ことばの貯金箱」をご指導いただいた。ことばや新聞記事に興味を持ったり、自分の思いを表現したりし、楽しく活動していた。

本校では、「ことばの貯金箱シート」を作成するだけでなく、2年生では、テーマを決めて独自のNIEシートを作成し、1年生では、箱に貼り付けて「ことばの貯金箱ボックス」を作成した。3年生では、新聞の投書をもとに、「2学期の目標をつくろう」という活動をした。このように、各学年の工夫が全校に広がり、多様な形での「ことばの貯金箱」を実践することができた。

また、授業参観で保護者の方と一緒に「ことばの貯金箱」の活動をし、その良さを伝えることができた。

親子で一緒に新聞記事を読む「いっしょに読もう新聞コンクール」に応募し、受賞した家庭もあった。

【ことばのプレゼント・ギフトカード】



5年3組では、長野県に転出する児童へ向けて、激励のメッセージ集を「ことばの貯金箱」で作成した。

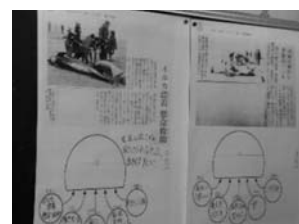
児童は、転出する友達のために温かいことばを贈ろう、自分の気持ちをしっかりと伝えようと活動に取り組んだ。このメッセージ集は河北新報社が主催する「新聞スクラップコンクール」において、学級賞を受賞することができた。



「ことばのギフトカード」では、七北田小学校の児童だけでなく、家族や他学年児童との交流も行った。

「栄っこ会」という他学年と遊ぶ会の後には、6年生から1年生へ向けて「ことばのギフトカード」をプレゼントした。「ありがとう」、「また遊ぼう」などの温かいことばをもらい、1年生はとてもうれしそうな様子だった。

【教科授業とのかかわり】



4年国語科「新聞をつくろう」ではNIE事務局の方に「見出しの作り方や取材の仕方」などを教えていただいた。読み手の興味を引くような新聞記者の工夫や努力に気付き、自分たちの新聞づくりに生かすことができた。

5年国語科「新聞記事を読み比べよう」や社会科「社会を変える情報」では、最近あった出来事の記事を活用し、そこから自分の考えを表現したり、自分のあり方を見つめ直したりする授業実践をすることができた。

また、児童が「宮城のギモン」を考え応募し、河北新報のページに載せていただいた。

6年学級活動「修学旅行新聞をつくろう」では、修学旅行前に河北新報社の方から「新聞記者の七つ道具や取材方法」を教えていただいた。国語科「投書を読み比べよう」では、授業で書いた投書を実際に投稿するなどの活動も行った。

(7) 28年度 新聞の活用

【1年：ことばの貯金箱】

ひらがなやカタカナの習熟が終了した2学期から、「ことばの貯金箱」に取り組んだ。各家庭での新聞購読も減少の傾向の中、新聞を初めて開く児童もいた。

1年生にとっては、ニュースを伝えるという本来の役割を知るよりも、まずは新聞に興味を持ち、目を通すことが大事であると考え、大きな見出しから習った文字を探したり、目を引くような写真や漫画を切り取ったりする経験を重視した。

児童たちは楽しんで新聞と接することができた。



新聞の絵や写真に注目させることで、新聞に興味を持って好きな写真や気になる絵を切り取る学習に取り組むことができた。

自らテーマを決めて絵や写真を集め、きれいに飾れるよう彩りや形にも工夫を凝らし、絵や写真を選ぶことができた。



小学生新聞を使うことで、四コマ漫画やイラスト入りの説明書き、カラーの写真・絵をヒントにして記事を読むことができた。

【2年：ことばの貯金箱】

昨年に引き続き、「ことばの貯金箱」に取り組んだ。広告の絵やイラスト、記事にかかわる写真に興味を示し、次々と切り取っていた。

切り取ったものを見て思いを膨らませ、関連付けたり、ことばや絵を書き足したりして、お話を作り、「ことばの貯金箱シート」に表現していた。記事やイラストを選ぶ時には、独り言のように自問自答したり、友達に話しかけて反応を見たりするなど、貯金箱シートに表していること以上に、児童が能動的に新聞に向き合う様子が見られた。



【3年：図工・ことばの貯金箱、朝のスピーチ】

新聞を利用し「ことばの貯金箱」に取り組んだ。新聞購読をしていない児童は、学校に配布される新聞を利用し、自分の考えたテーマに合った見出しや写真を選択し、ことばの貯金箱に入れておいた。普段、新聞に触れていない児童もこういう機会を持つことで、新聞に興味を持ち、楽しんで取り組んだ。

また包装紙を利用し、そのテーマに合った雰囲気作品を仕上げた。皆の持ってきたたくさんの包装紙を共有したことで、それぞれのイメージに合った作品に仕上がった。



包装紙の代わりに新聞紙を好きな形に切って表現した児童もいて、アイデア豊かに新聞を利用する姿が見られた。

小学生新聞を購入したことで、その新聞を読み自分が伝えたいニュースを選び、それを朝のスピーチとして利用した。徐々に新聞に触れる機会が多くなってきて、進んで新聞から情報を得ようとする児童が増え、新聞に親しむようになった。



朝の会での日直のスピーチでは、小学生新聞からの話題にした。自分の気になった話題を皆に話した。



【4年：各教科・総合的な学習「NIEワークシート」】

毎週水曜日に発行される「読売ワークシート」をダウンロードし、朝活動の時間や各教科との関連で取り組んだ。これは児童が興味・関心を持ちそうな新聞記事を題材に、読売新聞が小中学生向けに作成するワークシートである。

中野栄小4年生では、総合的な学習「サケを育てよう」との関連で、カラフトマスの遡上に関するワークシートに取り組んだり、福祉学習との関連で、駅のホームでの危険性などを学んだりした。

児童はじっくりと新聞記事に書かれていることを読み取り、問題に答えていた。また、発展的な問題では、自分の考えたことや知っていることを豊かに表現していた。読み取りの力、考える力、表現する力を社会的事象に興味を持ちながら、かつ楽しみながら学ぶことができた。



北海道・知床半島の川でカラフトマスが遡上する記事。文章だけでなく、写真から読み取ったり、狙われるカラフトマスと、狙うヒゲマ両方の気持ちを想像したりできた。

ことばの貯金箱では、熱心に新聞を読み、一人一人が興味を持った記事を選んだ。

目の不自由な方が駅のホームから転落死する記事。目の不自由な方へ寄り添う気持ちが芽生えとともに、このような事故を防ぐために自分に何ができるかを考えた。



【5年：国語「新聞記事を読み比べよう」】

河北新報の記事を用い、写真と一緒に掲載されている記事から見出しを考える活動を行った。

「駅前的大型店開店」、「ブルーベリー収穫」など、児童が内容を把握しやすい記事を取り上げた。

まずは個人で見出しを考えさせた。次にグループで話し合い、黒板に見出しを記入した。



授業で使用した、見出しを隠した新聞記事



グループで考えた見出しを書く様子

見出しを考えさせることで、児童は意欲的に記事を読み、内容を把握しようとしていた。また、考えた見出しを全体で共有したことで、互いの見出しの良さや他の見方に気付くことができた。

1 班の「仙台パルコ2がオープン 人々の喜びの声」がいいと思う。①の新聞には、うれしい、楽しみにしていたなど喜んでいるような声がかいてあったから。

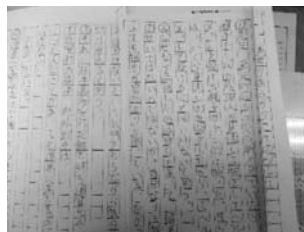
3 班の「パルコ2で笑顔たくさん」がいい。写真からも明るい表情が分かるので、様子が伝わりやすいと思ったからです。

全体で共有後、児童がノートに書いた感想の一部

【6年：国語 投書を書こう・資料を生かして呼びかけよう】

・「投書を読んで意見を書こう」

国語の「投書を読んで意見を書こう」の学習では構成を確かめた後、実際に河北新報に載っている投書を読みながら、主張や根拠の述べ方を学んだ。そしてより説得力のある述べ方を選び、実際に投書を書いてみた。推敲の場面では、ノートに書かれた下書きに



友達からコメントをもらい、それを基により説得力のある投書になるよう書き直しを重ねた。

実際の投書を読むことにより、述べ方の工夫が

分かり、投書の題材を選ぶのにも役立てることができた。

・「資料を生かして呼びかけよう」

国語の「資料を生かして呼びかけよう」の学習では、環境問題に関わる資料を集める中で、図書資料だけでなく、新聞記事を資料にして、呼びかける文章を書く活動を行った。特に、豪雨による災害や最近の異常気象についての新聞記事は、図書資料よりもデータが新しく、説得力のある資料になった。

また、新聞記事の中に有識者の見解も載っているので、子供たちが自分の意見をまとめる際に参考になった。

・「ことばの貯金箱」

「感謝」というテーマを設けて、ことばの貯金箱の活動を行った。5年生の時から継続して続けていることばの貯金箱の活動は、相手意識を持って作る言葉のメッセージカード、テーマを設けて作る「思いを伝えることばの貯金箱」、自由に作る「ことばの貯金箱」と様々な形態で行ってきた。今回は震災の年に入学した6年生に、この6年間の感謝の思いを込めたことばの貯金箱の活動に取り組みさせた。



感謝の思いを家族に宛てて、友達に宛てて、子供たちは思い思いに新聞を切り抜いてボードを作成していった。

感謝の思いを家族に宛てて、友達に宛てて、子供たちは思い思いに新聞を切り抜いてボードを作成していった。

【わかき学級：ことばの貯金箱】

朝の活動に新聞を切り抜き、ストックした切り抜きをまとめて台紙に貼る活動を繰り返し行った。

昨年5月に5年生が特別授業としてことばの貯金箱を教えてもらったときは、自由な発想で台紙からはみ出して作るようなダイナミックな作品を作り効



(写真)

果を上げた。

しかし、繰り返し活動していくうちに、4コマ漫画を貼って終わりのような安易に作る様子が見られたので、ことばや写真に目を向けるように声掛けした。

今年度の回数は少し減ってしまったが、テーマを決めて作成するように指導したことが効果的だった。例えば電車の好きな児童が、「真田丸」の特別列車の記事を貼ってまとめたり、兄が高校で野球部の児童が宮城県高校野球大会の記事をまとめたり、天気予報に興味を持って切り抜いて楽しくまとめたりと、それぞれが好きなことについて、自由に楽しくまとめて活動する姿が見られ、成長が感じられた。



自分の興味のあることに注目して楽しく活動できた。もう少し新聞の文字や言葉に注目させたかったが、漢字が難しいこともあり、今後の課題である。



しかし、楽しく新聞に関われたことが何より大きな成果であった。今後も新聞に親しみ、新聞を有効に活用していきたい

3 終わりに

【成果】

- NIE活動により、言葉への興味・関心が高まるとともに、言葉の使い方に一層気を配る児童が増えてきた。
- 全校で取り組んだ「ことばの貯金箱」の実践により、新聞や記事そのものに興味を持ったり、自分の思いを進んで表現したりしようとする児童が見られた。
- 学校でのNIE活動だけでなく、自分や家族と見つけた新聞記事を用いた学習を自主学习ノートにしたり、NIEノートを作って自主的に毎日取り組んだりする児童が見られた。また、家庭で新聞に触れる機会が増えた児童もいた。
- 身近に新聞があることで、自分や社会を取り巻く出来事に興味を持つようになった。
- 渡邊裕子先生や河北新報社の方から教えていただいた内容をもとに、新聞を用いた効果的な授業や楽しい活動を、先生方が工夫して取り組んでいた。
- 校内研究と関連させることで、新聞を用いた読み取りの授業や、自分の考えを書く授業が展開できた。考える力や表す力を高める授業に新聞を効果的に活用できた。
- 新聞記事の比べ読みや投書、新聞ワークシートなどの活動を通して、児童にとって読むことや考えることが習慣となっていた。

【今後に向けて】

27・28年度と、2年間多くの実践をしてきたが、最も大切なのは『児童が楽しく新聞に関わること』だと感じている。「チャリーン！」と笑顔でことばの貯金箱を楽しむ姿、興味を持った新聞記事を夢中で読む姿、記事の内容やそこから考えたことをうれしそうに友達に伝える姿が多く見られた。

各教科での授業づくりにおいても、新聞を活用できた事例が多くあり、思考力や表現力を伸ばす効果的なツールとして取り組むことができた。

今後に向けては、記事の内容を読んだり、その内容を読み取り、意見を考えたりする場合、学年や発達段階に応じた新聞、新聞記事の選定をする必要があると感じている。漢字や語句の意味が難しく読めないということのないよう、教師が緻密に教材研究をする必要がある。今後も、『新聞に親しむ』、『授業に活用する』ことを意識していきたい。

(担当 教諭 根岸 健太 佐藤 佑紀)

未来を切り開いていく力を育むN I E

1 はじめに

新聞紙面には、世の中の様々な情報が日々掲載されており、「生きた教材」として私たちの知の欲求を満たし、生活に役立っている。学習指導要領には、指導すべき内容として「新聞」が明確に位置付けられ、複数の教科に盛り込まれている。また、仙台市教育委員会は、今年度の「杜の都の学校教育～推進の指針と指導の重点」の中で、「N I E教育の充実」を掲げている。

これらを踏まえ、本校では、言語活動の充実を図るとともに、社会への関心や情報活用能力を高め、児童自ら未来を切り開いていく力を育てていくことをねらいとして、全学年でN I Eの実践に取り組んでいる。昨年度に引き続き、今年度も「ことばの貯金箱」に全校で取り組んだ。また、学年ごとに児童の実態に応じて、新聞活用学習、新聞機能学習、新聞制作学習に取り組んだ。

2 実践の概要

(1) 新聞に親しむ環境整備

児童がいつでも自由に新聞を手にとって読めるように、校舎2階の多目的スペースに新聞閲覧コーナーを設置している。新聞を広げて読めるように、大きいサイズの長机やテーブルを複数用意し、その下に新聞社ごとに分けて新聞保管用ロッカーを置いている。また、職員玄関前にN I E購読用の新聞入れを置き、毎朝そこから新聞コーナーに運んで整理する仕事を広報委員会が担当している。



【新聞閲覧コーナー】

N I E年間購読の一つに毎日小学生新聞を選択し、地域の方から寄贈された朝日小学生新聞、学校独自で購読した読売こども新聞、河北新報社のかほピョンこども新聞、産経新聞社のおやこ新聞など子供向けの新聞を意図的に多く揃え、小学生でも新聞を手に取りたくなるように工夫している。また、古新聞コーナーを設置し、新聞を購読していない児童が自由に持ち出して使えるようにしている。



【古新聞コーナー】

さらに、新聞コーナーの近くにN I E掲示板を設け、新聞記事や新聞ワークシート、新聞記事スクラップなどを掲示している。熊本地震やリオオリンピックなどのタイムリーな記事は、通りかかった児童が興味を持って読んでいる様子が見られた。七北田の地域や本校卒業生の羽生結弦選手に関する過去の新聞記事は、新聞記事データベースから検索して掲示した。また、掲示委員会では、「N I Eコレクション」と題して、新聞記事のスクラップを定期的に貼り替えながら掲示している。地域の方から寄贈され、定期的に届く「朝日写真ニュース」も掲示し、カラーでインパクトのある写真が、児童の目を惹きつけている。



【N I E掲示板】



【掲示委員会N I Eコレクション】

(2) 全校で取り組む「ことばの貯金箱」

本校では、新聞に親しみながら言語活動の充実を図る取組として、実践指定校になる前の平成26年度2学期から、全校で「ことばの貯金箱」に取り組んでいる。平成26、27年度の校内研修で、NIEコンサルタントで東北福祉大講師の渡邊裕子先生から、ことばの貯金箱やことばのギフトカード、ことばの風船などについて、全職員で学んできた。

実践にあたって、専用のシールを貼った「ことばの貯金箱」(ハンドル付き樹脂製ボックス)を全校児童に持たせた。朝のスキルタイム(NIEタイム)の時間に、新聞から気に入った言葉や写真を自由に切り



【新聞から言葉や写真を切り抜く1年生】

抜き、ことばの貯金箱に貯めていく。

児童は、ことばの貯金箱の中から言葉を選んで台紙(B4判の色上質紙)に貼り、文字や絵などを自由に加えて表現する。感性や情緒の側面を大切にするため、あえて表現に制約を加えないようにしている。完成後に友達同士で紹介し合い、お互いの作品を認め合える場を設定しているクラスもある。台紙に貼る時間は、国語の時数として年間で2時間確保し、カ



【言葉を選んで台紙に貼る6年生】

リキュラムに位置付けている。

本実践により、新聞に興味や関心を持つ児童が、確実に増えてきている。また、新聞から言葉を集めて選んだり自分の言葉を書き加えたりする力(語彙力)や、自分の思いや考えを広げ深めて対話する力(表現

力)、言葉を通じて積極的に友達や社会と関わろうとする態度(学びに向かう力)などの資質や能力が育ってきている。

なお、ことばの貯金箱の取組は、昨年度12月、毎日新聞朝刊のNIE欄で紹介された。また、今年度の河北新報スクラップ作品コンクールには、全校児童が出品し、学校賞を受賞した。



【友達に作品を紹介する6年生】



【6年生の作品】

(3) 「ことばのギフトカード」で他校と交流

ことばの貯金箱の台紙としてはがき(大判120mm×235mm)を使うと、「ことばのギフトカード」として贈ることができる。目的意識や相手意識が明確になり、どの児童にも意欲の向上と主体的な取組が見られるようになる。本校では、昨年度の3月に、中野栄小学校と5年生同士が交流した。



【中野栄小に送った5年生のギフトカード】

また、今年度6月には、4、5、6年生が、熊本地震で被災した熊本市の小学校(日吉東小、碩台小)へ、励ましのメッセージを込めたことばのギフトカードを贈った。両校は、熊本県のNIE実践指定校であり、渡邊裕子先生と熊本日日新聞社の協力を得て交流が実現した。

どの児童も、自分の作ったギフトカードが実際に熊本に届けられると聞いてモチベーションを高め、いつも以上に真剣に言葉を選び、心を込めて丁寧に仕上げている様子が見られた。

作成した児童からは、「熊本の人たちに自分の思いを伝えることができ、元気づけることもできたと思います。」「熊本の小学生に温かい言葉を贈れたと思うと、私もいい気持ちになって、良い勉強だったと思います。」「復興の支えになっているとしたら、このような取組をもっとやりたいです。」などの声が聞かれた。

なお、この取組は、河北新報と熊本日日新聞で紹介された。



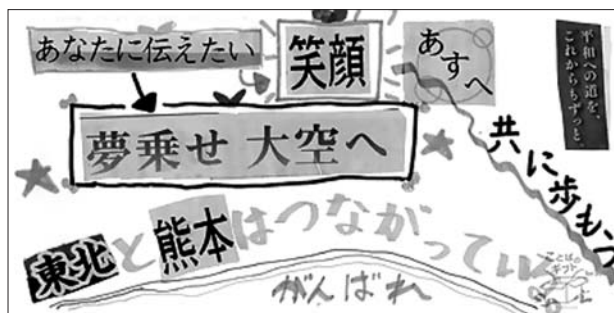
【2016年6月14日 河北新報朝刊】



【ことばのギフトカード4年作品】



【2016年7月30日 熊本日日新聞】



【ことばのギフトカード5年作品】



【ことばのギフトカード6年作品】

その後8月に、両校からお礼の手紙が届いた。碩台小学校の4年生からは、34通の手紙と8枚の壁新聞が、日吉東小学校の5、6年生からは、147通のメッセージカードが届いた。その中には、「ぼくの友達が住んでいたアパートは1階がつぶれました。友達を外にいたので助かりました。」と書かれたものや、避難所の写真を貼ったものなどがあり、熊本地震の被害の大きさが伝わってきた。また、「お手紙に、頑張れ、元気という言葉があったから、僕たちも頑張ろうと思った。」「仙台の人たちも笑顔を大切にしてください。」など、感謝の言葉や東北の被災地を気遣う言葉もたくさん見られた。

メッセージを読んだ本校児童は、「僕たちのメッセージで、熊本の皆さんが笑顔になれたのかなと思った。少しでも力になれたようで良かった。」「遠く離れているけれども、被災地の熊本と宮城で、お互いに頑張ろうという気持ちの一つになった気がします。」などと感想を話していた。

熊本からのメッセージや壁新聞は、夏休み明けの朝会で全校児童に紹介し、その後4、5、6年の各クラスで回覧した。また、本校の児童会は、震災復興プロジェクトの一環として、熊本の両校にお返しメッセージを贈ることを企画した。11月に全校児童がメッセージを書き、クラスごとに四つ切り画用紙に貼って作成した。そして、12月の復興プロジェクト朝会で全校に紹介した後、冬休み明けに熊本へ送付した。



【お礼のメッセージに目を通す4年生】



【壁新聞を読む4年生】



【2016年10月9日 河北新報こども新聞】



【版違いの新聞を提示】



【復興プロジェクトで作成したメッセージ】

(4) 新聞を丸ごと活用した国語の学習

小学校学習指導要領国語には、第5学年及び第6学年「C読むこと」の言語活動例として、「ウ編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと」が挙げられている。

5年国語「新聞記事を読み比べよう」(東京書籍)の単元では、メディアである新聞を取り上げ、新聞の特徴や編集の仕方、記事の書き方や写真の役割などを理解し、二つの新聞記事を読み比べて書き手の意図を読み取ることをねらいとしている。単元の導入として、授業当日の新聞を児童に1部ずつ配付し、新聞探検の授業を行った。



【新聞探検の様子】

まず、1日分の新聞を1ページから最後のページまでめくり、新聞の大きさ、重さ、ページ数、内容等を実感していた。

次に、新聞に赤鉛筆で印を付けながら、題字、日付、号数、面の呼び方などを確認し、新聞の構成について理解した。

そして、ソチ五輪開会を報じた版違いの新聞を見て、時間を追って写真を差し替えていることに気付いた。児童は、新聞社が読者に最新の情報を届けようと努力していることに感心していた。

それから、同じ発行日の北海道新聞と河北新報のスポーツ面を読み比べた。プロ野球の同じ試合を取材しても、新聞社により記事の内容や写真が異なることに気付き、その理由を考えた。児童は、新聞社が読者を意識し、手に取って読んでもらえる紙面づくりを工夫していることを実感することができた。



【複数の新聞を提示】

さらに、指定された記事の範囲を赤鉛筆で囲み、新聞の読み方に慣れていった。記事の5W1H、見出し、リード、逆三角形型の本文、写真、キャプションなどについて、具体的に理解できたようだ。教師は、読めない漢字や難しい言葉は、とばして読んでもよいことを助言した。

その後、記事を選ぶポイントを知り、一番気に入った記事を切り抜いてワークシートに貼った。数名の児童が、切り抜いた記事と選択のポイントを紹介し



【NIE防災学習】

た。最後に、大人はどうして新聞を読むのかを考え、ワークシートに書いた。児童数名が発表し、新聞を読むことのよさを確認し、本時の学習内容を振り返った。児童の主な感想は、以下の通りである。

- ・新聞のいろいろな工夫を知ることができ、「新聞記事を読み比べよう」の学習に役立った。
- ・教科書にのっている言葉が、新聞のどこにあるかを知ることができた。
- ・新聞の紙面のことや逆三角形のことなど知らなかったことが分かり、教科書の授業が分かりやすくなった。
- ・新聞の見出しがこんなに工夫をされているのだなあと思った。この授業のおかげで、これから新聞を楽しく読めると思う。

本実践の成果として、以下の3点が挙げられる。

- ①教材文中の「コラム、解説、投書」などの言葉は、教科書を読んだだけではイメージしにくいのが、実際の新聞で具体的に理解させることができ、単元のねらいに迫る手立てとして有効であった。
- ②児童全員に授業当日の新聞を持たせたことで、タイムリーな記事が児童の興味・関心を高め、最後まで意欲的に学習に取り組ませることができた。また、「自分だけの新聞」として自由に読んだり切り抜いたりさせることができた。
- ③新聞の見出しや写真の重要性を学んだことで、その後の学習新聞作りに役立てることができた。

(5) 新聞記者による防災学習

本校では、毎年秋の土曜日に、七北田中学校や地域住民と共に防災訓練と防災学習を実施している。昨年度と今年度、5、6年生を対象にして、河北新報社防災・教育室主任の大泉大介さんを講師として招き、防災学習を行った。

大泉さんからは、東日本大震災後に被災地の南三陸町を取材した体験談や、記憶・記録を次代につなぐ「震災アーカイブ」の取組について、新聞記事や写



【5年「総合的な学習の時間」に作成した新聞】

真等も資料としながら、具体的に分かりやすい説明があった。また、平成27年9月の宮城豪雨で大崎市を流れる渋井川の堤防が決壊し、古川西荒井地区で浸水被害を受けた住民から取材した情報を時系列で提示し、備えることの重要性や学び実践することの大切さを児童に訴えかけた。

新聞記者の説得力ある話を熱心に聞き、児童は自然災害や日常生活の在り方に再度目を向け、主体的に防災や減災について考えることができた。

なお、5・6年理科専科の教員も、地震や台風の記事を授業で紹介し、理科室の掲示に活用している。

(6) 写真・記事Good賞

5年生は、新聞社のカメラマンを学校に招いて表彰する「写真・記事Good賞」に取り組んだ。このNIEの取組は、国語と総合的な学習の時間に位置付けた。

まず、自分で選んだ新聞記事や写真の効果を考え、書き手の伝えたいメッセージを読み取ったり、興味を持った理由を書いたりしながら、個人ごとにワークシートにまとめた。次に、児童一人一人が記事や写真を学級内で紹介し、よいと思ったものに投票した。そして、各学級の代表が学年全体で発表して投票を行い、七北田小学校5年生としての「写真・記事Good賞」を決定した。その後、河北新報社編集局写真部主任の庄子徳通さんを学校にお招きし、表彰式を行った。

児童は、実際にカメラマンの話聞いたことで、働くことに関心を持ち、仕事をすることの喜びや苦労、願いや思いについて考えることができた。また、カメラマンの思いや願いを知ったことで、新聞の写真や記事には書き手の意図や工夫が込められていることを実感することができた。

(7) その他

3年生は、社会「はたらく人とわたしたちの暮らし」の学習の一環として、河北新報印刷センターを見学した。夕刊印刷の様子を見たり、パネルなどの展示物で学んだりした。児童は、ロール紙の大きさや輪転機の速さに驚いていた。

4年生は、国語「みんなで新聞を作ろう」の単元で、実際の新聞を一人1紙使って見出しやレイアウトの工夫を学び、気に入った記事のスクラップを行った。本単元で習得した学習内容は、社会の清掃工場や浄水場見学後の学習新聞作りで活用できた。また、4年担任は、社会の教材研究で、新聞データベースや河北



【選んだ写真を紹介する5年児童】



【カメラマンを招いての表彰式】

ライブラリーを積極的に活用した。

6年生は、国語「新聞の投書を読み比べよう」の単元で、新聞の投書欄を活用した。6年担任は、かほくワークシートや新聞データベースで検索した記事を児童に提示し、教材として有効に活用した。

また、昨年度に引き続き、新聞コーナーに新聞ワークシートを置き、児童が自由に持ち帰れるようにした。記入したワークシートを入れるNIEポストを校長室前に準備し、校長先生が採点して児童に返却した。この取組は、昨年1月の読売新聞朝刊教育面で紹介された。

3 おわりに

全校で「ことばの貯金箱」に取り組んだことが土台となり、児童が日常的に新聞に親しみ活用する学習環境が整い、「ことばのギフトカード」による他校との交流にも発展することができた。

12月に教員対象にNIEアンケートを実施したところ、次年度も「ことばの貯金箱」や新聞活用に取組んでみたいという回答がほとんどであった。

今後も校内でNIEを推進し、児童自ら未来を切り開いていく力を育てていきたいと考える。

(担当 教諭 今藤 正彦)

情報を読み解き、発信することができる生徒の育成

1 はじめに

本校は利府町の西側、仙台市に隣接(岩切の東側に当たる)した地区にある。比較的新しい学校である。学級数は1年生から順に平成27年度4・3・4、平成28年度4・4・3、両年度とも特別支援2となっている。学区にはグランディがあり宮城県の大きな大会や日本、世界規模の催し物が開かれており、大きく世の中を眺めることができる環境にある。新興住宅地を抱え、保護者の多くは仙台市に勤務しており県内外から転居してきた家庭も多く、子どもの教育に関しての関心が高い。生徒は明朗・穏和であり、学習や行事に積極的に取り組む姿が見られる。学習に対しては概ね関心が高く、理解力に優れている。生徒を成長させようとする教師側からの働きかけに十分に応える。

内外の変革の中に生きる中学生に新聞を通して世の中の動きに関心を持たせ、現状を理解させ、未来に確固たる考えを持たせるために始めたNIE活動は2年を終了しようとしている。実践校として1年目は新聞になじませる活動、2年目は新聞を活用する活動を考えて実践してきた。本稿では特に社会科での実践を中心に記述する。

2 ねらい

新聞を活用することで、世の中の動きに興味を持たせる。活動を通して、生徒に読みとる力、考える力、発信する力を付けさせる。

3 昨年度の実践

(1) 実践内容

①新聞購読実績

2015年11月～2016年2月 4ヵ月で河北、読売、毎日、朝日、日経、産経を購読

②NIEコーナー

新聞6紙は3階図書室にコーナーを設置し、閲覧が自由にできるようにしており、毎日100人を超える生徒が利用する図書室で、生徒は昼休み等の休憩

時間に新聞に親しんでいた。ストックしている過去の新聞を取り出して記事を探す積極的な生徒もいる。新聞の



番組欄や4コマ漫画、スポーツ面だけでなく、コラムや書評、投書を楽しみにして毎日読んでいる生徒も多かった。折り込み広告に興味を示す生徒もいた。また、図書館のコーナーだけでは新聞を読む生徒が限られてくるので、新聞を多くの生徒に親しませるために期間を決めて1年生から3年生までの13学級に毎日6紙ずつを教室の一角に置き、いつでも閲覧できるようにした。



③授業での新聞の活用

社会科、国語科、道徳等で新聞を活用した。

(2) 主な実践

①社会科での新聞スクラップ作り

ア 目的：新聞を身近に感じさせ、新聞の読み込みと話し合い活動を通し、生徒に社会的事象を認識させ、主体的に判断する力を養わせる。

イ 対象：2年生3学級

ウ 実践

・スクラップの大きさ：模造紙半分

・スクラップの対象：12月1日～1月10日の

6紙新聞記事

- ・スクラップへの記載事項：記事3本、スクラップに適切な題名、作った生徒氏名、使用した記事の新聞名と日付、記事それぞれに班としての意見や感想を記入。
- ・発表の形式：学級での発表と展示発表
- ・授業計画：

1時間目 個人ごと三大ニュース選定

教室で6つの生活班ごと、それぞれに同じ日付の6紙の新聞を配った。その中から自分が気に入ったニュースを理由付で選ばせ、学習プリントに記入させた。新聞を学校で初めて読んだ生徒もいるのでジャンルを絞り込

まず、新聞に載っているものなら何でもよいと

いう形で行った。その後、スクラップをつくるために気に入ったジャンルをアンケートに記入させた。



2時間目 班ごとの三大ニュース選定

前時のアンケートを元に4人までの班をつくり、新しい班で三大ニュースを決めさせた。その記事を切り抜きスクラップ作成させた。

3時間目 スクラップ作成

スクラップ作成めざして活動させた。

4時間目 スクラップの活動まとめ

前半で各班ごとに完成したスクラップをクラス全体で趣旨説明させ、後半に本学習のまとめをさせた。

② 国語科でのコラムの読み取り

ア 目的：新聞記事のコラムを読んで、その内容を文章で表現させ、他の生徒に対し発表する力を付けさせる。

イ 対象：1年生4学級

ウ 実践：

新聞のコラムを印刷して生徒に配り、読みとった筆者の主張を書き出し、感想を記入するという活動をおこなった。その後、学級で記入したプリントを読んで共有した。

③ 社会科での新聞記事を使った授業

ア 目的：新聞記事から社会の動きに触れ、興味関心を高させめる。

イ 対象：3年生4学級

ウ 実践：

社会科公民的分野の学習でブラック企業や軽減税率等の新聞記事をOHPシートで映し出し全員に読ませ、そこから授業を展開していった。それに対する感想を書かせ、発表させる活動も行った。



(3) まとめ

成果として、スクラップの学習では、実践前後のアンケート結果より、新聞を身近に感じた生徒が増えたことがわかった。この活動を行うことで、「新聞をよく読んだら面白かった。家にある新聞を読んでおけば良かった。食わず嫌いだった。」等の感想があげられた。また、本校には社会事象に興味・関心が高い生徒が多く、「テレビやネットで耳にした事件を新聞で読むことで自分の力で情報を得ることができ、それについて考えることができた。今後は新聞を読んで社会の動きを知りたい。」という生徒も多かった。新聞になじませ、社会現象に目を向けさせる良いきっかけとなっていた。新聞を購読していない家庭も多く、手にする社会面の記事から自分の健康に思いをめぐらせるなど、新聞に触れることで実生活にも役立っていた。他にも「活字とふれた活動が面白かった」「情報を主体的に収集できた。」「新聞記事で比較しながらの検討ができた。」等が挙げられた。

2年目は、新聞記事を使って思考させ言語表現させる授業の計画をたてる。そのためには、十分な時間の確保が必要となり、各教科の年間指導計画に、短時間で有効なN I E活動を位置づけられるように考えていきたい。

4 今年度の実践

(1) 実践内容

①新聞購読実績

2016年9月～2016年12月 前述4ヵ月で6紙を購読

②N I Eコーナーの設置

6紙は3階図書室において、閲覧が自由にできるようにした。昨年度は利用する生徒の学年が限られていたが今年度は全学年の生徒が昼休み等の休憩時間に新聞に親しんでいた。当日の新聞を閲覧するコーナーは図書室に設置しているが、過去の新聞ストックは1階3学年フロアに置いておき、それを読み返している生徒も多い。特に受験を控えた3年生には有効である。

③授業での新聞の活用

社会科、国語科、道徳、学級経営等で新聞を活用した。

(2) 主な実践

- ①社会科での新聞関係コンクール応募利用学習
- ②社会科での新聞記事の読み取り学習
- ③社会科での株式学習ゲームへの応用
- ④社会科での新聞トップ記事まとめ
- ⑤総合的な学習での河北春秋書き写し
- ⑥国語科での新聞学習
- ⑦道徳での新聞記事を資料としての活用
全学年
- ⑧学級経営での新聞記事の利用（下写真）
全学年



①～④までは1年目(昨年度)の実践で新聞スクラップに取り組んだ2年生が進級した3年生を対象に社会科公民的分野の授業の一環として行った。

① 社会科での新聞関係コンクール応募利用学習

ア 目的：各種コンクールへの応募を通して、3

年生社会科公民的分野で得た知識や考え方をこれから生きていく社会に生かす学習をさせる。生徒が社会に目を向け、物事を深く考えて自分の意見を持ち、それを表現する力を養わせる。

イ 対象：3年生3学級

ウ 実践：

社会科の時間を利用し、半年で、最大4つのコンクールに応募させた。新聞から得た情報をまとめる際、個人で考え、班で深め合い、また個人で考え、更に全体での発表を聞いて判断しなおし、応募作品を完成させていった。コンクールに応募する前に、その作品を見て公民としての自分の考えを確かなものにさせる時間も設けた。その際、応募作品の作者に自分の主張したいことを読み手に伝わるようにプレゼンさせた。

【夏休み前】昨年度の新聞を使って新聞記事の学習をさせた。

【夏休み】以下の2つから1つを選択させて宿題とした。

新聞記事コンクール

(河北新報社主催)

社会の動きから自分の意見を論述させた。

いっしょに読もう！新聞コンクール

(日本新聞協会主催)

新聞から興味を持った記事を切り抜き、家族や友だちに見せて意見を聞いたり話合ったりした上で用紙にまとめた。

【夏休み明け】宿題の代表的な作品を使って他の人の考えを知ったり記述の仕方を知ったりする学習をさせた。

【9～10月】

河北新報スクラップ作品コンクール

(河北新報社主催)

前年度行ったスクラップ活動をバージョンアップさせて個人でまとめさせた。



【12月】

参議院 70 周年記念論文募集
(参議院事務局主催)

現在の社会に対する自分の意見を表すことができるようにさせること。後述の活動と合わせ、これへの参加が最終目標になる。

② 社会科での新聞記事の読み取り学習

ア 目的：新聞記事を利用して現代社会を見る目を養わせる。まとめる力、発信する力を養成する。

イ 対象：3年生3学級

ウ 実践：

11月～12月に以下の3つをレポートにまとめる学習を行った。

i 【トランプさんがしようとしていることは】

まず、生徒たちがその頃毎日目にしていたトランプさんが2016年11月9日のアメリカ大統領選挙で勝利したことをうけてトランプさんがしようとしていることを各紙から探させて、班で議論させ、班ごとにボードにまとめ発表させた。さらにそれを元に考えを深める学習を行った。



ii 【安倍総理大臣がしようとしていることは】

次に日本の首相として安倍さんがしようとしていることを各紙から探させてトランプさんの時と同様に学習した。

iii 【国会議員になったらやりたいことは】

最後に、国会議員になったら実現したいことを自分で考えさせ、班で議論させ、レポートを書かせた。そのレポートを参議院論文に使わせた。

特に i について記述する。下のプリントを使って学習を始めた。

アメリカ大統領選挙に勝ったトランプさんは

姓 名 _____

1 トランプさんがしようとしていることは何か(個人で3つ)

1
2
3

2 それは実現可能か 理由も簡単に記入

1
2
3

3 トランプさんがしようとしていることは何か(グループで1つ)

1

4 これは実現可能か 理由は

1

上プリントの4番には主に次のようなことが書かれていた。

- ・メキシコとの国境に壁を作る
世界の中でもトップクラスの財力、武力があるから。
壁を作っても麻薬などの問題は解決しない。
移民に関しては「犯罪歴や麻薬密売人ら200～300万人が対象」と言っているので他の移民は安全だ。
- ・TPP脱退
オバマ大統領と違う考えだから。
加盟は義務ではないから。
激しい競争で職や生活に不安が増し米国人の8割が所得生活水準が金融危機前を下回るから

以上のようなことについて論点を整理した上で、学級で話し合わせることで深い新聞記事の読み取りと、発言で学級の生徒を納得させる力が養われた。

(生徒の感想から)

- トランプ氏はやりたいことがたくさんあるのだと再確認できた。新聞は難しい言葉もあるけど読んで得すると感じた。
- ニュースを見るとトランプさんは変な人かなというイメージだったけどアメリカのことを考えてのことなんだなあと思った。
- トランプの決断は凄まじく、行動力がある。これからのアメリカに変化があると思う。
- トランプさんが何をどのような目的でしようとしているのかがわかった。新聞には様々な情報が書かれているので、それを鵜呑みにせずに、自分の力で判断することが大切だと思った。
- 新聞記事を深く読みとるのは難しかったけどおもしろかった。
- ほとんど知らなかったことを考えることができて良かった。親とかと一緒にニュースを見たりしてもっとしれたらいいなあと思う。
- 新聞をたくさん読む良い機会になった。違う新聞で理由を書いていた他の班の発表を見て、新聞によってかかれ方が違うことを発見できた。
- 私はトランプさんを顔で判断していたのもっと新聞などを読んで長所と短所を見つけていきたいと思いました。
- アメリカの政策によって日本の経済貿易関係がひっくり返ることがわかった。自分の意志を持ち主張し伝えられるようになるまでたくさん情報をいろいろなところから調べていきたい。
- 新聞によって伝える内容が違うのだなあと思った。新聞やテレビの情報に振り回されず、しっかり自分の意見を立てることが大切と言うことを今回の授業でとても感じました。
- メキシコとの間に壁を作る理由はアメリカの人々が職を失わないようにするためだと初めて知りました

③ 社会科での株式学習ゲームへの応用

- ア 目的：新聞の有効活用
- イ 対象：3年生3学級
- ウ 実践：

10月から12月にかけて3年生社会科公民的分野で株式学習ゲームを週に一回行った。

株式学習ゲームとは日本証券業協会主催で、仮想所持金(1,000万円)をもとに、実際の株式売買と同様に、現実の株価に基づいて模擬売買を行い、参加期間終了時の保有株式の時価と所持金残高の多寡により投資成果を競うものである。ゲームの運営費、教材費等の費用は全て主催団体が負担してくれるので、ゲーム参加にあたって、学校、先生、生徒に金銭的な負担をかけることはない。詳細はネットで株式学習ゲームを検索してホームページを開いてみると知ることができる。

4人以内でグループを組ませ実施した。毎週新聞の株式欄を見せて、このゲームに参加させたが、無料配布の6紙が有効に機能した。使える新聞が多いことでグループ内でその時の社会の動きについて話ができ他の記事にも目を通すようになった。

(生徒の感想から)

- はじめは株の欄なんて読んだこともなかったし新聞すら多く読む方ではなかったのに、みんなと株式ゲームを進めていくうちに興味を持つようになり自分も経済に参加する一員だと思えるようになりました。
- 株式学習ゲームをやって、以前より新聞を読む機会が増えたとし、経済の流れも理解できるようになった。

④ 社会科での新聞トップ記事のまとめ

- ア 目的：毎日の時事問題を把握させるため
- イ 対象：3年生3学級
- ウ 実践：

社会科ノートに専用コーナーを設けさせ日付、新聞社名、トップ記事の見出し、記事の要約を書かせている。この活動をさせる前に、新聞記事レポートを週に一回提出させてまとめる力を付けてから実践させた。



社会科 NIE ワークシート 平成28年 月 日

新聞記事をレポートしよう

気になった新聞記事を選んで、内容をまとめて感想を書きます。

新聞記事を集めるテーマ（ 安倍総理大臣に関すること等 ）は

1 月 日 曜日の新聞記事から

2 新聞

3 見出し

4 記事の内容

SWIH (い/ほ/こ/て/ほ/ほ/ほ/ほ/ほ/ほ/ほ/ほ/ほ/ほ) をはつきりと

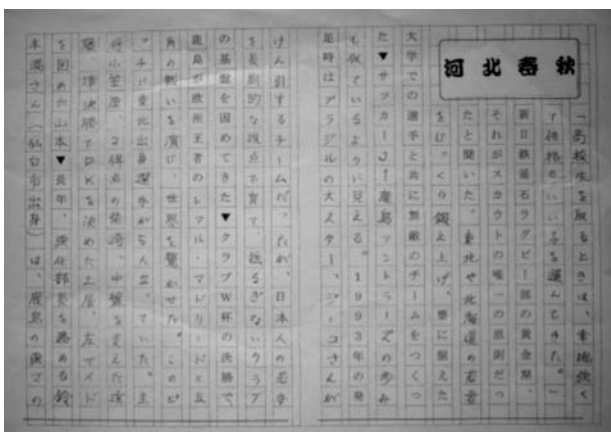
5 なぜこの記事を選んだのか

6 感想

授業のある日は毎日させている。新聞を購読していない家庭の生徒のために3年教室フロアの一角に前日までの新聞を置いている。

⑤ 総合的な学習の時間で河北春秋の書写し

- ア 目的：東北地方のタイムリーな話題を把握させ、短い文で言いたいことを表現させる力をつける学習をさせる。
- イ 対象：3年生3学級
- ウ 実践：朝の会前の時間を利用して、河北新報の河北春秋を全員に印刷し、全員に写し書きをさせた。受験を控えた中学校3年生にはとても有益だった。初めは「めんどうだ。」「時間がない。」「読めばいいじゃん。」などの否定的な意見



が8割を占めたが、学習を進めていくと「集中力が大切で眠気が吹き飛んだ。」「早く丁寧に書くのになれてきた。」「読むより書く方が理解できた。」などの肯定的な意見が増え、否定的な意見がほとんど聞かれなくなった。「書くことで作者の意図が分かるようになってきた。」「書くことで文書の構成に慣れてきた。」など学習の深まりが感じられる感想もあった。

左下のようなプリントを使って行ったが、河北新報から発行されている『河北春秋ノート』などを利用しても良いだろう。冬休み中にノートを買って毎日利用している生徒もいた。

⑥ 国語科での新聞学習

- ア 目的：生の文章に触れさせそこから国語的な力を養う。
- イ 対象：2・3年生7学級
- ウ 実践：新聞記事を読ませて、分からない言葉の意味調べをしてプリントに記入させた。段落の要旨をまとめさせ、「記事が何を読者に伝えたいのか」をプリントに記入させた。印象に残った広告をくりぬいて国語作品を作らせた。

5 まとめ

NIE実践校に指定されてNIE活動が始まった訳ではなく、新聞を活用した教育活動は毎日の教育活動の重要な部分を占めていた。世の中の情報をネットで得る生徒が増え、新聞を購読していない家庭が増加するなか、学級全員にタイムリーな話題で授業を創っていくため様々な手だてを講じているが、多くの新聞を使った授業の機会を得るために今回の実践に手を挙げた。今回、6紙を用意していただき、NIE活動を実践することで改めて新聞は生徒に世の中の動きに興味を持たせ新聞を活用することで様々な力を付けることができることを認識した。NIE実践によって世の中の動きに興味を持った生徒が増え、思考力と発信力をより身に付けさせるためには新聞が優れた教材であることを認識した。今後もNIE活動を授業の柱にしていくが、今回6紙を自由に使うことができる環境を与えられたことにより実践できた活動が多くあった。

NIE事務局の方々を始め関係者の方々に感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

(担当 教諭 菅原 恵)

宮城学院中学校における N I E 2 年目の実践報告

1 はじめに

本年度は、宮城県 N I E 実践指定校 2 年目としての取り組みを行った。2 年目の目標として、学校行事との関係を考慮しながら年間計画の中で最大限に新聞活動を展開できるように工夫をすること、学内だけの活動にとどまらず、学外活動への積極的な参加や新聞スクラップなど家庭での取り組みにつながるような働きかけを行うこと、の 2 つを掲げた。

2 年目は、初年度から継続した取り組みとして、「各クラスへの新聞配布」、「終礼時の新聞記事紹介」、「昇降口での新聞掲示」を実践した(詳細は「宮城学院中学校における N I E 初年度の実践報告」〈『N I E 実践報告書 第 27 号』宮城県 N I E 委員会、平成 28 年 3 月)をご参照ください)。それに加えて新しい取り組みとして、河北新報社主催の新聞記事コンクールへの参加、班ごとでの新聞記事紹介ノートの取り組みを行った。

また本校では N I E 実践指定校となる以前より朝新聞や『長崎新聞』作成の取り組みを長年継続しており、そうした日常の取り組みが N I E 実践指定校としての活動の土台となっている。

以下、本年度の新しい取り組み 2 つと朝新聞の活動について詳しく報告したい(『長崎新聞』作成の取り組みについては本報告書「宮城学院中学校における N I E 活動を取り入れた平和教育」を合わせてご参照ください)。

2 朝新聞の取り組み

朝新聞は、良い文章に触れ、語彙を増やすことを目的とし、年ごとに形式を工夫しながら本校で長年に渡って取り組んでいる活動である。

今年度は目的を世の中で起こっている出来事に対する興味や関心を高めること、「要約」を通して文章をまとめる力を養うこととし、形式を昨年度と大きく変えて、新聞社のコラムや新聞記事を読み、「要約」と「感想」・「意見」を文章でまとめる形式として行った。

生徒には自己流の取り組みにならないように、年

度当初に「要約」をする時の注意点として、①コラム・記事全体を一挙に要約をすることはできない、②要約は、段落ごとに要約していき、最後にそれをつなぎ合わせる、③内容が重なっている部分は一つにする、④いくつかの特徴や事実が並べられているときは、それを一言でまとめる、⑤要約は抽象的になるので具体性を失わないようにする、⑥場合によっては、章や節のタイトルに利用されている言葉などを利用して、内容を鮮明に浮かび上がらせる言葉を付け加える、という 6 項目(「論文教育センター Globe」HP を参考とした)を提示したうえで朝新聞の取り組みを開始した。



新聞記事の選定にあたっては、特定の分野に偏りが出ないようにと考え、複数の教員(校長顧問・教頭・教務主任・各学年主任)が持ち回りで準備している。また本校では国際理解教育に力を入れている。記事を選ぶ上では、その事前学習としての役割を果たすことを意図することもある。

今年度の具体例を少し紹介すると、第 1 回「マララさんにインタビューして 学校に通う年ごろのみなさんへ」(『朝日新聞』2015 年 9 月 25 日)、第 2 回「子どもを働かすのは犯罪 ノーベル平和賞サティヤルティさん」(『朝日新聞』2014 年 12 月 9 日)、第 3 回「広島が思い起こさせる戦争は罪なき市民に苦しみ」

(『朝日新聞』2016年5月27日)、第4回「原爆展示議論続く 米 投下判断や被害どう示す」(2016年5月19日)といった記事を選んだ。

朝新聞は試験期間や学校行事との兼ね合いを考えて、年間13回程度の頻度で実施をしている。実施日時は火曜日の朝礼後から礼拝までの時間(約15分)で行っている。日直の生徒が教員室のボックスから朝新聞プリントを持っていき、クラスに配布する。時間内に終わらなかった場合は宿題となる。生徒は朝新聞プリントを専用ノート(A4版)に貼り、その週の木曜日までに担任へ提出をする。担任は次の実施日までに目を通し、朝新聞ノートを返却する。

生徒は回数を重ねるごとに要約の仕方に慣れていている。また生徒の感想や意見から、世の中の動きに目を向けるきっかけとなっていたり、自分自身の生活を客観的に見つめる機会となっていることがわかれる。

3 新聞記事コンクールへの全校参加

今年度はじめて第22回新聞記事コンクール(河北新報社主催)の論説部門に全校生徒で参加をした。

生徒に取り組ませる時期は、忙しい日々の学校生活を考慮し、夏期休業中の課題とした。それを念頭に置き、教室への新聞配布の1月分を6月とした。

さらに休業中であることもあり生徒が自力で取り組みやすいように、①前年度の受賞者の例を参考にすること、②テーマを選ぶときは、結論がほぼ決まっていることではなくいろいろな考え方ができるようなテーマが論じやすいこと、③具体的な体験や経験を盛り込むと説得力がある文章になること、④自分の主張を裏付けるデータを新聞などを通して調べ、主張を裏付けたり深めたりする材料とすること、⑤自分の主張に予想される反論があればそれを取り上げ、その反論に対してさらにコメントすること、の5項目をアドバイスとしてまとめ生徒に提示した。

生徒のなかには夏期休業中の補習や部活で登校した時に直接教師にアドバイスを求めに来た生徒もいた。結果としてほぼ全校生徒全員が800字の論説をまとめ上げ、応募することができた。論説委員賞と優秀賞をあわせて6名が受賞し、対外的な評価をいただいたことで自信になったり、他の生徒の身近な目標となり、NIE活動の意欲の向上につながったと考えている。

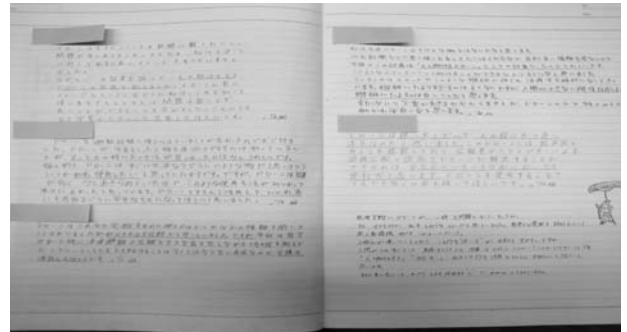
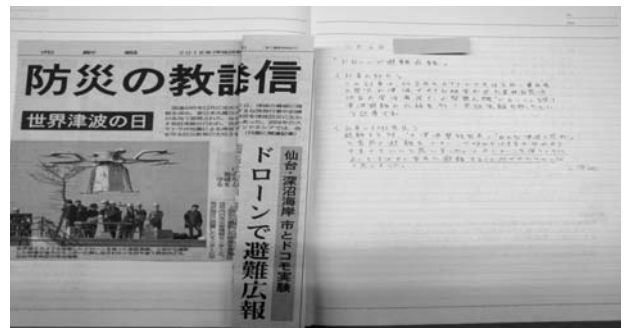
4 新聞記事紹介ノート

10月中旬からの約1ヶ月間、中学2・3年生を対

象として、生活班(5~6人編成)ごとに新聞記事紹介をリレーノートの形式で行った。

班ごとにノートを1冊用意する。月曜日に生徒1名が選んだ新聞記事をノートに貼り、①記事のタイトル、②記事の紹介、③記事に対する意見、を書く。それを1週間の間に班内でリレーし、感想や意見を書く。その翌週には別な生徒が新聞記事を選び、同じように1週間かけて班内でリレーするという形式をとった。

朝新聞と違い生徒自らが記事を選ぶという楽しさがあること、終礼時の新聞記事紹介と違い同じ班の生徒の意見や感想を踏まえて自分の意見を鍛えることができること、などがこの新聞記事リレーノートの魅力である。



5 むすびにあたって

2年間のNIE活動は、朝新聞や『長崎新聞』作成、家庭科や社会科に代表される各教科による実践など本校で継続して行ってきた活動を土台とし、NIE研究大会やNIE実践発表会ならびにNIE実践報告書などを通して学んだアイデアを活用させていただきながら行ってきた。改めて心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

本校の教員ならびに生徒の中に育ち始めているNIE活動への意識を、今後もさらに発展し継続させるために、2年間のNIE活動で得た財産を活かし、各家庭との連携を図りながら、より一層努力をしてまいります。

(担当 教諭 丸山 仁)

新聞に興味をもち、進んで活用する児童の育成を目指して ～船岡小N I Eモデルの推進を通して～

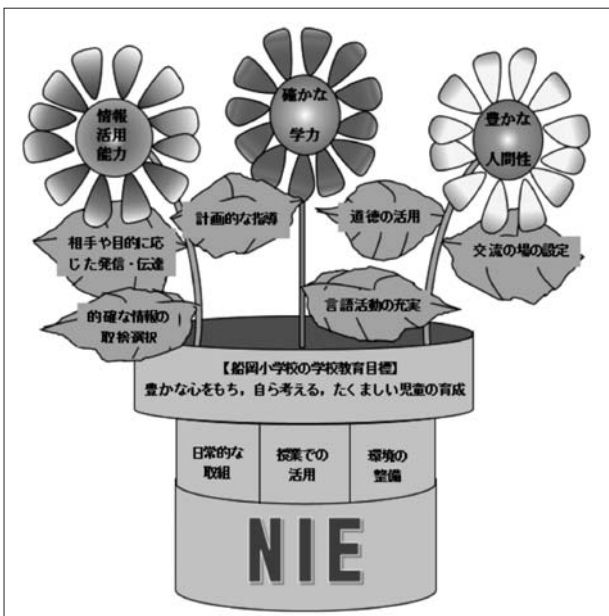
1 はじめに

本校は、明治7年(1874年)に開校し、142年の歴史と伝統のある小学校である。また、児童数は600名を超え、県南で有数の規模の大きい小学校である。

本校の児童は、学習には意欲的であるが、全国学力・学習状況調査及び標準学力調査(東京書籍)から学習面で国語科に課題が見られた。さらに、結果を分析すると、特に「読むこと」の領域で平均を下回る傾向が目立ち、文章内容の読み取りや、図や表の資料の活用、段落の構成、要旨などに関する問題を苦手に行っていることが分かった。

新聞は、出来事を伝える文章だけでなく、意見文や説明的な文章など、様々な文種の宝庫であり、表や図などの資料が記事に多く活用されている。本校の児童に新聞を親しむようにさせることが、課題を解決する糸口になるものと考えた。

そこで、こうした児童の実態を踏まえ、本校では「新聞に興味をもち、進んで活用する児童の育成を目指して」というテーマで、1年目である今年度は児童に新聞に興味をもたせ、日常生活に関わらせることを重点にし、2年目は主体的な学びに結び付けるという計画でN I Eを実践することにした。



【図1】 船岡小N I Eモデル

図1は、船岡小学校のN I Eモデルである。N I Eを通して、本校の学校教育目標である「豊かな心をもち、自ら考える、たくましい児童の育成」を具現化し、生きる力の3要素である「確かな学力」「情報活用能力」「豊かな人間性」を育てていくことを目指していくものである。

2 実践内容

(1) 日常時的な取組

非テキストである写真は、一目で児童の興味を引くことができる。写真から新聞に親しませていく取組として、「お気に入りの写真」という活動を行った【写真1】。

新聞の写真を切り取ってワークシートに貼り、何の写真で、どうして選んだかを書くという内容である。短時間でできる活動で、児童はたいへん興味をもって行っているので、学級で継続して取り組んでいる。また、児童のほとんどが、写真と関連のある記事を読むので、記事に目を向けさせることに大いに役立っている。



【写真1】 「お気に入りの写真」の作品例

委員会活動においても日常的に新聞に関わる活動に取り組んでいる。

例えば、図書委員会では、図書室で児童が自由に閲覧できるように並べている。さらにお勧めの記事を選んで、原稿を作り、昼の放送でその記事の内容を伝える活動を行っている。

また、PR委員会では、掲示版に貼る壁新聞を作るだけでなく、学校行事をまとめた新聞を印刷して、定期的に発行している。



【写真2】委員会で発行した「船小新聞」

(2) 授業での活用

① 5年生 国語科の実践例

第5学年の国語科で単元「新聞の記事を読み比べよう」(東京書籍)がある。

教科書に掲載された2つの新聞記事を読み比べるという学習内容である。その前に、導入として「見出し」「リード」「本文」「写真・キャプション」などの新聞記事についての基礎的な知識を学ぶ計画になっている。

そこで、授業では、学級の人数分の新聞を用意し、社会、経済、政治、文化、スポーツ面などの新聞記事が分野ごとに構成されていることを押さえながら、実際の新聞を使って基礎的な項目を確認した。その後、お気に入りの記事を切り抜いてワークシートに貼り、なぜ気に入ったのかを書いて発表する活動を行った。

この授業では、どの児童も生き生きと最後まで集

中して取り組んだだけでなく、その後の2つの新聞記事を読み比べる学習でも児童同士で活発な意見交換が行われ、単元全体を通して質の高い学習に結び付けることができた。

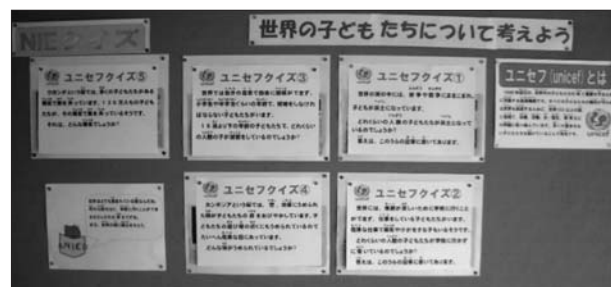
(3) 環境の整備

掲示の仕方など教育環境を工夫することによって、児童にとって新聞が身近に感じられ、興味を引くことができると考えた。

新聞掲示の仕方の工夫としては、大きく3つある。

①時事についての新聞記事を単に掲示するだけでなく、読んでほしい記事の文章に蛍光マーカーで示しておくこと、②意図的に新聞記事を画用紙などで隠して、画用紙をめくってみると見ることができるようにしたこと、③俳句など新聞コーナーに応募できるようにしたことである。

このことにより、児童は新聞に興味関心をもち、掲示板に立ち止まって読むようになり、新聞は楽しいと感じるようになった。



【写真3】クイズ形式で記事を画用紙で隠した掲示

3 今後の課題

(1) 授業でのさらなる新聞の活用

新聞の活用例は多いとは言えないのが現状である。NIEを恒常的に実践していくためには、新聞を教材として活用できる授業を模索し、カリキュラム化を図っていくことが大切である。今年度は、そのカリキュラムの見直しを行い、次年度からスムーズに実践できるように検討していく予定である。授業の中で新聞を生かす工夫をし、児童に新聞から学ぶ楽しさを伝えていきたい。

(2) 児童のさらなる主体的な取組

児童がより一層主体的に新聞に関わることが大切である。そのためには、授業だけでなく特別活動や行事等においても新聞を生かし、児童の活動の範囲を広げ、主体的で実のある活動にし、NIEを発展させていきたい。

(担当 教諭 坂本 謙)

(8) 柴田町立柴田小学校 (平成 28・29 年度実践指定校)

自ら進んでかかわり、自分の考えをもって表現する児童の育成 —新聞を取り入れた学習を通して—

1 はじめに

本校では、平成 28・29 年度の N I E の実践指定を受け、全教科・領域で新聞を取り入れた活動を通して児童の学習への関心・意欲を高め、自分の考えをもって表現する力を育てることをねらいとして研究に取り組むことにした。

N I E の実践を進めていく前に、新聞に関するアンケートを行ったところ、新聞を情報のツールとして考えている児童が少ないことや新聞を読んでいる児童が少ないことが明らかになった。

そこで、下記の 2 つの視点で N I E に取り組むことにした。

- (1) 新聞に慣れ親しむための場の設定
- (2) 意欲的に取り組むための学習過程の工夫

2 実践の概要

(1) 新聞に慣れ親しむための場の設定

① N I E コーナー、新聞コーナーの設置

まずは、新聞に興味・関心をもたせるために 1 階低学年ホール、2 階高学年ホール、階段の踊り場に N I E コーナーや新聞コーナーを設置した。N I E コーナーには、児童が切り取った記事や新聞の読み比べや子ども新聞などを掲示した。また学校以外の地域の農業環境改善センターに児童が作成した「ことばの貯金箱」を掲示した。



1 階低学年ホール



階段の踊り場



2 階高学年ホール



改善センターの掲示

② N I E タイムの設定

毎週 1 回朝の 15 分、各学年 N I E タイムを設定し、ことばの貯金箱に取り組んだり、教師による新聞の紹介を行ったりした。出来上がったことばの貯金箱は、各学年の廊下に掲示した。



新聞記事の紹介



新聞記事を読む様子



ことばの貯金箱 (1 年生)



ことばの貯金箱 (5 年生)

③ スクラップ作り

主に上学年で新聞のスクラップノートに作りに取り組んだ。自分の興味のある記事を選んでスクラップしたり、授業に関係ある記事をスクラップさせたりした。また、新聞感想コンクールにも応募し、学校奨励賞を頂くことができた。



4 年生のスクラップノート

(2) 意欲的に取り組むための学習過程の工夫

○一人一授業，全員の授業実践

①新聞の教材化の工夫

②ペアやグループでの交流活動の工夫

1年生 国語「かたかなことばでぶんをつくろう」

子ども新聞から片仮名を見付ける学習を行った。片仮名言語を見付けて、文作りに意欲的に取り組むことができた。



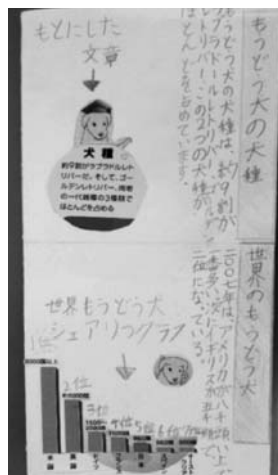
2年生 国語「ビーバーの大作」

子ども新聞の動物の記事の特集から動物の秘密クイズを作る学習を行った。新聞記事から大切な言葉を見付けて、動物のクイズを作ることができた。



3年生 国語「はたらく犬について調べよう」

働く犬について調べて分かったことをリーフレットにまとめて紹介する学習を行った。調べる資料の一つとして、盲導犬の特集記事を活用した。



4年生 社会「水はどこから」

水に関する新聞記事を約1ヵ月間集め、スクラップにまとめ、自分たちでできることは何かを考えさせた。

社会「ごみの処理と水利用」

授業の導入で食品ロスの記事を提示し、食品のごみがあることに気付かせた。「なぜ食品ロスが増えているのか。」「食品ロスを減らすために自分たちがで

きることは何か。」について考えることができた。



5年生 国語「新聞記事を読み比べよう」

新聞の特徴や編集の仕方、記事の書き方などを理解することができた。また、一人一紙新聞を持つことで、意欲的に授業に取り組むことができた。



6年生 国語「新聞の投書を読み比べよう」

実際に投書をするという言語活動を設定することでめあてをもって取り組むことができた。新聞に掲載された投書は、学習発表会で発表した。



国語「言葉の由来に関心を持とう」

新聞から外来語を見付け、辞書を活用して言葉の由来を調べる活動を行った。身近にたくさんの外来語が使われていることに気付くことができた。



3 成果と課題

(1) 成果

- ・校内研究として、全校で取り組んだことにより、実践を積み重ねることができた。
- ・NIEコーナーの設置やNIEタイムを設定したり、スクラップ作りに取り組んだりしたことで、新聞に興味をもって読む姿が少しずつ見られるようになってきた。
- ・新聞を活用することで社会に目を向けることができるようになった。

(2) 課題

- ・実践授業が国語に偏ってしまったので来年度は他の教科や領域でも新聞を有効に活用した授業実践を考えていく。
- ・自分の考え方や見方が広がるように、交流活動の仕方を工夫していく。

(担当 教諭 松永 秀子)

新聞を通して地域や世界に興味を持ち、 グローバルに活躍できる人材育成を目指して

1 はじめに

本校は宮城県北東部の気仙沼市にある全日制普通科高校。高台にあるため、東日本大震災で校舎への直接的な被害は少なかったものの、家の流失や親の収入減少など、生徒の多くは何かしらの影響を受けた。震災を機に、地元産業の復興や地震・津波の研究、防災に興味関心を抱くようになり、将来その道に進みたいと思う生徒が増えた。震災以前から少子化が進み、平成 17 年に気仙沼高校と県が浦高校とが統合してできた本校も、平成 30 年に気仙沼西高校と統合することになった。このような「震災」「少子化」「統合」を受けて、平成 28 年度入学生から学校設定科目「地域社会研究」(1 学年 1 単位)を新設した。また、2 年生には人文類型・理数類型と並ぶ創造類型を配置する予定で、地域を理解しグローバルな視点で物事を考え、学び続ける意思と行動力を持った生徒の育成に取り組んでいる。様々な活動を後押しする形で文部科学省のスーパーグローバルハイスクール (SGH) の指定を受け、活動が充実し加速しようとしている。

2 実践内容

総合的な学習の時間(以下、総学)で研究活動を数年前から行ってきたが、更に充実したものにするため、朝日けんさくくん、スクールヨミダス、河北新報データベース、C i N i i (論文検索の有料版)を導入した。それと共に新聞の活用を検討するため N I E 実践校に申込み、取り組んできた。

①地域社会研究

1 単位ではあるが、総学とのすみわけや土曜授業の活用で 52 時間確保し行った。その中でテクニカル講座と題して、レポート文章講座・図書情報講座、I T 活用講座を 1 時間ずつ行い、I T 活用講座の中で新聞データベース検索に指導した。その後、テーマ設定やフィールドワークを経て、10 月から研究を本格的に開始。「海と産業」「海と人間」「海の文化」「三陸の海」「海と防災」の 5 つの領域で 65 班がグループ研

究を行った。物事を考えるきっかけになればと、5 領域に関係のある記事を N I E による 6 紙と地元三陸新報の 7 紙から選び、定期的に廊下に掲示した。併せて、毎週土曜日に河北新報に挟まれる気仙沼地域版も掲示した。また、新聞による違いを比較するため、イベントごとに同じ日の 7 紙を展示した。

【取り上げたイベント】

- 9 月 11 日 東日本大震災から 5 年半
- 10 月 14 日 熊本地震から半年
- 11 月 23 日 福島沖地震による津波警報



また、「新聞→検索→情報源」という流れを示すことができる事例があった。12 月 13 日河北新報と 14 日毎日新聞に、「気仙沼市周辺海域で生態系が徐々に回復していることを京都大・首都大学東京のチームが米オンライン科学誌に発表した」と報道された。京都大と首都大学東京のホームページを見たところ、プレスリリースに米オンライン科学誌の URL があり、英語論文にたどり着くことができた。更にタイミングよく、その研究に携わっている N P O 法人「森は海の恋人」副理事長 畠山信さんを 17 日にお呼びしており、生徒には新聞をきっかけとした情報のたどり方について示せたのと共に、当事者から話を聞くという調査の本質を感じさせることができた。



②総学での活用

2・3年生の総合学習でも、課題研究に取り組んできている。地域社会研究同様、データベースの使い方の指導を行った。2年生は研究活動の中でデータベースを中心に、主張の根拠として利用した。また3年生は、自分の進路にあった記事を調べ、それに対する自分の考えをまとめる作業を行った。これはAO・推薦入試にも活かされ、その後、図書室等でデータベース検索をし、実際の記事を図書室で閲覧する生徒が増えた。

③授業での利用

各教科で一斉に導入しようという動きをつくることはできなかったが、各教科の授業を見ると、多くの場面で新聞を活用した授業が見受けられる。例えば、生物基礎（1年2単位）では、「免疫と人」の単元で、今年度流行した鳥インフルエンザの新聞記事を用い、人と鳥との比較から防御策や感染拡大防止策について考えさせていた。新聞記事の一部を空欄にして、あてはまる内容についてグループで考え発表させていた。

現代社会（2年2単位）では、2人ペアで自分の興味ある記事を相手に紹介。さらに同じ日付の4紙（河北・朝日・読売・毎日）から一面記事の比較や、情報の取り上げられ方について比較を行い、社会の出来事について多方向から考えさせていた。



現代文B（3年2単位）では、4～6名の班で新聞記事から好きな記事を集め互いに紹介。それを模造紙に並べ共通点などを探し、新聞のタイトルをつける作業を行っていた。それぞれの考え方の多様性について感じさせるねらいがあった。



④進路指導での実践

NIE指定以前から図書館司書が、毎朝新聞コラムの切り抜きを印刷し、教員と希望生徒に配布している。大学入試や公務員試験での知識拡充のため生徒は自分でプリントを持っていき、継続し読んでいる。また、本校では大学入試等で小論文を利用する生徒に2名の教員をつけ指導を行っている。理系学部のAO・推薦入試では英語の問題が課されることがあり、理科と英語の教員が連携し題材を選ぶ大変さがある。そこで今年利用したのが、スクールヨミダスの英字新聞である。日本語の記事のいくつかが英字記事になっており、マークがついているため、日本語のキーワードで検索し記事を選ぶことができる。これだと様々なジャンルや専門的な題材についても題材を探すことができ、日本語と対応しているため、理科の教員でも指導しやすい。

2016.11.20	【サイエンスView】有機EL 次世代の光	<input type="checkbox"/>	東京朝刊
2016.11.06	【サイエンスView】「ココロ」持つロボット	<input checked="" type="checkbox"/>	東京朝刊
2016.10.30	【サイエンスView】速い魚 進化ぞっく	<input checked="" type="checkbox"/>	東京朝刊
2016.10.23	【サイエンスView】巨大隕石 恐竜滅ぶ	<input type="checkbox"/>	東京朝刊
2016.10.02	【サイエンスView】ノーベル賞 今年も熱い	<input type="checkbox"/>	東京朝刊

3 課題・次年度への取組み

課題として2点ある。1点目は、生徒に新聞記事を提示するなど教員からのアプローチのみになっていることである。情報を探すために、自ら新聞を手にするような習慣をつけさせたい。そのために来年度は、朝学習の時間に新聞を組み込みたいと考えている。継続して定期的に新聞に接する時間を確保していきたい。2つ目は、どのようにして新聞の利活用について系統だて、教科を横断してつなげられるかである。実践例で紹介したように、課題研究は課題研究で、教科は教科で新聞を利用している。しかし、頻度が少なかったり、断片的な扱いだけになったりする。そこを改善したい。例えば、「海」という大きな柱に対して、海洋汚染の記事が社会科や保健の授業とつないだり、海の温暖化の記事が理科と結びついたりなど、朝学習での新聞活動を教科の指導ともリンクさせていけないか考えていきたい。

それにより本校が目指している、地域の現状や課題を理解し、他者や他国との関係性を理解し行動できる、グローバル人材の育成につながるものと思う。

（担当 教諭 三嶋 廣人）

高等学校における総合学習でのN I E導入と 国語総合でのN I Eの取り組みについての報告

1 はじめに

本校は平成 28 年度・29 年度と 2 年にわたり宮城県 N I E 実践指定校となった。初年度の取り組みとしては高校 1 年生の総合学習 (全 1 年生、13 クラス 440 名) と高校 1 年生の国語総合 (特別進学文理コース 2 クラス 69 名) の 2 パターンの N I E 実践をおこなった。

本校の図書館では河北新聞、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞の 4 紙の朝刊を定期購読し、書見台にて閲覧ができるように新聞が提供されており、図書館にて新聞の読み方講座等も実施されている。

N I E 実践指定校としての初年度の取り組みは次の (1) と (2) である。なお、校舎の 3 階から 5 階の各階に新聞閲覧スペースを設けた。9 月から 12 月の 4 ヶ月間、河北新報、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、産経新聞、日本経済新聞の 6 紙を購読し、期間を限定して 3 階に産経新聞と日本経済新聞、4 階に読売新聞と毎日新聞、5 階に河北新報と朝日新聞を配布した。

(1) 高校 1 年生の総合学習 (週 1 単位) では、つぶやき NEWS つすと河北ワークシート、漢字小テスト (河北新報の記事をベースにしたプリント)、語彙読解力検定 4 級の練習問題を教材の 2 パターンの取り組みを実践した。

(2) 高校 1 年生特別進学文理コースの国語総合 (週 5 単位) では「情報収集と整理を目標とした取り組み」と「N I E と語彙読解力検定を関連させた取り組み」の 2 パターンを実践した。そのため、特別進学文理コースの 69 名は総合学習における N I E と国語総合における N I E の 4 パターンでの学習をしたことになる。以下は初年度の実践報告である。

2 実践報告

(1) 高校 1 年生の総合学習における N I E の取り組みにおいては以下のような具体目標を設定した。

- ①新聞に親しむ。
- ②新聞に主体的に関われるよう、新聞を通して自身の興味に気づけるようになる。
- ③新聞の構成や役割を知り、情報を的確に読み取る力を身につける。

①と②に対しての取り組みは、各クラス 4 名を原則としたグループを構成し、クラス担任のもと「つぶやき NEWS つす」を (2 単位×50 分) 実施した。生徒の主体性を引き出すための「楽しい」雰囲気作りが

指導者の課題になると感じた。また、男子と女子では取り組みに温度差が生じてしまった。高校生対象の場合は既存の方法に手を加えても良いのではないかという意見も出た。

次に③の目標に対する実践である。N I E の要素が含まれたワークシートを 4 つ組み合わせたものを 1 課題とし、50 分で各自解答するという取り組みを 2 回行った。ワークシートの構成は、河北新報の記事をベースにした漢字小テスト (1 種類)、河北ワークシート (2 種類)、語彙読解力検定 4 級プリント教材 (1 種類) の 4 点を 1 枚に印刷したものを組み合わせた。この実践ではメディアリテラシーの観点から目標③の力の育成を意識した。N I E 担当教員の準備としては、河北新報の最新の記事をベースとした漢字テスト作成、河北ワークシートの解答と解説の準備、語彙読解力検定のプリント教材の選定である。内容としては、一見簡単そうに見える問題でも正確に読み取ろうとすると難しい問題を用意した。そのため、問を踏まえた上で前後の語句まで視野に入れて解答できなかった生徒が解答に疑問を抱き、積極的に質問してくるなどの主体性が見られ、論理的思考力喚起の機会になったことは効果的取り組みだったと言える。

(2) 高校 1 年生特別進学文理コース (2 クラス 69 名) の国語総合 (週 5 単位) では、国語総合の授業で N I E に取り組んだ。国語総合は両クラス共に月～金曜日まで毎日設定されている授業であり、期間としては後期の 10 月～12 月の 3 ヶ月間に集中的に取り組んだ。以下は特別進学文理コースにおける N I E の目標である。

- ①自身の視点で情報収集と整理ができるようになる。
- ②N I E の取り組みを語彙力として実感し、社会問題を通して日常的にことばを意識できるようになる。

①の目標に対する取り組みは、N I E の導入として日本新聞協会が提供している「ハッピースクラップ帳」を利用した。生徒 1 名に対してハッピースクラップ帳 1 セットと新聞 (朝刊) 1 部を配布し、各自のオリジナルスクラップ新聞を作成させた。その際、1 つの記事に対して必ず 1 つは自分の意見を記入する、記事の重要だと感じた表現にマーカーでチェックをつけることを指導した。また、記事は気に入った表現、写真やイラスト、進路に関連する記事、自分に

身近な内容(年齢的、地域的、共通の興味等)を切り抜くよう指導した。そして、できあがったオリジナルのスクラップ新聞を他の生徒と交換し、コメントを記入してもらい、完成とした。生徒達は非常に主体的に取り組み、他の生徒が探している記事の内容が自分の手元にあった場合は紹介しあうなど、指導者の指示を超えた活動が多く見られた。また、意見を記入する際も、多くの生徒がお互いに自作のスクラップ新聞を交換し、楽しそうに評価しあう姿が印象的であった。取り組みに見られた主体性は新聞を通して自身の興味関心と向き合った結果とみられ、「選び取る」という行為がその後の言語活動を活発にしたと言えるのではないだろうか。

また、ベネッセの語彙読解力検定のモニター受検とNIEを関連させ、NIEが与える語彙力養成への影響を可視化したいと考えた。具体的には月曜から金曜までの5日間、国語総合の毎時間、開始の10分で語彙読解力の小テストと河北新報の記事をベースにした漢字テストを実施した。漢字テストの実施は漢字学習の副読本を使用し、事前に指示された範囲の書き取りテストをするのが通常だが、今回は、範囲は前の週の日曜から土曜までの河北新報の朝刊の記事から出題するというルールにし、記事に使用されている語句から入試頻出漢字の書き取りを10問出題することとした。明確な範囲がないため生徒からは「事前に学習や対策ができない」という声が多く出たが、最終的には「この記事が問題に使われそう」と話しながら新聞閲覧スペースで新聞を読む姿が見られるようになった。10週10回の漢字テストの実施で両クラスともに平均点は10点満点中8点と高かった。また、生徒の通学地域に関する記事から出題したところ、その記事内容に詳しい生徒からの主体的な発言が増え、地域の文化やイベントに参加してみようと興味を持って話し合う様子が見られ、「読む・書く」に加え「話す・聞く」と国語総合で養成をめざす言語活動の充実がバランス良く図れた。

また、ベネッセの語彙読解力検定の練習問題プリントは4級と3級のものを使用した。15回実施し両クラスの平均点は40点満点中27点であった。こちらは、正答率を分野別に集計するなどの分析を行ったところ、辞書語彙の正答率が最も低く、次いで新聞語彙の「経済・国際」分野の語句であった。辞書語彙の得点率に関しては特に故事成語や慣用句の正答率が低く、今後の国語科の授業への課題とつながる有意義な結果であった。また、新聞語彙の「経済・国際」分野に関しては最近の入試現代文の頻出テーマであることから、早期から時事用語に触れさせる等の工夫を授業に取り入れる必要があると感じた。そして、本取り組みの最終項目は、語彙読解力検定のモニター受検とした。(※結果待ち中)

3 今後の展望と課題

高等学校におけるNIEは生徒への動機付けが



写真1：NIEコーナー



写真2：語彙読解力検定モニター

非常に重要だと感じた。高等学校の学習活動において「親しむ」、「楽しむ」の要素をもった取り組みはそれをそのまま目標としても生徒が主体的に関わり辛いの現実である。また、高校生に適した教材やツールを提供することも重要だと感じた。特に特別進学文理コースにおけるNIEは大学入試で生かせる語彙読解力検定と関連づけたことによりほとんどの生徒が非常に意欲的に取り組んだ。また、NIEの導入時に「新聞を読む習慣が語彙力にどのくらい効果的なのかを体感しよう」とNIEの目的を明示したことも主体的な取り組みにつながったのではないかと考察する。また、他県から進学のために入学してきた寮生にとっては、自分たちの活動や地域の情報が得られる新聞が学校で読めるのは嬉しい、という声も多く出た。スマートフォン、タブレットでの情報収集が主の環境に育った生徒たちに対し、新聞を手にとることへの目的や利点、効果を体感させるにはさらに時間を要するだろう。自分が必要としている情報のみを取り出せることができる環境に置かれている生徒たちに、新聞と主体的に関わる姿勢を身につけさせるためには、新聞を生活に取り込み習慣化させること、新聞に継続的に触れることが自分の将来に役立つことを実感させる指導していく必要があると感じた。

次年度は語彙読解力検定の検定級レベルを上げて、今回の検定結果と比較し、2年間NIEを継続して取り組んだ結果を分析し、どのような効果が出るのか検証したい。

(担当 教諭 山田 如意)

楽しく N I E

1 はじめに

本校は、2016・17 年度の 2 年間、N I E 実践指定校の認定を受け、教育活動に新聞を取り入れた取組を進めている。本校には「特進科」、「探究科」、「科学技術科」の 3 学科があり、現在のところ N I E 活動は主に「探究科」で実施している。

「探究科」は、3 年間で「自ら学び取るチカラの育成」を掲げたカリキュラム構成であるが、1 年次の生徒たちの中には、まだまだ自分の考えや意見を文章にすることが苦手な生徒も多い。そこで、N I E 1 年目となる今年度は、彼らに時事的な話題にも触れさせながら、自ら考え、表現する力をつけさせることを目標に活動を始めた。

また、本校は生徒が一人 1 台 i P a d を所有し各教科の授業で活用している。そこで N I E 活動への i P a d を活用についても検討を行った。

2 実践の概要

(1) 新聞に親しむ環境作り

【N I E コーナー】

多くの生徒の目に触れるよう校舎 1 階の職員室前に「N I E コーナー」を設定し、生徒が取り組んだワークシートを掲示している (図 1)。また、校舎 3 階の探究科職員室前には「新聞コーナー」を設け、日々届けられる新聞 (河北新報、朝日新聞、日経新聞、産経新聞、毎日新聞、読売新聞、The Japan News) を自由に閲覧できるようにした (図 2)。



図 1 : 「N I E コーナー」 (校舎 1 階)



図 2 : 「新聞コーナー」 (校舎 3 階)

【掲示】

探究科が入っている校舎 (2 号館) の階段脇や教室の壁には、教員が研修で取り組んだワークシートや、各授業で生徒が取り組んだワークシートを随時掲示し、付箋を用意して、生徒が互いに自由に感想を書けるようにした (図 3)。



図 3 : ワークシートの掲示板と意見の書き込み (付箋)

(2) 教員研修

教員側のスキルアップを図るため、2016年7月20日に本校会議室にて、宮城県NIE委員会の齋藤昭雄氏、NIE教育コンサルタントの渡邊裕子氏をお招きして、ワークショップや新聞活用オリエンテーションを含む研修を行った。また、毎月の定例職員会議において活動報告を出している。

(3) 各授業での新聞の活用

【探究科1年】

ホームルーム(LHR)の時間を活用し、朝日新聞の投稿コーナー「どう思いますか」から2種類の記事を抜粋して生徒に読ませ、記事に対しての意見を自由に書かせた。

英語では、英字新聞に触れる一環として「読売ワークシート通信」を使用した。英文を読んだ後に和訳にも目を通し、記事や内容について自分なりに考察して文章に表す活動を行った。

【探究科2年】

探究科2年で実施している『探究I』の授業では、生徒が自分の興味・関心のあるゼミに所属し、自分たちで決めた課題について「調べ活動」をグループで行い、テーマを決めてプレゼンテーションをした。

「言葉とコミュニケーション」をテーマに授業を進めているクラスでは、教員が事前に用意した記事を生徒が読み、その記事に対して各自の意見・考えをシェアしながら解決策をまとめ、プレゼンテーションを行った。

新聞を購読している家庭は、各クラス半分以下という実態から、生徒の新聞記事に対する関心・意欲を通常の『現代文B』の授業内で作成したワークシートを活用し、段階的に高めていく工夫を行った。

生徒自らが検索できるように特別に許可を得て、「河北データベース」を探究ゼミの時間のみ生徒の一斉利用が可能となった。生徒は自分のiPadで検索し、自分たちが生まれた年にどんなことがあったのか、その背景にあるものはどんなことだったのか…など過去にさかのぼり検索する等新聞記事に対して少しずつ楽しんで取り組む様子が見られるようになった。

【探究科3年】

小論文対策として、新聞記事を使用しての、「文章筆写、感想・意見、言葉の意味調べ」を年間を通して行った。また、ジャンル毎に新聞記事を分類して掲示し、生徒がいつでも記事に目を通せるように工夫した。この取組は生徒に好評で、「自分の興味を持った

記事をさかのぼって閲覧できる」との声があった。

新聞記事を読むことで、生徒たちはふだんほとんど出会わない言葉に触れる機会を多くもつことができた。



図4：生徒が取り組んだワークシート（2年生）



図5：生徒が取り組んだワークシート（3年生）

3 成果と課題

1年目ということで、手探り状態で活動を行ってきた。NIE活動を実施しているのが特定の教科(国語、英語)になってしまい、教員・生徒にはまだ認知が十分とはいえないが、今後は他教科との連携を図っていきたい。

NIE活動を始めた4月当初は時間内に自分の意見をまとめるのができなかった生徒たちがほとんどであったが、国語科や探究活動で約1年間NIE活動を行ってきた生徒たちは、10月には制限時間内にまとめることができる生徒が多くなった。

また、他クラスがNIE活動を行っているのに興味を持つ生徒が出てきて、生徒が記入したワークシートにコメントを書く生徒も出てきた。

生徒が新聞に親しみ、世の中の出来事に関心を持って自分なりの考えを持つ機会を多くするためにiPadも活用したNIE活動を展開していきたい。

(担当 教諭 鈴木 理恵)

2 部会活動実践報告

(1) 宮城県NIE推進委員会・小学校部会

平成 28 年度 小学校部会報告

仙台市立七北田小学校 教諭 今藤 正彦

1 新聞授業について

小学校部会では、平成 25 年度から、5 年国語の「新聞記事を読み比べよう」の学習において、授業当日の新聞を児童全員に配り教材として活用することで、NIE 活動の推進を図っている。

昨年度は、県内 14 名の部会運営委員が、各勤務校で校内出前授業を実施した。

2 今年度の取組

今年度は、部会運営委員が所属しない学校も含め、県内 23 校に新聞を提供した。また、指導案のデータや提案授業の DVD、「版」違いの新聞と号外のカラーコピーを準備し、希望する授業者に提供した。

実施した学校は、下記のとおりである。

柴田小、船岡小、松島一小、塩竈一小、三本木小、上沼小、北方小、大川小、吉岡小、北仙台小、郡山小、若林小、片平丁小、上野山小、中野栄小、中田小、西中田小、東長町小、大野田小、高砂小、沖野東小、将監小、七北田小

<成果>

- ・実物の新聞を一人 1 紙使ったことで、児童は教科書教材文の内容を、実感を伴って具体的に理解することができた。
- ・授業を参観した教員は、児童全員が集中して意欲的に学習に取り組む様子を見て、新聞は「生きた教材」として有効であることを実感していた。
- ・学校により、独自のワークシートを作成したり、ユニークな比べ読みの記事を用意したりするなど、様々な工夫が見られた。また、授業当日の新聞ではなく、地域の記事が多い日曜版を活用した学校もあった。

<改善点>

- ・指導案の学習課題や学習活動の内容は、指導者が児童の実態や授業時間を考慮して、アレンジや工夫をするとよい。

- ・新聞代補助の対象を広げ、事前に案内文書を配布するなどして、より多くの学校に新聞活用を呼びかける。

3 次年度に向けて

今年度の出前授業で提供した新聞部数は 1613 部となり、昨年度の 1060 部を大きく上回った。7 月に仙台市小学校教育課程研究協議会の国語部会で本取組が発表され、教員の関心も高まっている。

次年度は、小学校部会として 2000 部の新聞提供を計画しており、NIE 活動のより一層の推進を図っていきたいと考える。



七北田小の新聞授業の様子

小学校新聞授業広がる

NIE 教員研修を活動の一環で、児童一人一人が新聞を使う授業を導入する小学校が県内で増えてきた。2016 年度は3校が計画、15年度の14校を大きく上回る。

松島一小(児童323人)は31日、5年国語で新聞を使った授業を行った。

秋田文筆教師は新聞を配り、気付いたことを問いつけた。北海道新聞開業日の北海道の地元紙と国紙を黒板に掲示する。児童から「誰の大きさが違う」「北海道は暮んでいる」といった声が上がった。

阿部唯さん(10)は「新聞を作っているところによって、記事の大きさが違ってあるのが違うのが分かった」と話している。

31日の朝を手に取る児童 松島一小

16年度 34校計画、前年度上回る

NIE Newspaper in Education

松島一小の掲載記事 (2016.6.1 河北新報朝刊)

平成 28 年度中学校部会報告

仙台市立八乙女中学校 教諭 菅原 久美

1 はじめに

本校では、平成 23 年度より、コミュニケーション能力の育成を目指し、言語活動に力を入れてきた。

NIE 実践校・協力校、奨励校として新聞を提供していただき、新聞を有効活用し、各教科、領域における実践が行われた。

その後は、PTA 費からの援助と近隣の新聞販売店のご厚意により全校生徒が一斉に新聞を活用できる環境の中で活動してきた。

2 活動のねらい

本校の研究主題は、受信→思考→発信で学びを深める授業の工夫～各教科等、諸行事における言語活動を通して～」であり、新聞活用が効果的であると考え、無理なく取り組んだ。

- (1) 新聞に親しむこと。
- (2) 新聞を読み、比較・分類・関連づけながら自分の考えを深めること。
- (3) 記事を選び(受信)、記事について考えたことや思い(思考)などを伝え合う(発信)ことにより、お互いの理解を深め、コミュニケーションの能力を高めること。

3 実践内容

(1) 学校全体としての取組

〔朝学習(言語活動)の時間や学活・総合的な学習の時間に新聞を活用〕

- ・「新聞の切り抜き」・・・テーマを決めて、新聞のスクラップを行い(受信)、新聞を読んだ感想(思考)を発表する(発信)。グループでの発表会のあとに、感想を書いてもらい、その感想を受けてさらに自分の考えを深める(再思考)。
- ・「ことばの貯金箱」・・・新聞を読んで、気になる「ことば」を切り抜き貯める。さらに、台紙に貼り、選んだ「ことば」に自分の思いを添える。作業を通して、自分と向き合う時間となる。また発表や掲示を通して、他者理解につながる。
- ・「ことばのギフトカード」(ことばの貯金箱の応

用)・・・新聞から貯めておいたことばを使い、相手への思いをカードに表現する。特定の人との向き合う時間となる。



(2) 学年としての取組

- ・「YAOTTAR」(ヤオッター)
- ・「新聞セクション」

学年委員の活動として、みんなに伝えたい・一緒に考えたい記事を廊下に掲示し、そばに付箋紙と鉛筆を用意し、コメントを書いてもらう「公開掲示板」(本校では、ツイッターではなく、「ヤオッター」と呼んでいる)や学年委員が様々なジャンルから記事を選び記事を掲示し、コメントを求める活動が生徒の自主的な活動として実施。



4 まとめ

6 年間に渡り、学校全体で継続しての NIE 活動に驚いている。NIE に興味関心を持ち、積極的に関わってくださった先生方が今では学校の中心となり、この活動を推進している。そして何より、活動を支えてくださっている地域の新聞販売店の方々に感謝の気持ちでいっぱいである。

楽しみながら、思いを伝え合える活動が生徒を成長させていると感じている。

平成 28 年度高等学校部会報告

宮城県水産高等学校 教諭 平居 高志

日常的な活動はなかなか出来ずにいるが、今年も高校部研修会は実施することができた。以下、その報告である。

日 時：11月25日（金）15：00～

場 所：河北新報社1階ホール

テーマ：専門紙を通して産業を知る

内 容：講話と質疑

講 師（報告順）

日刊建設工業新聞 東北支社

記 者 平松 健一郎 氏

日本農業新聞 東北支所

記 者 日影 耕造 氏

水産経済新聞

副社長 安成 就三 氏

たいへん軽率な企画だったと思う。講師の方々には、講話20分+質疑15分ということでお願いしてあったのだが、実際には20分では何も語れないと言ってよいほど、豊かな内容を持っておられたからである。結局、急遽その場で講話中心の企画に切り替え、質疑の時間はほとんど取れないままに終了となった。

参加者は9名に止まったが、たいへんよい研修会になったと思う。どの方のお話也非常に面白かった。

記者の方々は、単に生活のためだけに記者をしているわけではない。その産業に対する愛着を持ち、業界を盛り上げていこうという意欲を持っている。一方で、個々の会社と違い、自分自身の利益を超えて、産業全体のことを冷静かつ客観的に考える余裕も持っている。そのことが、お話が面白かった重要な理由の一つであると思う。日々私たちの暮らしを支えてくれている産業を考えるために、専門紙の記者の方々のお話を

聞くというのは、たいへん意味のあることなのではないか。専門高校だけではなく、大学を経由するとは言っても、最終的に何らかの産業界に入ることになる普通科生にも、勉強して欲しいことだと思う。

ところで、今回、この企画を進めるに当たって調べてみて、全国では150もの専門紙(かつては業界紙と言ったが、今はこのように言うらしい。実業高校が専門高校に変わったのと同じである)が発行されていることを知った。中には、なぜこれが一紙として成り立つのだろうか?というような新聞もある。だが、それは、とりもなおさず日本の産業の複雑さと豊かさを表しているだろう。日常生活ではほとんど目にすることのない専門紙ではあるが、現在、ホームページで記事の多くを読むことが出来ることでもあるので、学びの機会として積極的に活用したいものである。

閉会后、場所を変えて行った懇親会には、講師の方々も全員参加してくださり、時間を忘れて大いに盛り上がった。



(12月2日、河北新報に記事掲載)

3 大学からの報告

選挙報道とNIE

NIE教育コンサルタント 東北福祉大学 渡邊 裕子

1 はじめに

2016年7月の第24回参院選では、選挙権が18歳に引き下げられてから初めての国政選挙となった。新聞各社は公示前の早い段階から、「18歳選挙権」「主権者教育」などと、大きな見出しで頻繁に記事を掲載していた。本来、NIEにとって豊富な記事数は有難いことだが、「選挙報道」となるとせっかくの記事も使われないままお蔵入りになってしまうことが少なくない。いわゆる「政治的中立性」を問われるがゆえに、授業で新聞を使うことを躊躇してしまうからである。

現に、政治的中立性の確保をめぐる騒動が取り沙汰されただけに、その気持ちも分からない訳ではない。しかし、そのことが引き金になったとすれば、それは大変残念なことである。

なぜならば、今回の「18歳選挙権」に関する記事は、若者が政治参加について考えるきっかけとしてとてもタイムリーだったし、特に高校生にとっては身近な話題だったからである。

そこで本稿では、授業で新聞を使う場合の「政治的中立性」の確保とはどういうことなのかを、本学で行ったNIE授業などを通して考えてみたい。

2 「18歳選挙権」とメディアの対応

今回の参院選では、選挙権が18歳に引き下げられたことによって、新聞メディアはかなり早い段階から関心を寄せていた。全国紙はもちろん、地元紙の河北新報でも過去の第22回、第23回の参院選の年とは比較にならない数の記事を掲載していた。因みに以下の表は、河北新報のデータベースから4つのキーワードで、関連の記事数を拾って比較したものである。(対象期間は各回その年の1月1日～選挙の前日まで)

キーワード	第22回(2010)	第23回(2013)	第24回(2016)
主権者教育	0	0	5
18歳選挙権	0	1	186
模擬選挙	5	4	32
政治参加(若者)	3	7	45

今回(2016)の参院選では、それぞれ圧倒的に記事数が多いことが見てとれる。特に「18歳選挙権」では、186という膨大な数の記事が掲載された。全国紙においても、この傾向は違わない。しかも、どの新聞も若者向けに特集記事を組んで、分かりやすく情報を発信していたように思う。ならば、若者はそれらの記事をどう読んだのだろうか。

3 若者(大学生)と選挙報道

本学「NIEの授業」では、毎時間、河北、朝日、毎日、読売の4紙を揃えている。学生はそれぞれ好きな新聞を手にして読むことができる。

学生たちは、今回の参院選に備えて、投票日までの約一か月間、「投票先を決めるための必要な情報」を新聞からスクラップしていった。公示日までには「18歳選挙権」や「主権者教育」など、あくまでも学生自らがスクラップした記事をもとに様々なディスカッションを重ねていった。

公示日の翌日には、どの新聞も一斉に候補者のプロフィール写真、マニフェストなどを掲載した。(掲載例 2016.6.23 河北新報)



ちょうど、授業日でもあったその日は、学生たちの関心が最も高かったプロフィール記事(朝日、毎日、読売、河北)をもとに、ディスカッションをしていった。「人柄は良さそうだが、マニフェストを読むと納得できない所がある」「震災復興にどう向き合ってくれるかに関心があるが、具体的にそれが見えない」「憲法9条に関する考え方をもっと詳しく知りたい」「奨学金については、自分たちにとって切実な問題だ。もっと具体的な見解がほしい」など、活発な議論が続いた。中には、この授業をきっかけに、街頭演説

を聞きに行ったという学生もいた。

投票日直前の授業でも、学生たちは熱い議論を交わし、投票日に向けて「今回はしっかりと考える材料があった。新聞を読んで議論を重ねたことで、自分なりに整理ができた」「前回の選挙では特に深い考えもなく、『良さそうな人だから』と単にフィーリングで決めてしまったが、今回はじっくり考えることが出来た」と語り、どの学生も「投票先は決まった!」と自信ありげに教室を後にしていった。

選挙後は「前回の選挙では、新聞はほとんど読まなかったし、友達と選挙について話すこともなかったが、今回は結構盛り上がった」「今回は新聞を読み比べたり、授業でディスカッションすることで、今までになく選挙に興味を持つことができた」「これまで選挙の記事は難しそうで読む気がしなかったが、今回読んでみて意外に分かりやすく読みやすい工夫がなされていることに気づいた。新聞を読むことで、選挙が身近に感じられた」「身近な問題を考えることが政治につながるんだということが分かった」などの感想を寄せてくれた。学生たちにとって、これまでの選挙はいわば「他人事」だったものが、少なくとも、新聞を読み、ディスカッションしていくことで、「自分事」として捉えていった様子がわかる。しかも、今ある自分たちの環境や地域のことなど、身近な問題を考えることが政治を動かしていくことなのだ、実感できたようだった。

4 新聞を使う場合の「中立性」とは・・

では、本学で行ったこの一連の授業はいわゆる「政治的中立性」において問題はなかったのだろうか。

長年のNIE実践者で、「主権者教育」にも詳しい藤井 剛氏（明治大学特任教授）は「政治的中立性」について、次のように述べている。（毎日新聞主催「新聞活用教室」での講演より抜粋）

- ①政治的対立がある問題を扱う際は、「A説」「B説」のように両論を説明し、生徒自身に考えさせる。
- ②複数の資料（新聞など）を利用して、対立点やその根拠などを生徒が自分で調べ、まとめ、発表し、討論して判断させる。

新聞等の場合は、一紙のみを使用するのではなく、多様な見解を紹介するために複数の新聞等を使用し、比較検討させること。但し、取り上げる問題が対立しない場合は提示は一紙でよい。

以上が、藤井氏が捉える「中立性」の定義である。つまり、まずもって重要なことは「一紙に偏るのではなく複数紙を読み比べる」ということであり、スクラップに関しては生徒（学生）自らの興味関心に応じた記事をスクラップさせること。少なくともこの2点をしっかりと踏まえていれば、問題はないということである。

考えてみれば、このようなことはNIEではよく語られてきたことだ。特に複数紙の読み比べは、メディアリテラシーを育むうえでも重要であることは、NIE実践者であれば誰でも知っているはずだ。つまり結論から言えば、「選挙報道」の新聞記事も、これらのことをちゃんとわきまえていれば、何も特段に構える必要もなく効果的に使えるというわけだ。

5 新聞等を使えないもう一つの理由

今回の参院選に向けて、新聞各社は教育現場における「模擬選挙」に対しても、かなりの期待と関心を持って記事を書いたことは確かであろう。

しかし、実際には「教科書をこなすのが精一杯で、模擬選挙どころか新聞などを使う余裕すらなかった」という先生の声も少なくない。つまり、教科書の他に新聞等の資料を取り入れて実践的な授業をやるには、時数という大きな壁がそこに立ちちはだかる。先生方は理想は持ちつつも、現実問題その狭間で大変苦心しているということだ。

話は変わるが、明推協の一連の資料によれば、英国では早い段階から市民教育（Citizenship Education）が行われているという。子供たちはその中で、将来市民として十分な役割を果たせるようになるために必要なスキルを学習していく。例えば、社会の問題を解決するためにどこから情報を仕入れ判断し、どのような手段を用いるのか、さらにどのようにして他者との合意形成を行うのか、さらにどのようにして相手を説得するのかといった、より実践的な社会参加や政治参加を学習するという。つまり、そういうことができるカリキュラムになっているというわけだ。

日本の公民教育も政治や経済の仕組みを学習するに止まるのではなく、政治に参加するスキルや考え方を学習する必要があることは言うまでもないが、しかし今のカリキュラムでは、現場の先生方が言うように、そのようなことは到底入る隙間がないのが実情のようだ。

今回の選挙で「18歳選挙権」や「主権者教育」が取り沙汰されたことをきっかけに、現在の「公民教育」のあり方やカリキュラムの見直しも早急に検討されていくべきであろう。

6 おわりに

今回の衆院選の十代の投票率は、総務省の発表によれば、18歳が51.28%、19歳が42.30%だった。全体の投票率54.7と%比較すれば決して高い数字ではないが、前回2013年の参院選での二十代の投票率が33.37%であったことを考えれば、今回の十代の数字は高い数字と言える。

とりわけ「18歳選挙権」をキーワードに、学校現場における主権者教育が一定の成果をあげたことはもちろんだろうが、各メディアの積極的な対応もそのような結果に反映されたと言っても過言ではないだろう。

しかし、次回からは「初めての『18歳選挙権・・』」という文言が無くなり、当たり前のこととして学校もメディアも扱って行かなければならない。若者の政治参加を次につなげるために、どちらも今後の姿勢が問われていくことであろうが、メディアでの取り上げ方は、今回よりもぐっと減っていくはずである。もちろん、そのニュースバリューからすれば当然であろうが、せめて新聞メディアだけでも「若者の政治参加」を促すための報道をこれからも積極的に推し進めて行ってほしいものである。なぜなら、教育現場における「主権者教育」に、新聞は大いに役立つ教材であり、使い方次第では授業の質の向上にもつながると思うからである。

IV 研修会報告

1 宮城県N I E研究大会

(1) 大会の概要

事務局 齋藤 昭雄

平成 28 年度の宮城県 N I E 研究大会は、11 月 9 日(水)に、宮城学院中学校：ランディスホールで開催された。午後 2 時開会。参加者は約 100 名。

全体会では、宮城県 N I E 委員会：星豪会長の挨拶のあと、宮城学院中学校：丸山仁教諭と代表生徒による実践報告があった。テーマは、「宮城学院中学校における N I E 活動を取り入れた平和教育の実践」である。これまで、宮城学院中学校では、河北新報社と連携を図り「職場訪問」や「出前授業」等を実施してきた。『長崎新聞』づくりは、そうした N I E 活動を取り入れた総合的な学習活動の集大成とも言える。今年度は、10 月に予定していた長崎への校外研修旅行が台風のため延期となり、今回の実践報告では、旅行前の取り組みの発表にとどまった。しかし、緻密な計画のもとに進められた宮城学院中学校の平和教育は、私学のよさを生かしたすばらしい実践として参加者に感動を与え、旅行実施後の「長崎新聞」に大きな期待を抱かせるものだった。

実践報告に引き続き質疑応答があった。その中で、N I E の効用に関する生徒への質問が出された。4 人の生徒が、「自分の頭で考え、発展した学習ができた」「世の中の出来事を自分自身と関連づけて考えるようになった」などと、落ち着いて自分の言葉で答えた姿が、この実践の確かさを物語っている。

指導講評では、N I E 推進委員会：森屋勝治委員長から、① N I E のカリキュラム化 ② カリキュラムマネジメント力 ③ N I E の日常化 ④ N I E のこれからについて、分かりやすく適切な助言をいただいた。

大会の締めくくりは、北陸学院大学教授の金森俊朗氏による「伝え合う力を育む！」と題した講演である。「教師はよきキャッチャーであれ」という金森教授のメッセージは、多くの参加者の心に響き感動を与えた。「具体的なエピソードに基づく熱い語りに魂が震えた」という声に代表されるすばらしい講演だった。

- | | | |
|---|-----------|--|
| 1 | 日 時 | 平成 28 年 11 月 9 日(水) |
| 2 | 会 場 | 宮城学院中学校 |
| 3 | 全 体 会 | 14 : 00 ~ |
| | <開会の挨拶> | 宮城県 N I E 委員会会長 星 豪 氏 |
| | <実践報告> | 宮城学院中学校における N I E 活動を取り入れた平和教育の実践
～『長崎新聞』作成にいたる一連の取り組み～
報告者 丸山 仁 教諭 中学 3 年生の代表生徒 |
| | <質疑応答> | 実践報告についての質疑応答 |
| | <指導講評> | 研究推進委員長：森屋勝治 氏による指導講評 |
| | <会場校校長挨拶> | 宮城学院中学校校長 嶋田順好 氏の挨拶 |
| 5 | 公開講演 | 15 : 45 ~
講師 金森俊朗 氏(北陸学院大学教授)
演題 「伝え合う力を育む！」 |
| 6 | 閉会行事 | 16 : 45 ~ |
| | <閉会の挨拶> | 宮城学院中学校 教頭 鈴木理恵 氏 |



(2) 実践報告

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育 ～『長崎新聞』作成にいたる一連の取り組み～

宮城学院中学校 教諭 丸山 仁

平成28年度宮城県NIE研究大会 実践報告

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

～『長崎新聞』作成にいたる一連の取り組み～

丸山 仁

はじめに～NIE活動の2つの視点について

- ▶ (1) 自分自身が一人の新聞記者となり、世の中に 平和についてのメッセージを『長崎新聞』として発信する
- ▶ (2) 世の中の平和に関する動向を新聞を通して学び、「平和宣言」にまとめる

『長崎新聞』とは

→長崎校外研修旅行のまとめ

▶長崎校外研修旅行の目的

「平和」「歴史・文化」「最高学年の自覚・責任」

- (1) 被爆地長崎における学びを通して、平和と人権を守るために、私たちは今何ができるか、何をしなければならないかを深く考える。
- (2) 異国文化の漂う長崎の町を歩き、キリスト教の歴史に触れ、長崎特有の歴史が日本の文化や宗教などに及ぼした影響について考察・検証する。
- (3) 宮城学院中学校の最高学年として、一人ひとりが自覚と責任をもって団体行動をし、学年の団結と友情を深め、有意義な研修旅行にする。

「平和宣言」とは

→校外研修旅行委員がまとめる生徒による平和への誓い

- ▶ 中学3年次10月に行う2泊3日の長崎への校外研修旅行では、原爆資料館の見学、被爆講話、城山小学校見学、長崎班別研修（如己堂・永井隆記念館、浦上天主堂、二十六聖人殉教地・二十六聖人記念館、出島・出島資料館、グラバー園、大浦天主堂）などを行い、平和公園（爆心地や被爆遺構）を訪れ平和祈念像の前で平和記念式典を行います。そのときに読み上げるのが「平和宣言」です。

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

- ▶ 1. 河北新報社への職場訪問（2年次 6月）
- ▶ 2. 長崎の調べ学習（2年次 夏期休暇課題）
- ▶ 3. 河北新報社による出前授業〈その1〉 新聞活用講座（2年次 3月）
- ▶ 4. 3月に特別プログラムを組んで平和学習（2年次）
- ▶ 5. 『長崎レポート』作成（3年次 5～7月 7月発行）
- ▶ 6. 河北新報社による出前授業〈その2〉取材について学ぼう（3年次7月）
- ▶ 7. 平和宣言の取り組み（3年次 夏期休暇課題・8月）
- ▶ 8. 河北新報社による出前授業〈その3〉「長崎新聞をつくろう」（3年次 10月）
- ▶ 9. 「長崎新聞」作成（3年次 10月）

1. 河北新報社への職場訪問（2年次6月）

(1) 目的

- ▶ 「働く」ということについて学びを深める。
- ▶ 働いている人がどのような課題をもって、どのように働いているかということと学び、将来、自分の力をどのように社会に活かしていくかを思い描く。またそのために中学生の今、何が必要なかを考える。

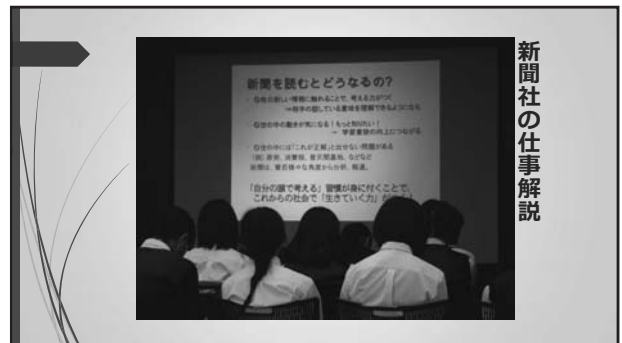
- ▶ (2) 場所 河北新報社本社
- ▶ (3) 内容
 - I部 ①DVD鑑賞〈新聞制作の過程が理解できる内容〉(10分)
 - ②新聞社の仕事について解説(30分)
 - 東日本大震災時(2011年3月11日)、河北新報社は翌日も休むことなく新聞を発行した。
 - II部 スタッフとの懇談(30分)
 - 整理部・営業部・デジタル推進室・企画事業部の4つのジャンルのスタッフの方々と囲み、インタビュー形式でお話を伺う(資料1)。



DVD鑑賞



新聞社の仕事解説



新聞社の仕事解説



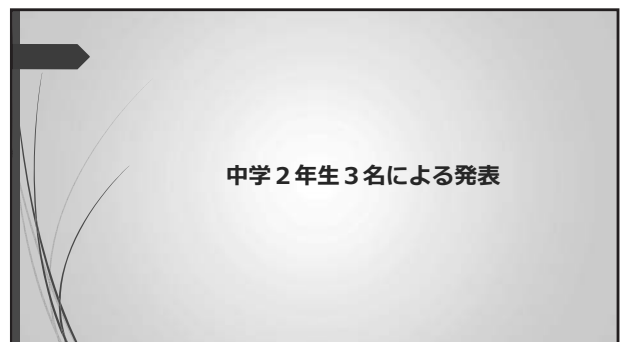
スタッフの方と懇談



スタッフの方と懇談



スタッフの方と懇談



中学2年生3名による発表

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

- ▶ 1. 河北新報社への職場訪問（2年次 6月）
- ▶ **2. 長崎の調べ学習（2年次 夏期休暇課題）**
- ▶ 3. 河北新報社による出前授業〈その1〉新聞活用講座（2年次 3月）
- ▶ 4. 3月に特別プログラムを組んで平和学習（2年次）
- ▶ 5. 『長崎レポート』作成（3年次 5～7月 7月発行）

2. 長崎の調べ学習（2年次 夏期休暇課題）

（1）目的

- ▶ ①長崎の歴史の調べ学習を通して3年次の長崎校外研修旅行の意識づけをはかる
- ▶ ②調べ学習のポイントを学ぶ

長崎レポートの作成にあたって

（1）調べる

- ▶ 書籍を参考にした時は、著者名・書名・出版社名・出版年を明記すること
（例）丸山仁『院政期の王家と御願寺』（高志書院 2006年）
- ▶ インターネットを利用する場合は、HPのアドレスを載せること。また参考にする情報もとを十分に検討したり、いくつかの情報を比較や検討をして載せること。

（2）調べた内容をまとめる

- ▶ 指定された用紙（A4版1枚）に横書き
- ▶ 年表・絵・図などを入れ、わかりやすいように工夫をすること
- ▶ 鉛筆で下書き後、誤字・脱字や文章のチェックを行い、黒ペンで清書をすること。

※ 事前に希望調査を行い、ある程度クラスで偏りがないように分担を決めて行っている。

テーマ一覧（1）

I 長崎に関わる歴史上の人物

- ▶ （1）キリシタン大名（有馬晴信・大村純忠）と天正遣欧使節
- ▶ （2）シーボルトやトーマス・ブレイク・グラバー
- ▶ （3）坂本龍馬

II 長崎の歴史

- ▶ （4）島原・天草の乱、鎖国と出島（資料2）

テーマ一覧（2）

III 長崎とキリスト教

- ▶ （5）踏み絵（絵踏み）と禁教令、長崎26聖人殉教・浦上天主堂

IV 長崎と原子爆弾

- ▶ （6）長崎に投下された原子爆弾と核兵器、原子爆弾による長崎の被害状況（資料3）
- ▶ （7）永井隆・如己堂
- ▶ （8）平和記念公園・平和祈念像

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

- ▶ 2. 長崎の調べ学習（2年次 夏期休暇課題）
- ▶ **3. 河北新報社による出前授業〈その1〉新聞活用講座（2年次 3月）**
- ▶ 4. 3月に特別プログラムを組んで平和学習（2年次）
- ▶ 5. 『長崎レポート』作成（3年次 5～7月 7月発行）
- ▶ 6. 河北新報社による出前授業〈その2〉取材について学ぼう（3年次7月）

3. 河北新報社による出前授業〈その1〉新聞活用講座（2年次 3月）

（1）目的

- ▶ 3年次に『長崎新聞』にまとめることを念頭におきながら、第1弾として「新聞の読み方、活用の仕方」を学ぶこと

(2) 内容

➤ ①震災後4年間の報道（講義形式 10分）（資料4）

震災後4年間の報道のあゆみを実際の新聞記事を取り上げながら紹介していただいた。

➤ ②新聞を楽しく読もう（授業 30分）（資料5）

新聞の読み方講座。実際の新聞を使いながら新聞のワザについて学んだ。

➤ ③あの人に伝えたい、私のオススメ記事 （ワークショップ 40分） 新聞記事をほかの人に紹介する

- a：新聞を読んで記事の一つを選び、切り抜く（5分）
- b：ワークシートに書き込む（20分）
- c：グループ内で発表（7分）
- d：みんなの前で発表（7分）

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

- 3. 河北新報社による出前授業（その1） 新聞活用講座（2年次 3月）
- 4. 3月に特別プログラムを組んで平和学習（2年次）
- 5. 『長崎レポート』作成（3年次 5~7月 7月発行）
- 6. 河北新報社による出前授業（その2）取材について学ぼう（3年次7月）
- 7. 平和宣言の取り組み（3年次 夏期休暇課題・8月）

4. 3月に特別プログラムを組んで平和学習（2年次）

(1) 目的

- 学年末試験が終わり、3年生に進級するにあたり
4月から準備がはじまる長崎郊外研修に向けて意識づけをはかること

(2) 内容

➤ ①平和学習として平和を考える映画や番組の鑑賞

NHKスペシャル「解かれた封印～米軍カメラマンが見たNAGASAKI～」(2015年度)（資料6）

※ 国語の教科書を使った学習
教材「目撃者の眼」（『国語二』学校図書）

感想文より

もし、私がジョー・オダネルと同じ立場であったら、たくさんの人から批判を受けたら、たぶん諦めてしまい、写真をまたトランクの中にしまって一生開けないと思います。でも、ジョー・オダネルは批判や嫌がらせを受けても最後まで訴え続けて、とても原爆のことをアメリカ全土の人に訴えたいという思いが強かったんだなと思います。

「日本に入って復讐する」という思いで軍に入り、広島・長崎の写真を撮っているうちに心を動かされて、私物のカメラで30枚もの写真を残し、しばらくの間トランクにしまっていたけど、アメリカなどで批判を受

けながらも写真展を開いたのはすごく勇気があることだなと思いました。また父の思いをうけつないで息子が活動を続けているのは素晴らしいことだなと思いました。

この映像に出てきた少年の背中の写真が1番に残りました。その少年は一命をとりとめたものの、今でも何回も手術をしても治らないということにびっくりしました。今回のだけでも原爆の恐ろしさがすごく分かりました。

過年度の例（2014年度）

- ・『真つ黒なお弁当』の英訳（英語）
- ・遠藤周作『沈黙』の学習（国語）
- ・広島女学校の生徒の歩みをドキュメンタリー化したDVDの鑑賞

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

- 4. 3月に特別プログラムを組んで平和学習（2年次）
- 5. 『長崎レポート』作成（3年次 5～7月 7月発行）
- 6. 河北新報社による出前授業〈その2〉取材について学ぼう（3年次7月）
- 7. 平和宣言の取り組み（3年次 夏期休暇課題・8月）
- 8. 河北新報社による出前授業〈その3〉「長崎新聞をつくろう」（3年次 10月）

5. 『長崎レポート』作成 （3年次 5～7月 7月発行）

（1）目的

- ①長崎の歴史や文化を調べ、平和について考えることを通して、10月の校外研修旅行で何を学んでくるかを一人ひとりが明確にすること。

（2）内容

- ①『長崎レポート』（資料7）
 - ②資料集(見学場所のパンフレットなどを調べる材料として提供)
- ※ 事前学習として、長崎の原爆に関係のあるDVD鑑賞も行います

長崎に関係のあるDVD鑑賞の例

- ・ドキュメンタリー番組
「福島メル友から長崎メル友へ」
- ・記録映画「二重被爆～山口彊さんの遺言」
- ・DVD「ナガサキの少年少女たち」
「永井博士の思い出」

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

- 5. 『長崎レポート』作成（3年次 5～7月 7月発行）
- 6. 河北新報社による出前授業〈その2〉取材について学ぼう（3年次7月）
- 7. 平和宣言の取り組み（3年次 夏期休暇課題・8月）
- 8. 河北新報社による出前授業〈その3〉「長崎新聞をつくろう」（3年次 10月）
- 9. 「長崎新聞」作成（3年次 10月）

6. 河北新報社による出前授業〈その2〉 取材について学ぼう（3年次 7月）

（1）目的

- ①10月の長崎校外研修の学びを『長崎新聞』にまとめるための第二弾として、現地での取材の仕方について学ぶこと
- ②長崎の原爆について学ぶにあたり、昭和20年7月10日におこった仙台空襲および戦時下の報道について学ぶこと

（2）内容（資料8）

- ①仙台空襲の翌日も新聞を発行した（東日本大震災時にも通じる）
- ②戦時下において、報道統制（検閲）のなか社説で軍を批判し新聞人として時代が終戦そして新しい時代へ動いていることを伝えることに命をかけた寺田編集局長

- ③戦時中の報道への反省を記した河北新報創刊50周年の社説
- ④取材のいろは
 - a: 取材の準備
 - b: 取材・質問をする時のポイント
 - c: メモの取り方
 - d: 写真を撮る
- ⑤メモをとる練習（ちゃんとメモを取れたかな？確認クイズ）



仙台空襲と東日本大震災における新聞づくりの共通点



一九四五（昭和二十年）原爆投下の報道



取材のいろは



どっちの写真がふさわしい



メモを取る練習



しっかりとメモは取れたかな

- 宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育**
- ▶ 5. 『長崎レポート』作成（3年次 5~7月 7月発行）
 - ▶ 6. 河北新報社による出前授業〈その2〉取材について学ぼう（3年次7月）
 - ▶ **7. 平和宣言の取り組み（3年次 夏期休暇課題・8月）**
 - ▶ 8. 河北新報社による出前授業〈その3〉「長崎新聞をつくろう」（3年次 10月）
 - ▶ 9. 「長崎新聞」作成（3年次 10月）

- 7. 平和宣言の取り組み（3年次 夏期休暇課題・8月）**
- (1) 目的
- ▶ 長崎の地において、平和式典を行い、その中で平和に対する決意を自分たちの言葉として読み上げる。

- (2) 内容
- ▶ ① 校外研修旅行委員（代議員が兼務）が話し合いながら学年としての平和宣言にまとめている。2015年度からは一人ひとりが夏期休暇の課題として平和宣言をまとめ原爆資料館にお渡ししてきている。
 - ▶ ② 長崎（8月9日）や広島（8月6日）の平和宣言や戦争に関する新聞記事などを参考にして平和宣言を考える。朝日新聞社のオンラインデータベース「朝日けんさくくん」で「平和」「核兵器」などのキーワードを入れて検索した新聞記事を踏まえてまとめるときもある。

- ③2016年度は、生徒に
 - a: 朝日新聞社の特集号『知る原爆』
 - b: 平成27年度の長崎平和宣言
 - c: 活水中等学校（本校と交流をしている長崎の学校）の原爆の被害をまとめたリーフレットである『あの日を忘れない 旧鎮西学院中学での原爆被害』を全員に配布した。

一人ひとりの平和宣言より～桜組Aさん～

昭和20年8月9日午前11時2分、アメリカ軍が投下した1発の原子爆弾により長崎の街は「生き地獄」と化しました。

原爆で7万4千人もの人々が亡くなりました。また生き残った人々は今もなお「原爆症」に苦しめられています。原爆は人々だけでなく、全ての生き物や植物、大切なものまでも無差別にうばっていきました。

この原爆の力を知っている被爆者の方は「もう二度とこのようなことをおかしてはいけません。」そして「二度と戦争はしてはいけません」と深く心に刻んできたと思います。

そしてその想いが「憲法における平和の理念」として残っているのではないのでしょうか。今被爆者の方の平均年齢は80歳を超えています。世界に「被爆者のいない世代」を迎える日は少しずつ近づいている、というお話を長崎市長さんが平和宣言の際に語っておられました。被爆者の方々がいなくなったからといって、「原爆について」の意識がうすれてしまてはいけません。この課題は私たちが若い世代が変えていかなければいけないことだと思います。そのためには被爆者の方々のお話に耳を傾けるべきだと思います。

被爆者の方々はつらくても語ってくださいます。それは「未来を守るため」と思い語ってくださっていると思います。

私たちがするべきことは「その想いを引き継ぐこと」だと思います。

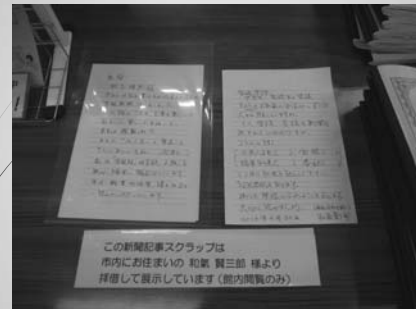
長崎市長さんの平和宣言の中に「未来のために過去に向き合う一歩」という一言が自分の心にとても響きました。自分たちの未来を変えることができるのは自分たち自身です。

私は核兵器廃絶のための協力と平和の実現をつくすことをここに宣言します。

2016年8月9日3年桜組〇〇〇〇

- さらに、和氣賢三郎さま（仙台市内在住）が新聞6紙の平和についての記事をスクラップされたノートを参考にして、「戦争や原爆投下について考え、一人ひとりが自分のことばで平和について考えをまとめる」こと、「国や他国に〇〇してほしい」ではなく、「自分が何をすべきか」を書くように指示をした。

※ スクラップノートは、図書室で閲覧できる形をとった。





感想文より

2016年6月24日の日経新聞の一面を読んで、戦争について考え直すきっかけになりました。日本で地上戦が行われたのは一度だけで、その悲劇を体験したのが沖縄県の人々です。私も、何度か沖縄を訪ねたことがありますが、今はもう、その悲劇の面影はありませんでした。時間が経った為、あたりまえなのかもしれません。しかしその悲劇が忘れ去られてしまう事は、絶対にだめだと思います。私はこの新聞記事を読んで改めて思いました。

被爆した方々が語ってくれている平和の大切さと、原爆、戦争の怖さ。しかし、被爆した方々の平均年齢は80歳をこえたそうです。世界が被爆者のいない時代を迎える日が少しずつ近づいています。だから、私達は原爆の怖さを語り継いでいく必要があるのだと思います。宮城学院の校外研修旅行では長崎に行きます。楽しみながら、たくさんを知りたいと思います。そして、尊い命が奪われることのない世界を創っていく一人となれたらいいなと思いました。

私たち中学生は、新聞を読むことがあまりありません。しかし、私達がこれからの未来を担う一人ひとりとして知らなければならない情報がたくさんあると思います。新聞記事スクラップは、そんな私達の手助けをしてくれています。これからもたくさん情報を得られるように、新聞記事スクラップに目を通したいと思います。提供して下さり、ありがとうございました。

中3生徒による「平和宣言」についての発表

▶ 2016年度の平和宣言（資料9）

※ 校研委員長が平和宣言の作成課程を含めて平和宣言に込めた思いを語ります

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

- ▶ 5. 『長崎レポート』作成（3年次 5～7月 7月発行）
- ▶ 6. 河北新報社による出前授業〈その2〉取材について学ぼう（3年次7月）
- ▶ 7. 平和宣言の取り組み（3年次 夏期休暇課題・8月）
- ▶ 8. 河北新報社による出前授業〈その3〉「長崎新聞をつくろう」（3年次 10月）
- ▶ 9. 「長崎新聞」作成（3年次 10月）

8. 河北新報社による出前授業〈その3〉「長崎新聞をつくろう」（3年次10月）

（1）目的

- ▶ 長崎への校外研修旅行後、研修での学びを「長崎新聞」というかたちでまとめる方法を学ぶ。被爆講話をうかがって考えたことや長崎の町を歩き歴史や文化に触れて感じたことをどのようにまとめて人に伝えるかを学ぶ。

（2）内容「長崎新聞をつくろう」（資料10）

- ▶ ①「新聞」を発行するということ
- ▶ ②新聞のレイアウトを選ぼう
- ▶ ③どんな記事を書く
- ▶ ④記事として書きたいものをリストアップしよう
- ▶ ⑤前文をつくろう
- ▶ ⑥インタビューを記事にする
- ▶ ⑦より新聞記事らしく書くコツ
- ▶ ⑧見出しを付けてみよう
- ▶ ⑨アタマの記事に見出しをつける

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

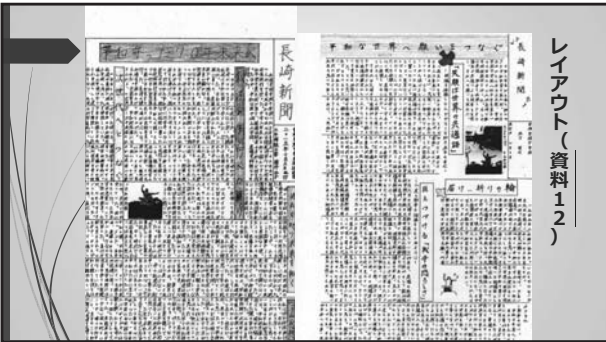
- ▶ 5. 『長崎レポート』作成（3年次 5~7月 7月発行）
- ▶ 6. 河北新報社による出前授業〈その2〉取材について学ぼう（3年次7月）
- ▶ 7. 平和宣言の取り組み（3年次 夏期休暇課題・8月）
- ▶ 8. 河北新報社による出前授業〈その3〉「長崎新聞をつくろう」（3年次 10月）
- ▶ 9. 「長崎新聞」作成（3年次 10月）

9. 「長崎新聞」作成（3年次 10月）

(1) 目的

- ▶ ①長崎校外研修旅行での学びをまとめる
- ▶ ②自分自身が受け身ではなく、平和に対する考えを世の中に発信する

(2) 2015年度の『長崎新聞』より（資料11）



レイアウト（資料12）



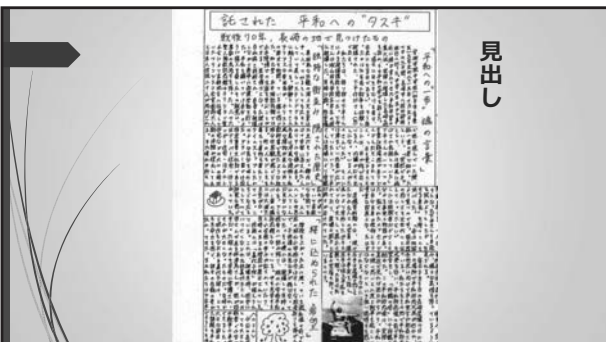
前文



見出し



見出し



見出し

むすびにかえて～日常のNIE活動について

- ▶ 朝新聞の取り組み
 - ・朝の礼拝前の時間を利用して朝新聞（年間十数回）筆写から要約・感想へ
- ▶ NIE実践指定校の取り組み
 - ・日直による新聞記事の紹介
 - ・第22回新聞記事コンクール参加
 - ・班ごとに一つの新聞記事を読んで感想を述べ合う

(3) 全体会記録

仙台市立七北田小学校 教諭 今藤 正彦
松島町立松島第一小学校 教諭 秋場 文東

全体会（実践報告）質疑応答

- Q 研修旅行先は、なぜ、広島ではなく長崎なのか。
(西中田小・高橋)
- A 本校はミッションスクールなので、キリスト教と歴史の関連から長崎を選んでいる。(宮城学院中・丸山)
- Q 宮城学院中の平和教育が素晴らしい。「自分に何ができるのか」という視点から学ぶことができている。娘も本学で学んだが、大変お世話になった。(八幡小・武田)
- A 今後もよい学びができるようサポートを続けていきたい。(宮城学院中・丸山)
- Q 圧巻である。素晴らしい実践発表だった。社会的な視野、自分の目で見、耳で聞き、自分の言葉で書いている。新聞には悪いことはすぐ載るが、よいことは載りにくい。ぜひ、宮城学院のような良い取り組みを載せてほしい。長崎には「反核」の署名をジュネーブ(国連)に届けている学校もあるが、そのような学校との交流や接点を持つことはしていないのか。(北陸学院大・金森)
- A 今日の発表では触れていないが、長崎の活水中・高とは交流しているし、署名も準備しているので国連に届けてもらう予定。新聞には、ぜひこのことを取り上げてほしい。(宮城学院中・丸山)
- Q 生徒さんに質問したい。新聞を読んだり、新聞を書いたりして、ズバリ、どんな力がついたと思うか？もっとこうなればいいなという願いでもいいので教えて欲しい。(田子小・鈴木)
- A N I E活動を通して新聞に関心を持つようになったし、国語の文法力も身に付いたと思う。(3年)
- A これまでは、本は読んでも新聞を読むことはなかった。N I Eの活動を通していろいろなニュースに触れることができた。自分の頭で考え、発展した学習ができたと思う。(2年1)
- A さまざまなジャンルの記事があることを知った。自分の地域のニュースを知ることもできた。(2年2)

- A 読む力が身に付いた。いろいろな視点からものごとを見ることができるようになり、世の中の出来事を自分自身と関連づけて考えるようになった。また、こういう書き方をすれば読み手に関心を持ってもらえるというようなことも分かった。(2年3)

指導講評（七北田小・森屋勝治 校長）

- ① N I Eのカリキュラム化について
宮城学院中学校では、学校組織全体でN I Eに取り組んでいる。N I Eをカリキュラムにきちんと位置づけているということであり、大変大事なことである。
- ② カリキュラムマネジメント力について
新聞社による出前授業や校外研修等、見通しを持った計画を立てて実施している。そのことにより、生徒の社会参画意識の向上が見られる。代表として本日発表した生徒の表現力や応答力がすばらしかった。
- ③ N I Eの日常化について
宮城学院中学校の2年間のN I E実践については、「第27号 N I E実践報告書」に詳しく報告されているので参照してほしい。これまで、地道なN I Eの日常化に取り組んできている。
- ④ N I Eのこれからについて
七北田小学校では、「ことばの貯金箱」の実践に全校で取り組んでいる。また、今年度は、「仙台市教育課程研究協議会：国語科」でN I Eの実践発表を行った。今後のN I E推進に期待している。



(4) 講演

学び合う力を育む！

北陸学院大学 教授 金森 俊朗 氏

<金森俊朗氏 プロフィール>

1946年石川県能登生まれ。金沢大学教育学部卒業後、教職につく。石川県内の8つの小学校を経て、2007年3月退職。2008年4月より北陸学院大学教授。現在は、北陸学院大学地域教育開発センター長を兼任。上越教育大学、金沢大学非常勤講師、いしかわ県民教育文化センター所長などを務める。

1980年代より「仲間とつながりハッピーになる」との教育思想のもと、人と自然に直に触れ合うさまざまな実践を試みる。1989年、妊娠7ヶ月のお母さんを、翌年進行性末期ガン患者を招き本格的に「いのちの教育」を開始する。

1997年第29回中日教育賞、2010年第19回ペスタロッツ教育賞受賞。金森学級の1年を追ったNHKスペシャル「涙と笑いのハッピークラス 4年1組 命の授業」が2003年第30回日本賞グランプリを受賞。



著書：「いのちの教科書」（角川書店）
「町にとびだせ探偵団」（ゆい書房）
「希望の教室」（角川書店）
「子どもの力は学び合ってこそ育つ」（角川書店）
など多数

1. 生きづらさの悲鳴・・・聞いてほしい！

今、日本の子ども・青年は、一方では正社員として雇用される将来の保障がないにもかかわらず、かつてのどの世代よりもボランティア活動を体験し、現実社会と応答的に生きる喜びや他者に必要とされる生きがいを得、機会があればもっとやりたいと願っている。こうした若者の出現は日本史上初めて。

しかし他方では、12万人もの小中学生が不登校（自己否定・自己攻撃）に、さらにいじめや暴力問題（自己否定・他者攻撃）に苦しんでいる（高校生の不登校は五万人以上）。虐待、鬱病、家庭崩壊、病気、災害・事故（自殺遺児・交通事故遺児・洪水震災つなみ遺児・福島原発放射能避難など）等で苦しんでいる子どもを含めれば信じがたい数にのぼる。

そうした社会・学校体制から生まれる子どものイライラ・ストレス・不安、勉強・スポーツ・習い事等に対する親の過剰な能力全開への期待に応えることができない自己否定・絶望、経済的文化的な貧困による幼児時代からの発達歪みなどは、不定愁訴、アレルギー、生活の荒れ、自己肯定感の希薄さ、学習

集団の未成立（いわゆる学級崩壊）、学びからの逃走、退学、不登校、いじめ、暴力、非行といった身体的症状や問題行動、事件を強く生み出している。

以下は私の学級で出された子どもの声の一部。

- 「私のお父さんとお母さんはリラックスができなくて、薬を何個も飲んでます。お父さんは仕事ができないくらい辛くなって、ずっと休みをもらったときに急に会社に来てくださいと言われてました。仕方なく会社に行ったらお父さんがくたくたになって帰ってきてすぐに寝てしまいました。がんばってねと言ってあげたかったけど言えませんでした。早くお父さんの病気もお母さんの病気も治ってほしいなと思います」（小学3年）
- 「私はとっても勉強ができない。いつもいつも私はバカだと思ってしまう。勉強だけだったらちょっとはいいと思ったけど、運動も習っているピアノもそろばんもできない。何のとりえもない私がかんたん情けなくなった。私は何もしたくなくなってきた。・・・こんな何もできない私は、自分が憎い」（小学5年）

- 「いつも宿題、勉強、進研ゼミをやらなくっちゃあ
いけないうっていつもあせってイライラしている。
それでも勉強をやめないのは、やっぱりみんなの
ように勉強しないと不安になってイライラするか
らだと思う。ゆとり、安らぎが欲しい」(小学6年)
- 「誰かが一緒じゃないと安心できない。話の輪から
はずれるのがすごく怖い。転校し続けていつも独
りぼっちでスタートしていたからだ。いつもいつ
も不安で自信がなかった。自分でも知らないうち
に『テストで良い点取ってお母さんを喜ばせたい』
と演じていた。でも最近『何で親や先生のためにが
んばっているんだろう。何のために自分は努力し
てるんだ』と思えてくる。たまには『自分なんて誰
も必要としていない』と命を見下げたりもする」
(小学6年)
自分と他者を大切に、幸せに生きる力を育ん
でいく子・親・教師でありたい！！

2, キャッチャーであれ！！あらゆる声を聴くこ とが最初で最大

2002年度担任した4年生の陽は、私を過大に評価
して次のように。

「(ほくらの)教室では、先生がキャッチャーで、子
どもがピッチャーやねんて。他の先生やったら、俺の
考えとか受け入れてくれんくって、三割か四割ぐら
い話して、最後まで聞かんに、『おまえの考えはダ
メ』って言われることが多かったんやけど、金森先生
は最後まで聞いてくれる。直球じゃなくて、フォーク
とかカーブとか投げても、金森先生は、ヤクルトの古
田とか城島とかみたいに、自分が要求したボールと
違ってバンンって捕ってくれるねんて。他の先生
やったら、最後はど真ん中にいくとしても、『あっ、カ
ーブきた』というだけで、捕ってくれへんねん、最初
から。ほんでピッチャーのエラーになってしまう。だ
けど、金森先生やったらずーっと信じて見てくれと
るから。もしも違って、最後には体で受けとめてく
れる、そんな感じやから。人を信じてくれるってう
か、そんなところが学校では一番好きな先生」

今、私は、教育実践はもちろん、子どもに関わる仕
事をしている人たちに「キャッチャーであれ。子ども
はピッチャーで、さまざまな球を投げってくるから」と
強調。家庭での最初の、そして最多のセリフは「宿題
をしたか」である。学校では、「教科書を開いて、姿
勢を正しく」であろう。子どもたちは、大人と違って、
目的化された学習の場だけでなく、道端に咲いてい
る草花、落ちて石ころ、流れる雲、などにも心を

動かされ、時には好奇心をもち、時には遊びを始め
る。聞いてほしくない大人の会話にも耳をすませ、し
っかりと聞いている。

それらを私は、子どもが持つてくる大切な「手紙」
だと考え、毎朝、かなりの時間をさいて報告してもら
っている。学級の正面には次のような詩を掲示して
ある。

【手紙 鈴木敏史】

ゆうびんやさんが来ない日でも あなたにとど
けられる 手紙はあるのです
ゆっくりすぎる 雲のかげ 庭にまいおりの
たんぼぼのわた毛
おなかをすかした のらねこの声も ごみ集
めをしている人の ひたいのあせも……
みんな手紙なのです 読もうとさえすれば

聞き合う仲間がいれば、聞き合う場があれば、豊か
に受け止める大人がいれば、多くの子たちは、おもし
ろいほどに自分を語る。伝え合う。

3, 「できること」を求め、励まし、誉めて育てる子 育て・教育の落とし穴

・・・《関係性の中に生きていることを自覚し、
共感的共存的他者を住まわせる》

伝え合っている子どもたち。果たしてそれを家庭
で、学級で？！一年生が「いいこと」と題して次のよ
うな詩を書いている。

きょう、さんこもいいことがありました。／それ
は、わたしが／といれのかみを かえれなかった
のに／できました。／たいやが とべました。／そ
れに てつぼうもできました。／うれしい いち
にちでした。

一年生に限らず多くの子が喜んで伝えようとする
表現、報告は、何かが「できた」喜びが中心である。
それを教師も親もほぼ無条件に喜び褒め、「やればで
きる」「努力さえすれば何でもできる」とさらに励ま
すことが多い。

それだけでいいのだろうか。子どもの生きる物語
をよく観察したり、聞いたり、想像すれば「できた」
ときはもちろん、「できない」ときにも共通した「す
ばらしさ」があるはずである。自分だけでなく、誰か
他者が、その場に共に生き、何かを教え、教えられ、
助言・忠告・励まし・援助・支えられることが、そ

して他者と響き合って呼応した自分がそこにいたはずである。「応援してくれる人を得た、その人と高め合う関係性を持った自分がいたことの自覚」をじっくり育むことが、今、とても大切である。しかし、上の詩のように書かせている(発表させている)ことが圧倒的に多い。成長に伴い、むしろできない、伸びない体験、挫折体験も多くなる。そのことが学ぶことからの逃走や自己否定感を強めている。

次の【さかあがり】と言う詩を想像力を豊かにして読んで欲しい。(上川友香里・高知県・六年生・1984年)

「あと一回で……。」／藤岡さんに言った。／「がんばってよ。」／本当に心をこめて言った。／「うん、がんばるけん。」／顔でそう思ったように思えた。／(きっとできる。)／信じていた。／藤岡さんは、／手に砂をつけ、／鉄棒をにぎった。／足をふって、／「1、2、3、えいっ。」／足が空向いてあがった。／おなかの辺りが鉄棒について、／ぐるっときれいに回った。／「藤岡さんできたやいか。やったあ。」／藤岡さんは、／両手で顔をかくして、／笑い泣きしていた。／私は、／すわりこんで笑った。／友だちが何かできた時、／こんなうれしいとは、／思ってもみなかった。／もう、／えんりょしながら、／さかあがりしなくてもよくなった。／二人で、／うす暗い空に向けて、／堂々とさかあがりをしてやった。(日本作文の会編日本子ども文詩集より)

すばらしい詩である。これまで上川さんは、逆上がりができない藤岡さんを思い、「遠慮しながら」逆上がりをしていた。今回ずっと練習に付き合い、コツを教え、応援。藤岡さんの表情、しぐさ、回り方を実によく観察し、表現している。できる、できないのプロセス(日常)にこれだけの応答性、関係性を深めている。今、教育・子育てにおいて最も大切にしたいことが、この詩に凝縮されている。藤岡さんの詩が同時に欲しいところである。

今、できた／できないという行為の結果だけが注視され、それまでのプロセス(生きる物語)をじっくり聞き、何をこそ生きるための宝として捉えるべきかの大人の目が極端に弱くなってきている。聞き受け止める余裕を失っている。能力レベルで人間を評価する側面だけでなく、こうして多数の他者との関係の中で生き生かされている存在レベルを貴重で大きなものだと自覚させ、共存的他者を人格の中に住

まわせることが、今、強く求められている。

4、「ロボット」と言うな・・・友の「生きる物語」(奥行き)を理解し寄り添う

私の学級は、毎朝子どもから発見・不思議・ニュース・お知らせ・呼びかけ・お礼・お詫び・喜怒哀楽など【仲間に伝えたいこと】を発信してもらい、応答・交流する時間をとても大切にしている。06年度、担任した四年生の学級に、両足の太股から靴までの部分に装具をつけて生活している明星がいた。5月中旬、彼はさげすまされる悔しさと装具を外して歩ける喜びを泣きながら詩《うれしい》に書いて学級の仲間に発表した。

三年のときまで／装具で 肉をはさんだし／装具のせいで／一年に一回 絶対 クラスの人が／「ロボット」と言う／三年間 言われた／三年のとき／鬼ごっこを していたとき／二人に言われた／「足ロボット」／くやしい／でも 装具が取れて／もういじめられない／と思ったけど／三年生に言われた／「もう付けていないから 言うな」／と言ったけど やっぱり言った／装具を付けたら／足は大丈夫だけど／筋肉がつかない／装具をはずすと／筋肉がいっぱいついてきた／よかった／うれしい」

発表後、明星に「詩に書ききれなかったことを話して」と促すと、筆者との応答で一時限近く語った。誕生後九ヶ月で四十度の熱が一週間続き、医師から「一生歩けないだろう」と宣告されたこと、良くなる可能性が1%でもあれば、お金をいとわずに手術を繰り返した親の思い、「ロボット」とののしられ家に帰って母と泣いたこと、遠足では共に楽しく歩きたかったこと、今、やっと装具を取ったので、時間はかかるが登下校あちこち見ながら歩けることが楽しいことなど。

彼の口から事実と思いが驚くほどリアルに語られるにつれ、泣き始める子どもたちが出てきた。ちひろは激しく泣きながら次のように応えた。

「私は直接ひどいことを言うてはいないが、心の中では同じように思っていた。これまで明星さんやお父さんお母さんのことを全く知らないできた。知らないというより知ろうとさえしてこなかった自分がとても情けないとつくづく思った。本当にご免なさい。今日聞いてとてもよく分かった。これから言わないだけでなく、もし言う人がいたら私も絶対許さな

いから、応援するから、みんな応援しませんか」

いつもはひょうきんな啓は両手で涙を拭きながら「ちひろ、頼むから泣くな。お前が泣くと俺がまんできなくなってしまう」と叫んでいた。泣きながらも次々に明星に応じて発言する子どもたちに筆者も泣いた。

翌日、明星は母と相談し、赤ん坊時代からのたくさんの装具の中から五種類を選んで持参し、仲間に見せた。それを眼前にしながら、学級の仲間は昨夜書いてきた明星への作文(手紙ノート)を読んだ。それらを受け、筆者も全力を込めて明星と学級の子どもたちと保護者向けに長文の詩を書き、学級通信に掲載した。明星の母から、これまでの苦しみと差別された悲しみ、そして今回の学級の取り組みに家族一同感動し涙を流した旨の手紙が寄せられた。何人もの保護者からも、子の存在の奥行きを真っ正面から受け止める学級の姿勢に共感する想いが届けられた。

明星の詩と生育史の語りは、子どもたちの心を激しく揺さぶり、他者の奥行きを知ることの大切さを痛感させた。まさかこんなに早い時期に重い悲しみを子ども側から共有できる学習を創ることができるとは考えていなかった。それだけに「これにて一件落着！」とはしたくなかった。明星以外にも仲間と共有して欲しい強い想いがそれぞれにあり、それを共有してこそ共に生きる学級に高める土台ができたからであった。子どもと話し合い、今後の課題を以下の三点にまとめた。(以下の課題は要約)

〈課題一〉明星は誕生後九ヶ月に生死の危機。そうした危機は明星だけの特殊なできごとではないはず。可能な限り家族全員の胎児時代や誕生後の成長史における生死の危機を聞き取る学習を進めよう。

〈課題二〉明星のように辛さ・悲しみを乗り越えようと努力しているのに、悪口を言われ、耐えている友が、また悪口を言ってしまう自分がいるはず。これから仲間として生きる友を私はどれだけ大切にしているか、自分をもっと見つめてみよう。

〈課題三〉私にも悲しみ・辛いこと・悩みはある。でも明星のように伝える努力をしないと誰にも分かってもらえない。友を信じて勇気を出して書いてみよう、言ってみよう。

5、日常の中で大切にしたい、できること・・生きる原風景を刻む＝豊かな表現力・言葉を育む

二年生の一介くんが詩を書いた。

《ごぜん三時ぼくとおとうさんはあさやけを見た、ならんでみた》

朝三時におしっこにおきた。おとうさんが／「一介、あさやけみるか」／と外に出た。／外に行ったら月が出てた。／そのよこに赤くきらきら光っている／金星があった。／きれいだった。／金星はいぼっているみたいだった。／山の方からあさやけが出てきた。／地面も光っていた。／お月さまは半分だった。／外に五分くらいいた。／小鳥の声がピピピとひくくきこえた。／もう朝かなあと思った。／気持ちよかった。／ずうっとこうしてなかった。／ぼくはすっきりした。／さむくはないし、あつくもないし／ふつうだった。／人はだれもいなかった。／ぼくとおとうさんだけだった。

なんといい親子だろう。朝やけに向かって立つ父と子。その姿を想像するだけで、私にはじんとくるものがある。お父さんも無言。一介くんもだまって空を見ている。早おきの小鳥が、どこかでないている。(もう朝かなあ)そうおもいながら空を見る。山の方から朝やけが広がり、地面も光ってみえる。なんかとってても大事なものを、お父さんが一介くんに伝えている瞬間のように見える。一介くんとならんでいるだけでお父さんは幸せ。そして、お父さんのそばに立っているだけで一介くんは心満ちてくる(ぼくはずっとこうしていたかった)。二人に流れるあたたかいもの。お父さんはこうして一介くんを育てている。

数日後、お母さんが「うちの人ったら晩酌の度に、一介、あれ持ってこいって通信を何回も読んで、俺もすてたもんじゃない、ってにやにやしてるんですよ」と話してくれた。誰よりも自分の子をよく知り、いとおしんでいる親の子育ての姿には学ぶことが多い。学ぶことが多い時ほど、学校と家庭の風通しのいい時である。

6、私たちは、奇跡的な存在・・・親子で、そして社会が伝え合うこと

毎年、家族の強い協力を得て一年間継続的に取り組む学習が「命のリレーにおける危機や喜びのドラマ」。自分自身にとどまらず、可能な限り家族一人ひとりの誕生・成長における危機・喜びを聞き取り、文に綴り、仲間発表。

例えば3年生の純子は、母に兄弟姉妹の「命の危機」について聞き取りをして、次のように。

【私のお母さんはお兄ちゃんを産むときにお医

者さんに「赤ちゃんがあぶない。お母さんの命を取りますか、それとも赤ちゃんの命を取りますか」と言われて「子どもを助けて下さい」と言ったら、お医者さんが「全力をつくします」と言ったそうです。それでお母さんはいたいのをがまんしてがんばったら元気なお兄ちゃんが生まれてお母さんも助かったのでよかったなあと思いました。(略)

お母さんは前に子どもを二人なくしました。それでいったん赤ちゃんを産むのをやめたけど、また、産もうと思ったそうです。でも、やっぱり子どもがほしかったから産んだそうです。(略) お母さん、私を産んでくれてありがとう。】

多忙な中で、メモを取りながら聞く娘に丁寧に語り込む母。聞き取り、長文に書き上げた娘。親子共に大変。その中で娘は、二人の子を亡くした母の悲しみ、子の命を守ろうとした母の強い想いを受けとめた。それだけではなく、母は娘が書いている文を読みながら感動の涙を流した。語り込む母と娘の捉えに涙した母の姿を娘は心に刻んだ。母は、娘が家族と自己の存在の大切さをしっかり受けとめ、感謝していることに大きな喜びと励ましを受けた。純は書き上げた文を嬉しそうに学級の仲間を読んだ。最後に「母と兄の危機のとき、お父さんは何と言ったの？」と仲間にも問われ、その晩すぐに父から聞き取りをして、翌朝再び発表。父母に愛されて誕生、成長している新たな実感がこの学びを支えていた。

4年生になると聞き取りはさらに広がり深まりを見せた。

「私のおじいちゃんがひいばあちゃんのおなかの中にいるとき、ひいじいちゃんは(太平洋)戦争に行き、二十代で亡くなりました。じいちゃんがおなかの中にいる時だから、何とかいのちのリレーが続いて良かったです。でも、死んだひいじいちゃんは子どもの顔さえも見るができなくてすごく残念だと思いました。」(ちひろ)

「私のお母さんのお父さんは、一度も『お父さん』と言った事がないそうです。なぜならおじいちゃんは、二才の時、戦争でお父さんを亡くしているからです。また、お父さんのお母さんは、三才の時、お母さんとお父さんを病気で亡くしているそうです。もし私のお父さんのお母さんも死んでいたら、お父さんも私もいない。私が生まれてくることができるととても嬉しいです。」(千紘)

浅草で生まれ育った守の祖父は、東京大空襲によって全ての家族を亡くした。啓の祖父母は神戸に暮らしていて阪神大震災で瓦礫に埋もれてかろうじて助かった。戦争、自然災害、交通事故、病気などにより亡くなった家族、危機を乗り越えて生きた、生きている家族の様子が次々に報告された。それを受けて、子どもたちは、「命のリレーは思っていたよりもはるかに細かいものだった」、「今、生きている私たちは、全員、奇跡なんだ」と言った。

学習の総まとめにしおりは次のように書いた。(長文の一部)

「命のリレーにおける最大の危機は戦争だった。日本は今、戦争にかかわっていない？ ううん、全く別。むしろもっとかかわろうとしている。今から60年前、戦争に負けて守さんのおじいちゃんのように家族を失った人はす〜ごくたくさんいる。私たちは、戦争をするため、死ぬために生まれてきたのではない！ 生きるために生まれてきた。戦争をやめさせ、この地球、世界を平和で幸福な社会にするために生まれてきたのだ。もし、この時代に戦争がきたら、たくさんの人を集めてやめさせたいです。」

7, 日々の学びの世界から伝えたい感動を生み出す！！新聞も教師ももっと子どもの可能性を伝えなくては

子ども自らが作成した問題を大事にする。大貴の次の問題は多くのドラマを生み出した。

「ぼくは3年生で毎日3km歩きます。1日2回往復します。1年間は365日です。3年間何日歩いたでしょうか。今までになんkm歩いたでしょうか。」

以前に長さの学習で1kmを実際に歩き、歩数と時間を計って、それぞれの自宅～学校の道のりを求めていた。登下校、放課後、休日での移動や遊びを考え、毎日3km程度と彼は考えた。答えを求める前に、「三年間で東京まで往復しているなあ、と本気で思う人」と聞くと子どもも大人も(参観日に授業)ゼロだった。さっそく計算を始める。1095日間。一日あたり6kmを掛けると6570km。日本地図を出して、北海道～沖縄3000kmと言うと、大人も子どもも「ええっ！」と叫ぶ。「そんな馬鹿な、信じられん。計算間違では？」と大人も子どもも再度計算し、間違いないと分かると、「すげえ！そんなに歩いとるんやあ！」「そんなら六年間ではもっともっとすごいはずやあ」と自然に計算が始まる。13140km。私は慌てて世界地図

と地球儀を出し、『理科年表』を開いて、南アフリカ共和国のプレトリア～東京間の距離 13511kmと板書するともう騒然。裕樹君が「学級文庫(三千冊以上ある)に南アフリカの本があったはずや」と叫ぶと十数人が探す。算数が大得意の遼大君は「だったら先生は地球何周もしるとるはずやあ！先生は何歳ですか？」・・・。

真の学びは子どもの内部に総合される

翌日、大貴が「手紙ノート」(仲間や先生、特定の友宛てに“最も伝えたいこと”を書き、朝の会で発表交流する)に次のように書いてきた。「六年間で南アフリカのどこかへ、行ける(ことになる)のだから、金森先生は世界一しゅうできるかもしれないから人間の足はとってもすごいものなんだあ～と思いました。今のおじいさんやおばあさんはいっぱい歩いていることがわかったので、すごいと思いました。そんな計算をするのは、かけ算のおかげだからと思ったので、こんどからはかけ算をたいせつにしようと思いました。

こんどからいっぱい歩きたいと思ったし、日本一しゅうのたびをしたいなあと思いました。日本のはしからはしまで行けるのでこつこつ歩くとすごいきょりを行くことができるんだなあ～と思いました。歩いて日本をいっきに一しゅうしてみろと言われても行けないけど、こつこつ行けば行ける。」

発表交流の中で、「ドリルや教科書の問題は現実ではないけど、かけ算を使って現実も勉強できるからすごいと思いました。」「真実を知るためにかけ算の勉強をすることを初めて知った」「かけ算で本当のことが分かったり、いろんな発見や驚きが出てきたりしてかけ算はすごく便利でいい計算だなあと思った」というかけ算観や学習観、「おじいちゃんおばあ

ちゃんの足は“黄金のあし”だ」という人間観、歩くことの価値観、歩きたいという意欲、地道な積み上げが大きな価値になるという道徳観まで深められた。良しそれならばと「大貴君が日本一周の旅をしたいとかけ算から思ったのは実に嬉しい、すばらしい。実は日本一周して、正確な日本地図を江戸時代に作った人がいる」と話す。途中経過を省くが、最終的には数人が六年生の教室まで押しかけ、『社会科資料集』を借りてくる。六年担任は「三年生が??伊能忠敬??」と首を傾げながら子どもと共に教室に来て急遽参観。「レベル、高～い」とあきれ顔。

授業後、沙緒里が「お母さんに電話するからお金、貸して」と。職場から早く帰って、図書館に連れて行って頼んだらしい。翌日の朝の会、彼女は伊能忠敬に関する本を三冊紹介し、地図作りの苦勞を語る。お母さんのメモには「読まされました。疲れましたあ！でも娘の向学心、嬉しかったあ！とても勉強になりました。先生、ありがとうございます!!」と書かれていた。当然それも読んで聞かせる。沙緒里と母に大拍手が贈られる。

(この原稿は、金森俊朗氏の了解のもとに講演資料を編集したものであり、講演記録そのものではありません。)



(5) 研究大会アンケート集計結果

参加者 100 名（含：事務局） アンケート協力 16 名

※文末も原文通り

	意 見
1	<p><開催時期・日程について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・よい（複数） ・ちょうどよい頃だと思います。 ・適切です ・本校のスケジュールでは、11/20 以降の水曜日以外が出張に出やすいです。 ・市教研と同日なのが残念でした。
2	<p><実践報告について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・丸山先生はじめ中学生の皆さんの発表がよくまとまっていて、分かりやすく素晴らしいものでした。学ぶことによって、新たな学びの課題がさらに発見できるといいですね。 ・新聞を使った授業の可能性を感じた。素晴らしい。 ・とてもよかったです。素晴らしい実践だと思いました。 ・きちっと計画し、しっかりと生徒を動かす素晴らしい実践でした。 ・なかなか知ることのできない私立学校：中学校の学びの様子を知ることができ、大変勉強になりました。 ・実際の授業はありませんでしたが、生徒の質問の応答内容がすばらしくて、特に印象に残りました。 ・長い間の積み重ねが感じられる実践で、大変参考になりました。 ・「平和宣言」作成までの具体的なプロセスをもっと知りたかった。内容が毎年異なり、時事ネタも盛り込まれており、すばしかった。 ・設定期間だけでなく、「中2全体が何名なのか」「総合学習なのかLHRなのか」「どのくらいの時間設定だったのか」「レポートを仕上げるのに、平均どれくらいの時間がかかったのか」「週何単位で実施したのか」も資料に入れて欲しかったです。宮城学院中4名の生徒さんの発表、とてもすばしかったです。講評のコメントが非常に参考になりました。 ・クラスの授業で見たかった。4人の生徒さん立派でした。 ・私学の中学校の実践に触れることができた機会～とても有意義だった。代表の生徒の“生の声”を聞いたことも、とてもよかったです。授業を観たかった思いもある。
3	<p><講演について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校のキャッチャーになれるように、金森先生、がんばります。 ・素晴らしいの一言。涙が出ました。 ・とてもよいお話でした。 ・素晴らしい講演でした。親として教師として、子どもに関わる人間として指針をいただいた一時間でした。 ・とてもよかったです。金森先生のお話を楽しみにして参加しましたが、期待以上の内容でした。 ・金森先生の熱い思い・情熱をととても感じました。自分もとてもよい刺激を受けたので、明日からの学級づくりに生かしていきたいと思います。 ・教育に対する姿勢について、改めて考えさせられる、背筋をピンとさせられる熱い話（実践）でした。とてもよかったです。 ・伝え合うという意義をもう一度とらえ直すことが自分には必要であると思わされる講演で、大変刺激

	<p>を受けました。ありがとうございました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ あっという間の一時間でした。「ロボット」と言うな・・・の話は、思わず目頭が熱くなりました。「子供たちを大切にする」という意味を、改めて考える場となりました。このような機会を設定していただきありがとうございました。 ・ アクティブラーニングの本当の姿を見ることができた。 ・ 金森先生のお話を伺えたこと、本当にうれしく思います。先生のことばからたくさんの気づきをいただくことができました。学生の頃、大学の先生に、「人はことばでつながる」と教えていただいたのを思い出しました。発信するのが教員の仕事と思われがちですが、教員自身が受け止める力を付けたいと思いました。ありがとうございました。 ・ NHKのTVで視ていて、実際にお会いしたいと思って今日参加した。血が通っている学級を作っていきたいと改めて思った。 ・ 具体的なエピソードに基づく熱い語りに魂が震えた！とてもよい講演に感動した。 ・ とても素晴らしい実践を伺い、かつて学んだ林竹二先生や齋藤喜博先生を思い出しました。国語の実践もお聞きしたかったです。 ・ 素晴らしい。当校の学びの共同体を目指す上では学級づくりが課題になっています。教師のあり方は、とても参考になりました。 ・ 金森先生の良さが生かされていなかった(90分の講演を聴きたい)ような気がします。教科書の教材、または文学作品に関する話が聴きたかったです。
4	<p><次年度に向けて></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 金森先生のような講演者を、ぜひまた呼んでいただければと思います。 ・ 語彙力や読解力が上がる新聞を用いた指導例 ・ ワークシート作成のコツ ・ 生徒のN I Eに対する反応レポート ・ 現場、リアル、事実を大切にしていきたい。
5	<p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今年、10年目経験者研修を受けているが、こういう(N I E)取り組みをこそ10年研で受けたい。県教委に10年研外部研修の一覧に載せるべきだと訴えたい。 ・ ありがとうございました。 ・ 準備等、ご苦労様でした。

宮城県N I E研究大会に参加しての感想

仙台市立田子小学校 教諭 鈴木 優太

公立小学校の教壇に立つ私にとって、私立中学校における新聞を活用した教育実践は大変興味深いものであった。

私が特に感銘を受けた2つのことについて報告する。

1 “ゴール”としての「新聞作り」を“先出し”

宮城学院中学校ならではの長崎への校外研修旅行。いわゆる私たち公立学校の修学旅行の位置付けとなる宿泊を伴う体験型学習活動である。中学2年生から3年生にかけ、約1年間を貫くダイナミックな学習活動としてカリキュラム化されている。そして、この学習活動の“ゴール”に「新聞作り」が設定されているのである。

私たちが小学校現場で、「笹かま工場新聞」、「野外活動新聞」、「修学旅行新聞」…のように、「新聞作り」の手法を用いて校外学習等のまとめを行うことがある。まとめの手法として、壁新聞、ポスター、紙芝居、レポート、写真や動画を用いたプレゼンテーション、寸劇、ペープサート…など様々考えられるが、どれが最も優れた手法と決められるものではない。「新聞作り」が最も優れた手法であるということをごここで言いたいわけではない。私が宮城学院中学校の実践の中で何よりも感銘を受けたことは、1年間をかけて行う学習活動の“ゴール”として「新聞作り」を“先出し”で子供たちに明示していることなのである。

長崎研修の事前事後の学習の中に、「N I E出前授業」を幾度も設定している。河北新報社の方から直接学ぶことができる貴重な機会である。「新聞作り」の“ゴール”が“先出し”で設定されているため、子供たちは“必要感”を持って学習活動に参加し、“本物”から学ぶことができるのである。「新聞の役割」、「取材の仕方」、「新聞の作り方」を学ぶ「出前授業」をカリキュラムの中に継続的に組み込むことができるのも、“ゴール”を明確にしているからこそだと考えさせられた。

昨年度まで、私が所属する田子小学校も研究実践校としてN I E活動に取り組まさせていただいた。その折に、河北新報社のN I E担当の方が何度もお

っしゃっていたことを思い出した。

「私たちが、いい意味で、思いっきり利用してください。」

子供たちが“本物”に触れる経験の機会とするためにも、“ゴール”を“先出し”するカリキュラムデザインの必要性を、宮城学院中学校の実践から学ぶことができた。“ゴール”を‘後出し’してしまっていた過去の自分を猛省している。

2 “当事者性”を学んでいる生徒の姿

「生徒の皆さんに質問です。新聞を活用した授業を通して、ずばり身に付いた力は何ですか？」

実践発表直後に、発表を行った宮城学院中学校の2・3年生の4名に質問をさせていただいた。

「文章を読む力が付いたと思います。」

「新聞の書き方を学び、書く力が伸びました。」

突然の質問にもかかわらず、自分なりの言葉で、次々と語っていく生徒たちの姿に感激した。

最後に答えた生徒がこのように述べた。

「新聞を読むようになって、社会で起きている出来事が“身近”に感じられるようになりました。」

“当事者性”が身に付いたというのである。金森俊朗先生が講演の中でおっしゃった

「新聞の文字面と現場を結びつけることが大切。」

という言葉を見現化している姿を見て取ることができた。N I Eの取組で育った子どもの事実を目の当たりにした瞬間だった。

学習の“当事者”は子供たちである。新聞を手に取り、紙面に目を落とした経験の少ない子もたくさんいる。新聞と共に学習を進めていく中で、子供たちは一体何を感じ、何を考え、何を学んだのか。子供たち自身の声を直接聴く機会を、今後ますます大事にしていかなければいけないと考えている。今後研究と実践を進めていく上で、学び手の“当事者性”が私は最も大切にしていきたい視点である。社会が“身近”に感じられるような“当事者性”のある人間を公立、私立の垣根を越えて育てていこうというメッセージ性のある研究大会であった。

2 宮城県N I E地区研修会

研修会の概要

＜テーマ＞ ～たのしく学ぶN I E～

事務局 齋藤 昭雄



平成 28 年度の宮城県 N I E 地区研修会は、8 月 24 日（水）、実践指定校である柴田町立柴田小学校で行われ、約 50 名の参加者が楽しく N I E について学ぶことができた。

地区研修会は例年、講話とワークショップの二部構成で開催しており、今年度も同様のスタイルをとった。

第一部の講師は、毎日新聞社：仙台支局長の永海俊氏である。永海氏は、「新聞から社会を読み解く」と題して、特に、新聞の連載企画に焦点を当てて、書き手（記者）の思いについて熱く語った。「新聞の連載企画が社会を読み解くための力になりうるかは、独りよがりにならず、読者とともにこの社会について考えるためのリアルな材料を提供できるかにかかっている」とし、「そんな連載企画を、さまざまな学習・

議論の場でもっと活用して欲しい」と続けた。

地区研修会第二部は、N I E 教育コンサルタント・東北福祉大学講師の渡邊裕子先生の指導で、「ことばの貯金箱」のワークショップを行った。「ことばの貯金箱」というのは、新聞記事の気になった言葉を切り抜いて「貯金」し、台紙に貼る活動である。「子どもも大人も夢中になる」という渡邊先生のことばを半信半疑で受け止めていた参加者も、ワークを進めていく中で表情が和らぎ、最終的には笑顔いっぱいの研修になった。事後のアンケートには、「楽しかった」「時間を忘れて取り組んだ」「2 学期に実践してみたい」という声がたくさん寄せられた。「読む」「書く」「話す」「聞く」力を無理なく養う、「ことばの貯金箱」の不思議を体感した 2 時間だった。

「ことばの貯金箱」は、これまで、仙台市や県北・県東部で実践されてきたが、県南部では初めてとなる。今後の広がりに期待したい。



＜2016 年度地区研修会の日程＞

時 程	内 容
13：30	開会の挨拶
13：30～14：30	講話「新聞から社会を読み解く」 講師 毎日新聞社仙台支局長 永海 俊 氏
14：45～16：30	ワークショップ 子どもも大人も夢中になる「ことばの貯金箱」 講師 N I E 教育コンサルタント 渡邊裕子 氏
16：30	閉会の挨拶

研修会のまとめ



○地区研修会終了後のアンケートには、「楽しかった」「参考になった」という声が多数寄せられた。ここでは、アンケートに記載された参加者の声(一部)を紹介することで、地区研修会のまとめに代える。会場を提供して頂いた柴田小学校には心より感謝申し上げたい。

(宮城県N I E委員会 事務局)

①講話について

- ・中央紙の支局長さんのお話はなかなか聞けないので、連載記事の意義など、大変参考になった。裏話をもっと聞きたかった。
- ・「記事は、結論ありきで書かれるものではない。」という言葉が印象に残った。
- ・連載内容については、記者が普段、問題意識を持っていることをテーマにしていることが分かった。そうすることで、その記事で記者が伝えたいことがより強くメッセージとして伝える効果があるのだと思った。
- ・連載のもつ力という話があったが、まさにその通りで、つい資料の記事を読み込んでいた自分がいた。講師の先生にマイクがあればよかったと思った。
- ・すばらしい記事がたくさんあることを改めて感じた。書き手、読み手の意識が分かった。
- ・記者がどのように記事を作り上げているかの一端を聞くことができてよかった。新聞作りにおけるエピソードをもっと聞かせてほしかった。
- ・いろいろな記事を読んでみて、多様な見方や考え方にふれることは大切なのだと感じた。
- ・新聞ができる現場の生の声が聞けて興味深く感じた。せっかくなので、仕事に加えて、教育に関する話題やN I Eについてなども聞きたかった。

②ワークショップについて

- ・楽しく話しながらできたのでよかった。自分の心が出てくるのだと思った。
- ・楽しかった。短い時間だったが、自分とも向き合えた気がする。ただ、障害者という言葉やそのお子さんを多く取り上げていたので、少し差別されているのかなと思ってしまった。子どもが貯金箱によって成長することは伝わってきたので、やってみ

たいと思う。

- ・ちょきちょきタイム、夢中になった。気付くと自分の心にある言葉ばかりを集めていた。はり出すことで、さらに自分の気持ちを見つめ直すことができたように思う。ありがとうございました。
- ・今回で2回目だったが、やはり楽しかった。2学期に小学校3年生で実践を予定している。渡邊先生の声がけ、言葉かけがとても勉強になった。ありがとうございました。
- ・関係のある記事をスクラップしているが、「ことばの貯金箱」的に扱っていないのでその場限りになっていたが、活用していくことに興味があかれた。
- ・ことばの貯金箱という誰でもできる作業を通してだからこそ、子どもに、自分の気持ちを素直に出せるようになるのだと思った。子どもに活動させている時の支援者の声のかけ方(声の大きさも)が難しいと感じた。
- ・楽しかった。言葉と向き合うってこういうことなのかなと思った。
- ・初めてだったが、夢中になって取り組むことができた。子供たちに体験させてみたい。
- ・ことばの貯金箱の活動は、すぐに学校で実施できると感じた。渡邊先生の一と言ひと言の声かけが、授業に参加する側の意欲を高めていると思う。そういう点でも大変参考になった。
- ・ことばの貯金箱の力には驚かされる話があり、ぜひ実践したい。ことばの貯金箱は知っていたのだが、フィルターをつけない等、注意点や大事なポイント教えてもらい勉強になった。
- ・やっていくうちに、「もっと上手に組み立てたい」「もっといろんな言葉を見つけない」と欲が出てきて、とても楽しかった。

3 N I E 全国大会大分大会参加報告

第21回N I E全国大会大分大会が8月4、5の両日、大分市で開かれました。大会スローガンは「新聞でわくわく 社会と向き合うN I E」。全国から教員、新聞関係者ら約1,400人が参加しました。全体会のほか、公開授業、実践発表など15の分科会もあり、宮城から参加した新規校4校の教員7人、事務局2人の9人は12の分科会に出席しました。全体会、分科会の内容の一部を紹介します。来年の全国大会は8月に名古屋で開催されます。

<特別分科会Cに参加して>

宮城県N I E委員会事務局長 鈴木 淳

2日目の特別分科会「行政との連携で進めるN I E」では、沖縄県、東京都北区、地元大分県の事例が報告されました。全国大会で発表するぐらいですから当たり前ですが、それぞれが「N I Eは役に立つもの」として事業を進めていることに感銘を受けました。行政、教育界と協力をさらに強め、新聞社としても事業の推進、報道の両面で後押ししていかねばとの思いを強くしました。

沖縄の紹介は、N I Eアドバイザーで県立総合教育センターの甲斐崇研究主事です。甲斐さんは2013年、アドバイザー初の研究主事になりました。この年

からセンターは県内の学校に甲斐さんを派遣し、教員の校内研修や授業でN I E活用法を伝える講座を続けています。最初はほとんどが小学校でしたが、だんだん離島の学校からの依頼が増え、最近では中高からも増えてきたとのことでした。講座は毎年20回前後になるそうです。

われわれの県N I E研究大会に当たる沖縄県N I E実践フォーラムは従来、地元新聞社2社が持ち回りで開催していました。13、14年度はセンターで開いたそうです。内容も講演や発表中心から公開授業、ワークショップ、パネルディスカッションへと変わりました。13年の初開催時、地元2紙は完全見開き2カ面で報じ「全国大会並みの報道」と、甲斐さんも感謝していました。

先生方の勉強会である研究部会も15年度から毎月開催。本年度からN I Eカフェの名でカフェを会場にして開いているそうです。教育現場に根を下ろしている様子が伺え、うらやましくなりました。

北区の報告は「新聞大好きプロジェクト」、大分県は「地域・学校そして新聞」というテーマでした。



<新聞活用は「いつ」「どのように」>

宮城県NIE事務局 齋藤 昭雄

大会2日目は、二つの小学校の公開授業及び研究討議に参加しましたが、ここでは、大分市立舞鶴小学校の実践について感じたことを述べ報告に換えたいと思います。

舞鶴小学校は、「平和について考え、発信しよう」というテーマで、6年生の総合的な学習の時間におけるNIEの実践を公開しました。これは、修学旅行(学校行事)と平和新聞づくり(国語科)との関連を図りながらテーマに迫る学習です。本時は学習のまとめになる時間で、広島原爆投下の日の「平和への誓い」と自作の「平和新聞」との比較をもとに、自分のできることを考える授業でした。本時では、中心資料として、昨年8月6日大分合同新聞夕刊記事を使用しました。小学6年生が読み上げた「平和への誓い」は、内容的にもすばらしく、ぜひ全国の子供たちに聴かせたいものでしたが、自作の「平和新聞」と比較するところに無理を感じました。この記事が、総合的な学習の時間のまとめとして活用するのにふさわしいものだったのか検討の余地があると思います。

平和について考える総合的な学習を進める時、「いつ」「どのように」新聞を活用すべきか～授業を参観しながらいろいろ考えさせられました。教師が新聞記事を資料として活用することを否定するものではありませんが、やはり、子供たちに新聞を開かせたいと強く思いました。世界の今を知るため、「戦争(紛争)」「平和」などをキーワードにして記事集めをさせただけでもダイナミックなNIEが展開できそうです。このことは、授業後の検討会で感想を含めた私の意見として発言してきました。

<公開授業Nに参加して>

宮城県気仙沼高校 三嶋 廣人

2日目の分科会で、大分高校の小林業教諭・近野正太郎講師による「原発記事を読み解く」の公開授業を参観しました。5名×4班のグループを作り、前の時間に配布したニューヨークタイムズの内容確認から授業が始まりました。題材は、放射能汚染による食品の輸入規制です。

大分高校は中高一貫校の私立学校で、中学3年次にカナダへの語学研修旅行や卒業研究に取り組んで

おり、時事問題や海外の情勢、英語への関心が高い生徒たちです。また高校では、小論文対策として毎週土曜日に、新聞を読み自由に意見を記述させる取り組みを行っており、見出しから要旨をとらえることが得意だそうです。それを踏まえ、日本の新聞記事と海外の記事の読み比べで授業が展開されていきます。

国による書き方の違いに加え、2011年の記事から始まり、13年や15年といった時系列での比較も行いました。特に英語の表現がどのように変化していくかに注目させています。また、後半は、放射線が生物にどのような影響を与えるのか講義を行いました。

この授業を参観し思ったことは、防災教育や放射能漏れが引き起こす問題については、教科書への掲載や改訂に時間がかかり、タイムリーな指導をするには新聞が良いのだということです。パネルディスカッションにもありましたが、新聞記事を時系列にみることで、その時々社会や世間の考え方をあとから見返し、考えることができます。教科書には結果しか現れないものの、裏にあるドラマを新聞は伝えてくれるのだと思いました。



4 北海道・東北ブロックN I Eアドバイザー・事務局長会議

宮城県N I E委員会事務局長 鈴木 淳

北海道・東北ブロックN I Eアドバイザー・事務局長会議が9月24日、福島市の福島民報社で開かれました。ブロックのアドバイザー、事務局長が一堂に集う年1回の機会。活動を盛り上げるための方策を協議し、日頃の悩みにも耳を傾け合いました。

アドバイザーが10人、新聞社から13人、日本新聞協会から関口修司N I Eコーディネーターら2人が参加。宮城からは大槻欣史アドバイザー（名取北高教諭）と鈴木が出席しました。

関口さんは「N I Eの教育的効果を考える」と題し基調提言をしました。コーディネーター就任前に校長を務めた東京都北区の小学校での経験を基に、「N I Eは読解力を育てます」と強調しました。2013年度に赴任すると、毎週金曜日朝8時30分から15分間をN I Eタイムとして、新聞記事の一つを選び、要約と感想を書く活動に全校で取り組んだそうです。

全国学力・学習状況調査の国語A問題で13年度は全国平均を7・6ポイント上回っていました。15年度にはその差が10・0ポイントに広がりました。算数Aでも6・8ポイントが10・6ポイントになったそうです。「N I Eタイムで読解力が高まった証拠」と分析しました。

新聞協会は、N I Eの効果検証のために実践指定校などの学力調査のデータを集約しようとしています。文部科学省の担当者は、母集団が2,000もあれば有意の調査と言えるのではないかと話したそうです。関口さんは参加者に調査への協力を呼び掛けました。

事務局長の報告では、北海道の渡辺多美江さんが15年度の実践報告書から優れた報告を校種別を選び、表彰していると述べました。いい試みだなと感じました。道の指定校は協会枠32、独自枠7で39校。アドバイザーも12人います。どちらも全国最大規模ですが、面積が広いので活動の有機的な広がりがなかなか進まず、苦慮しているとのことでした。

活動が停滞気味という指摘は、宮城を含め多くの

事務局長からありました。山形は、社内の人事異動で事務局担当者が2、3年で替わってしまい、事業推進のノウハウが蓄積されないという切実な課題を語りました。

宮城は、小学校部会（部会長・相澤経利仙台市立郡山小学校長）が取り組んでいる新聞無料提供の事業を紹介しました。児童が1部ずつ新聞を使える授業の意義を知ってもらおうと13年度に始まりました。16年度は34校に2,000部を提供しました。17年度も継続し、既に各校に案内を送っています。

大槻さんは高校部会の行事と「かほくワークシート」などについて報告しました。かほくワークシートは6人のアドバイザー、宮城県N I E委員会コーディネーターが交代で執筆し、毎週火曜の河北新報朝刊に掲載されています。データはPDF、サイズはA4判なので印刷してすぐに使うことができます。

3グループに分かれ、「N I Eの活性化に向けた取り組み」をテーマに意見交換しました。事務局からアドバイザー、実践指定校の担当者にメールで情報を一斉配信すれば、有機的なつながりが構築できるのではという示唆に富む提言もありました。来年の会議は初めて山形市で開催されます。



V みんなの広場

N I Eアドバイザーとしての一年を振り返る

宮城県名取北高等学校 教諭 大槻 欣史

日本新聞協会N I Eアドバイザーとう肩書きをいただいて早数年。今でも教育現場で実践していることには何の変わりはありませんが、各種会議や大会へ参加し学ぶ機会も多くなりました。謙虚に学び続けることは大事ではありますが、今後は、外に向けて発信していくこともまた責務なのだ実感しています。今回は、以下の3点について、今年度の活動を振り返り、少しでもこの記事を読まれた方へ還元できれば幸いです。

1. 「北海道・東北ブロックN I Eアドバイザー・N I E推進協議会事務局長会議」に出席

昨年9月24日(土)、福島県の民報ロイヤルホールで開かれた会議に出席しました。事務局長12名、アドバイザー10名、オブザーバー3名の計25名が参加し、推進協議会の取り組みと課題を共有し、グループに分かれて意見を交換しました。福島県N I E推進協議会代表幹事の遠藤義範氏の挨拶に始まり、日本新聞協会N I Eコーディネーターの関口修司氏から「N I Eの教育的効果を考える」と題して基調提言を拝聴しました。その中で、N I Eを実践した場合のメリットを、以前勤務されていた小学校の全国学力・学習状況調査の例を元に説明していただきました。

<N I Eのメリット>

- ・読解力が高まり、国語の平均点が上がり、同時に算数の正解率も上がった。
- ・地域・社会の出来事への関心が高まった。
- ・読書をするようになった。
- ・文章を書くことを難しいと思わなくなった。

また、我々アドバイザーには、今後活動していく上で参考なるアドバイスをいただきました。

- ・学力を伸ばすためにN I Eをやるのではない。

- ・新聞を読むようになることがゴールではないが、活字への抵抗感がなくなればいい。
- ・問題は先生が続けるかどうかである。とにかく続けること(習慣化)、「できない」と決めつけないことが重要である。
- ・新聞を入口に、その後インターネットで調べさせるという手もある。

また、彼が実践していた「N I Eタイム」についてご紹介いただいた。アドバイザーにはもちろんこれからN I Eを始めようと考えられている先生方にも非常に参考になるので概要を以下にまとめました。

「N I Eタイム」

<主な活動>

- ・新聞スクラップや新聞ワークシート
- ・見出しビンゴ、笑顔を集める、青を集める、見出し川柳

<ポイント>

- ・教科・領域の年間指導計画に位置付けない
- ・すき間時間(朝学習の時間)を活用する
- ・生活時程に位置付ける
- ・週に1~2回程度に実施する
- ・子ども主体の継続的な活動とする
- ・楽しみながらできるような工夫をする

<N I Eタイムに関する生徒の感想>

- ・新聞は文字だけではなく、グラフや地図などもありわかりやすい。
- ・ページをめくるたびに新しい発見がある。
- ・自分の意見を持つことができ、友達と話し合っ、友達の考えのよさに気付いた。

<6年生に質問:「変わったことや思ったこと」>

- ・新聞は面白いものだと気付いた。
- ・文章を要約することが速くなった。

- ・テレビだけでは全ては分からないと知った。
- ・社会のことを多く知ることができ、役だった。
- ・新聞を取っていないので、週に1度のN I Eタイムを大切にしている。
- ・家族で世の中の出来事を話題にするようになった。
- ・自分が全く興味のなかったニュースや知らなかったことを見つけることができる。

また、グループ討議の中では、実践例の報告や実践していく上での困難さが話し合われ、あっという間に時間切れとなりました。

<N I E実践の難しさ→今できること>

- ・多忙中での組織化が難しい→各教科・科目、学年で共有できるような素材を使う。朝の活動等で無理なくやる。
- ・広域化の中で先生方が集まるのが難しい→メールやSNSを活用すべき。
- ・行政との連携が難しい→うまく連携していくことが大事だが、基本はボトムアップ。

<アドバイザーの今後の役割>

- ・実践をしている先生方をもっとメディアで取り上げる。
- ・負担にならないシステムやマニュアルを残す。
- ・もっとアドバイザーの出番を多くする(模擬授業、勉強会)。

2. かほくワークシートの作成

今年度も河北新報の記事を使った学習用のワークシートを作成しています。毎週月曜日の朝刊「かほピョンN I Eのページ」に連載されています。PDFデータ(A4判)に印刷できますので、是非授業や朝学習、または家庭でご活用ください。

3. ラジオ出演

昨年の12月23日(金)、地元のコミュニティFM「なとらじ801(はちまるいち)」にゲスト出演しました。お昼の生放送「なとらじW I D E」のパーソナリティーの柿沼基子さんが、2016年11月1日付けのワークシートをご覧になり、N I Eに関することや

授業実践、生徒の反応等をお話しただけですかというお誘いがありました。本番では、新聞活用の意義や教育活動に非常に有効であるという点をお話ししました。アドバイザーは一実践者であることには変わりありません、メディアの前でN I Eについて語れなくてはいけないということを実感しました。



書く・話す力を育てるアクティブ・ラーニングの一試み ～英語教育にN I Eを取り入れた研究・実践を通して～

大崎市立岩出山中学校 教諭 齋藤 美佳

I はじめに

本研究では、生徒が主体となって、他者とかかわり合いながら英語を書いたり、話したりする力を育てるためのアクティブラーニングについて考える。アクティブ・ラーニングを授業に取り入れることによって変わるの、知識や技能をどう身に付けていくかという学びの過程である。その学びの過程において、「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」という3つの視点で生徒たちの学びを充実させていきたいと考える。そこで、学びの充実を図るために、新聞を活用する。社会の縮図とも言われる新聞を活用することで、世の中の出来事を考えたり、自分の生き方を振り返ったり、さらには自分の考えや思いを発信することを通して主体的な学びができる。また、各記事には、興味関心のわく見出しや写真なども掲載されているので、生徒も記事の内容に迫りやすい。よって、本研究では、ねらいに迫るために新聞記事を効果的に活用した深い学びを通して、生徒が他者とかかわり合いながら主体的に英語を書いたり、話したりする力を高めることができると考えた。

II 主な研究・実践の概要

1 第1学年+特別支援学級

題材名：My Hero～オリンピック選手を英語で紹介しよう～（英語2時間+文化祭+スクラップコンクールへの応募）

(1) ねらい

新聞記事を用いて、五輪選手を紹介する英文を正しい語順や語法で3文以上書く。授業や文化祭で、英語の音声の特徴をとらえながら、五輪選手を紹介する英文を聞き手に正しく伝える。【書く・話す】

(2) 学習過程

五輪選手の新聞記事(写真付き)を選び、その選手の情報を調べる。英語で紹介文を書いて発表する。

(3) 生徒の作品

- ・生徒A：This is Ito Mima. She is from Shizuoka. She is sixteen years old. Her birthday is October. She likes watching movies.
- ・生徒B：This is Sasaki Tsubasa and Shota. They are brothers. They are from Akita. Shota is twenty. His birthday is January. Tsubasa is twenty-one. His birthday is March.

(4) 生徒の感想

- ・同じ選手の新聞記事の写真を使っている、違う英文でまとめられていてすごい。
- ・興味のある選手を新聞で知ることができた。
- ・今まで習った単語を楽しく復習できた。



2 第1学年

題材名：英語でつぶやき NEWS

(1) ねらい

自分が選んだ新聞記事を読んで、既習の単語や英文でつぶやきながらレポートを作成する。友だちのレポートに対しても英語でつぶやく。【書く】

(2) 学習の様子と作品



(3) 生徒の感想

- ・新聞記事を使ったことで、友だちが何に興味があるのかを知ることができて良かった。
- ・最初は英語でつぶやくのは無理だと思っていたけど、新聞記事に対して英語で感想が書けるようになっていて驚いたし、うれしかった。

III 成果(○)と課題(●)

- 新聞記事を活用したことで、生徒が見通しをもって主体的に学べる課題を設定できた。
- 他者との協働作業によって課題解決を実現できたことにより、対話的な学習ができた。
- 英語を書いたり、話したりしながら自分の思いを発信する力が育った。
- 本研究の内容を年間指導計画に位置づけを図ることやのアクティブラーニングの視点から英語の4技能をどのように高めるかについて探ること。

仙台城南高がN I E実践授業公開

宮城県N I E委員会事務局長 鈴木 淳

2016、17年度のN I E実践指定校になっている仙台城南高が11月11日、河北新報の声の交差点に載った投稿を使った授業を公開しました。同高常勤講師の虎岩容子さんが「新聞記事を活用して自分の考えを伝えよう」というテーマで「コミュニケーション」の授業をし、県内外の教員、企業関係者らが見学しました。

生徒は探求科の2年生13人。全員がタブレット端末を持っています。虎岩さんはまず、米大統領選の結果について感想を送信させ、その内容で4グループに分けました。同じような意見ばかりにならないような配慮です。

各グループは友達との仲直りを考えた「友達の大切な忘れなで」、温暖化防止へ行動必要性を訴えた



●写説1 にこやかに意見交換する生徒



●写説2 授業の内容を検討した授業分析会

「目先より未来考え行動を」など四つの投書を端末で読み、感想や意見を付箋に書きました。模造紙に貼り、さらに解決策を考えて書いては、ツイッター感覚でどんどん付箋を貼っていきました。

虎岩さんは時々、グループの1人を呼び出し、小声で指示をします。大声でみんなに言わないのは、生徒それぞれが考え、意見交換してほしいからだそうです。生徒自身が主体的に、仲間と協力しながら課題を解決する「アクティブラーニング」の手法です。

「河北データベースや検索サイトで調べてもいいよ」と声を掛けていました。生徒は話し合いに夢中でそこまでは手が回らないようでした。

2グループが撮影した模造紙をスクリーンに映し、内容を発表しました。次の授業でさらに議論を深め、解決策をまとめようと虎岩さんが述べ、公開授業を締めました。

授業分析会では、見学者から「端末操作が手慣れている」「和気あいあいの雰囲気」などと感嘆の声が上がりました。虎岩さんらは、探求科の生徒は入学時から端末を持っていること、4月には意見を話すのも生徒にとって難しそうだったが、夏が過ぎてやっと前に来て発表できるようになったと説明しました。

指導助言者は、県総合教育センター研修修部専門教育班次長の小川典昭さんです。小川さんは「生徒一人一人がグループを大事にし、みんなが意見を出してまとめようと工夫していた。アクティブラーニングの成果だと思う」と評価。「意見をぶつけ合い、納得して発表するには時間が足りなかったが、盛りだくさんの内容でいい授業だった」と話しました。

公開授業は、県教委などで組織し、ICT（情報通信技術）の教育への活用を探るみやぎのICT教育研究専門部会の研究協議会として、開催されました。数学Ⅱ、情報技術基礎など九つの授業が公開され、ICT教育の実践報告や講演もありました。

災害と新聞のチカラと学校

仙台市立七郷小学校 教頭 中辻 正樹

東日本大震災発災から6年がたちました。当時新聞は、各地の避難所に配られ、多くの人々の情報共有に貢献しました。また、全国や世界に被災地の様子を伝えました。情報を受け止める側の読み解く速さはさまざまです。人々は、新聞の文字と写真から、それぞれが読み解く速さで情報を読み解くことができました。その意味でも新聞は情報伝達において大きな役割を果たしてきたのです。新聞は、その後も私たちにさまざまな情報を伝えてくれています。

しかし残念なことに、新聞の購読家庭は減りつつあります。それは小学生が家庭で新聞を目にする機会が減っていることも意味しています。小学生が学校で新聞を教材に学ぶことの大切さは、ここにもあります。



平成28年4月の熊本地震。この時の被害を新聞は伝えました。九州熊本から遠く離れたここ宮城の地でも、新聞は大きくそして継続的に報道しました。小学生にとっては東日本大震災と重なるような出来事でしたが、遠く九州の出来事でした。

そこで七郷小学校では新聞記事の切り抜きを掲示し、ゆっくり深く何度でも読むことのできる場を提供しました。以前、先輩たちと一緒に東日本大震災の写真に自分たちの考えや思いを付箋で貼ったように、日々増えていく記事に6年生は自分たちの考えや思いを貼り付けました。



本校の6年生は、「遠く仙台にいる自分たちになにができるか？」を考え始めました。そして、自らの生活の中で無駄を減らすことと、自分たちや校内への

募金活動の呼び掛けを始めました。

そんな時、一つの新聞報道がありました。宮城県出身で熊本の東海大学に進学して現地で被災した学生が、仙台で募金活動を始めた記事です。

6月。募金活動に取り組んでいた東海大学の3人が縁あって来校してくれました。さっそく6年生の集会に参加していただき、熊本の現状や、これからの見通しなどをお話しいただきました。そして、集まっ



た募金も手渡しすることができました。

災害時、その報道において新聞は大きなチカラを発揮します。それは読み手の読み解く速さがさまざまだからです。読み返したり、声に出したり、周囲の人に伝えたりすることで新聞の情報は伝わります。

新聞は学校でも大きなチカラを発揮します。各自



の読み解く速さの違いがあるのが当たり前。保存しやすく操作しやすい新聞は、どの学年でもそれなりに情報を共有することができます。授業の目的に沿って取り上げることとともに、情報の日常化に向けた日々の新聞記事活用にも大いに期待したいと考えています。それがさまざまな学習における各自の意見の交換や考えの深化、そして学習の発展につながっていくのですから。

NIEとの出会い、そして 「写真GOOD賞」表彰式を見学して

東北福祉大学4年 千葉 望花

NIEとの出会いは、ゼミを通して知った「ことばの貯金箱」(渡邊裕子氏提唱)から始まった。それまで、あまり新聞を読む習慣はなかったが、「ことばの貯金箱」を楽しむうちに、新聞が面白いと感じるようになっていった。

それをきっかけに、大学で渡邊裕子先生が授業を行う「NIE活動論」と「NIE活動実践」を履修することになったのだが、新聞はもちろんのこと、NIEに対する興味関心もより高まっていった。通年で行われる毎回の授業において、新たな発見があり、新聞を活用して授業をすることの面白さや難しさを実感することができた。

学校現場に向向いて、実際のNIEの授業を見学させていただくことはなかなか容易ではない中に、しかも今回のように七北田小学校5年生が開いた第1回「写真GOOD賞」表彰式という、特別な授業を見学できたことは大変貴重な経験だった。

もともと、この「写真GOOD賞」はキャリア教育の一環として渡邊先生が考案したものだが、七北田小学校の先生方はさらに素晴らしい工夫を加えて取り組んでおられた。それにしても、ある程度子供たちの様子はあれこれ予想はして行っていたのだが、それをはるかに超えた生き生きとした活動ぶりに「小学生でも、ここまでやれるんだ」と、心底驚かされた。

この授業は、事前に児童が印象に残った新聞写真を持ち寄り、クラス毎の代表を選び、学年全員の投票で最も素晴らしいと評価されたものについて、「写真GOOD賞」が与えられ、撮影者を表彰するというものである。

そこで、第1回「写真GOOD賞」には、河北新報社写真部の庄子徳通さんが撮影、執筆した「スーパームーン、68年ぶり最接近」が選ばれたというわけだ。

表彰式では、教室の壁には子どもたちが色紙で作ったという花や輪っかがあちこちに飾られ、子供たちの温かい歓迎ぶりが伝わってきた。いよいよ、庄司



図1. 「写真GOOD賞」に選ばれた写真

さんの登場に教室内は割れんばかりの拍手。みんな目をキラキラと輝かせていた。

代表の児童から表彰状が授与された後は、庄子さんから「写真の撮影秘話」などが明かされた。なかなか聞くことのない興味深い話に、児童が一斉に身を乗り出して聞いていた姿が、大変印象的だった。後半に設けられた質問タイムでは、たくさんの手が挙が

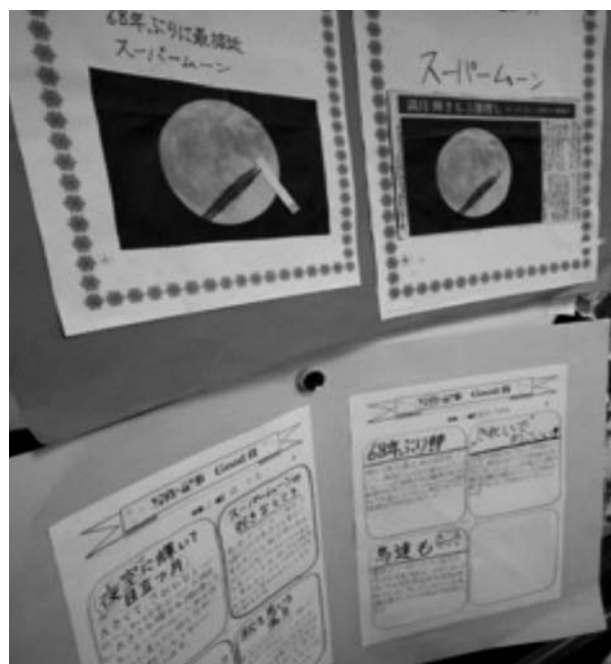


図2. 推薦児童の作品

り、「撮影に苦勞した写真はなんですか。」「写真を撮るときに気をつけていることはなんですか。」など、次々と出た。児童の関心の高さはもちろんだが、その質問が的を射ていたのにも驚いた。

七北田小学校では、これまでN I E実践校として「ことばの貯金箱」をはじめ、新聞を使った様々な授業実践がなされて来たことは、大学の「N I E授業」を通して知らされてはいたが、まさか小学生がここまで高度なことができるとは、目から鱗であり驚きであった。しかも、「写真GOOD賞」は、単に素晴らしい写真を選ぶのではなく、実際に表彰式でプロのカメラマンを招くことで生きたキャリア教育にも

繋がっていることを真直に見て、改めてN I Eの奥行きの実感させられた。

それにしても、先生方の児童に向けるまなごしの温かさ、そして一丸になって熱心に取り組まれているお姿に、有り余るほどの示唆をいただいたように思う。思えばあの日は、内心「あのような先生になりたい！」と、心から感動して帰った日でもあった。

個人的なことだが、私は来年度四月から、教員として小学校現場で働くことになった。「早く現場に行つて、N I Eをやってみたい！」と益々思わせてくれた、七北田小学校の子どもたち、そして先生方に、心から感謝を申しあげたい。ありがとうございました。



図3. 壁に掲示された児童の作品



図4. 「写真GOOD賞」表彰式の様子

VI 研究組織

1 宮城県N I E委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県N I E委員会と称する。

(目的)

第2条 本会はN I E (Newspaper in Education・教育に新聞を)の呼称にちなみ、新聞を生きた教材として活用し、文章作成をはじめ、社会問題への理解など教育内容を豊かにするとともに、情報化社会における情報の処理、活用能力を高めて、幅広い人間形成に役立てることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次の事案について協議し、指導助言する。

- ①実施目的及び計画に関すること。
- ②研究推進組織に関すること。

(組織)

第4条 本会の委員構成は次に掲げるものとする。

宮城県教育委員会代表者	宮城県連合小学校特別活動研究会会長
仙台市教育委員会代表者	宮城県連合中学校特別活動研究会会長
宮城県小学校長会会長	宮城県連合小学校生活・総合研究会会長
仙台市小学校長会会長	仙台市中学校総合的な学習研究会会長
宮城県中学校長会会長	宮城県連合小学校国語研究会会長
仙台市中学校長会会長	宮城県連合中学校国語研究会会長
宮城県高等学校長協会会長	仙台市中学校国語研究会会長
宮城県連合小学校教育研究会会長	宮城県内の大学の代表者
宮城県連合中学校教育研究会会長	在仙の日本新聞協会加盟社の代表者

(任期)

第5条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(会長・副会長・監事)

- 第6条
- 1 本会に、会長1名、副会長5名、監事1名を置く。
 - 2 会長は委員会を代表し、会務を統括する。
 - 3 副会長は会長が指名する。
 - 4 会長に事故ある時は、副会長がその会務を代理する。
 - 5 監事は会計監査を行う。

(会議)

第7条 本会の会議は、会長が招集し、主宰する。

(顧問)

第8条 本会に次の顧問を置く。

宮城県教育長 仙台市教育長

(推進委員会)

第9条 本会の事業を達成するために、宮城県N I E推進委員会を置く。この会則は別に定める。

(庶務)

- 第10条
- 1 本会の庶務は、宮城県N I E委員会事務局が行う。
 - 2 会計年度は4月1日から翌年3月31日とする。

(報酬)

第11条 本会の会長、副会長及び委員には報酬を支給しない。

(補則)

第12条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正 平成 5年 7月 1日	改正 平成 22年 6月 1日
改正 平成 6年 6月 9日	改正 平成 23年 7月 5日
改正 平成 16年 2月 27日	改正 平成 24年 6月 5日
改正 平成 18年 2月 15日	改正 平成 25年 6月 20日
改正 平成 22年 2月 26日	

2 宮城県N I E推進委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県N I E推進委員会と称する。

(目的)

第2条 本会は、宮城県N I E委員会会則の第2条(目的)を達成するために、次のことを行う。

- ①教科及び領域等における、新聞を教材として活用する実践の研究
- ②児童・生徒の現代社会に対応する情報活用能力の育成

(研究)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次のことについて協議し、研究する。

- ①N I E研究活動の推進
- ②研修会の開催、研究成果の公開及びその表彰
- ③新聞についての諸調査
- ④研究会誌の編集と発行
- ⑤その他の会の目的を達成するために必要なこと

(組織)

第4条 1 本会は、N I Eに関心を持ち、加入を希望する教育関係者等で組織する。

2 本会の構成は次の通りとする。

委員長1名、副委員長、運営委員、専門委員、委員、事務局

3 委員長、副委員長を役員とする。

(任期)

第5条 役員、運営委員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

(委員長)

第6条 1 委員長は副委員長の互選により定める。

2 委員長は委員会を代表し、会務を統括する。

(副委員長)

第7条 1 副委員長は、次に掲げるものとする。

宮城県連合小学校特別活動研究会長、同中学校特別活動研究会長、同小学校生活・総合研究会長、仙台市中学校総合的な学習研究会長、宮城県連合小学校国語研究会長、同中学校国語研究会長、仙台市中学校国語研究会長、本会小学校部会長、同中学校部会長、同高等学校部会長

2 副委員長は、会長を補佐し、委員長に事故があるときはその会務を代行する。

(運営委員)

第8条 1 運営委員は、会員の互選により定める。

2 運営委員は、研究活動の運営及び推進を主導する。

(専門委員)

第9条 1 専門委員は、会員の互選により定める。

2 専門委員は、それぞれの所属する研究部門において実践にあたる。

(会議)

第10条 本会の会議は、委員長が招集し、主宰する。

(提携する他の機関)

第11条 本会の目的を達成するために、宮城県N I E委員会と提携する。

(庶務)

第12条 本会の庶務は、宮城県N I E委員会事務局が行う。

(補則)

第13条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正 平成 5年6月25日

改正 平成16年2月27日

改正 平成20年1月16日

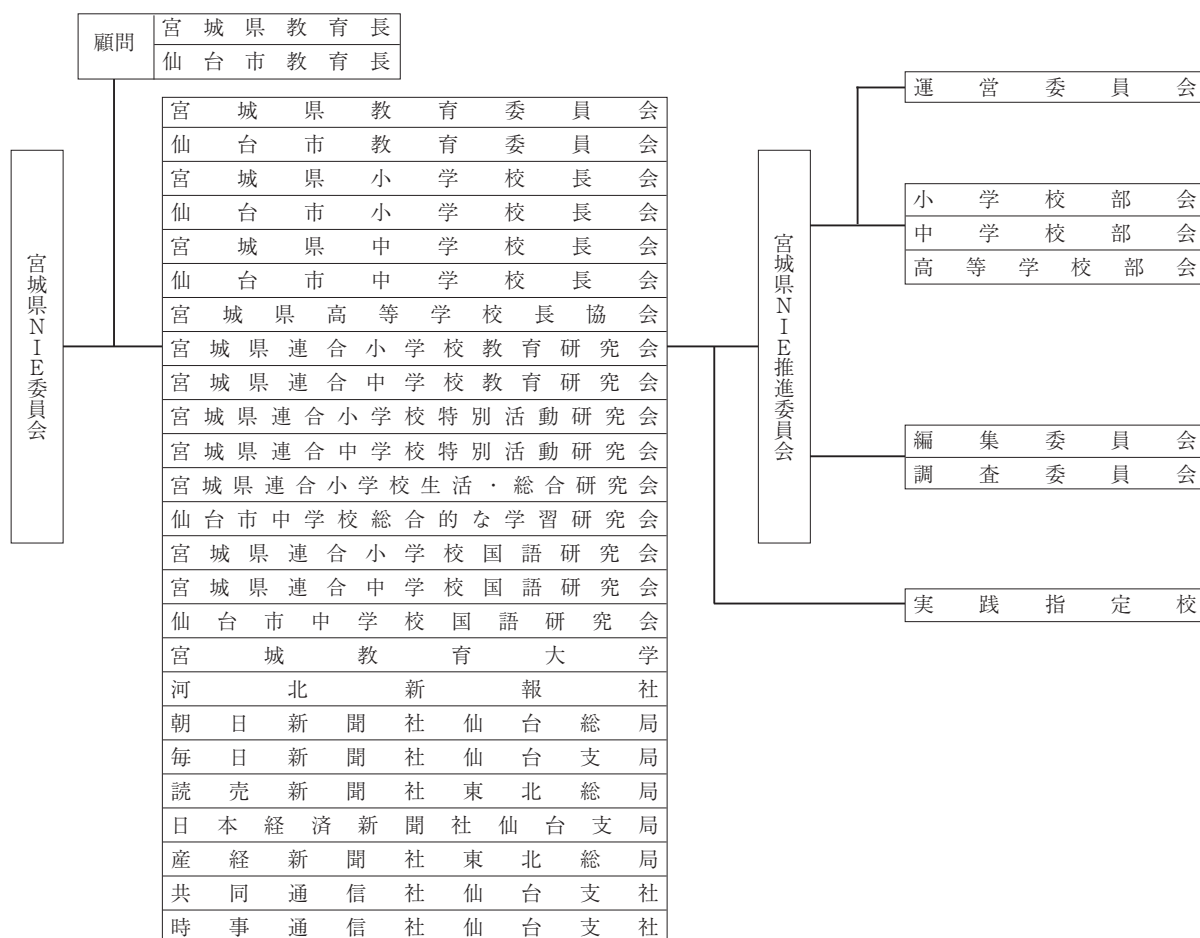
改正 平成23年2月25日

改正 平成24年6月5日

◆内規 *追加

1 宮城県N I E実践指定校は、教員1名以上が本会に加入し、運営委員を務める。

3 宮城県NIE委員会 及び 宮城県NIE推進委員会の構成



平成28年度宮城県NIE委員会役員

<敬称略>

役職	氏名	所属役職	役職	氏名	所属役職
顧問	高橋 仁	宮城県教育委員会教育長	委員	佐々木 静輝	宮城県連合中学校特別活動研究会会長（三条中学校長）
顧問	大越 裕光	仙台市教育委員会教育長	委員	木越 研司	宮城県連合小学校生活・総合研究会会長（北中山小学校長）
会長	星 豪	宮城県中学校長会会長（古川中学校長）	委員	柴田 裕之	仙台市中学校総合的な学習研究会会長（高砂中学校長）
副会長	加藤 順一	宮城県高等学校長協会会長（仙台一高校長）	委員	森屋 勝治	宮城県連合小学校国語研究会会長（七北田小学校長）
副会長	熊谷 祐彦	仙台市中学校長会会長（東仙台中校長）	委員	小野寺 文晃	宮城県連合中学校国語研究会会長（佐沼中学校長）
副会長	若生 充行	宮城県小学校長会会長（古川一小校長）	委員	岡崎 徹	仙台市中学校国語研究会会長（五橋中学校長）
副会長	成田 忠雄	仙台市小学校長会会長（片平丁小学校長）	委員	児玉 忠	宮城教育大学（教授）
副会長	武田 真一	河北新報社防災・教育室長	委員	後藤 啓文	朝日新聞社仙台総局長
委員	岡 邦広	宮城県教育庁高校教育課長	委員	永海 俊	毎日新聞社仙台支局長
委員	清元 けい子	宮城県教育庁義務教育課長	委員	小野 一馬	読売新聞社東北総局長
委員	猪股 亮文	仙台市教育局教育指導課長	委員	川合 知	日本経済新聞社仙台支局長
委員	奥田 茂人	宮城県連合小学校教育研究会会長（向陽小学校長）	委員	類 諱	産経新聞社東北総局長
委員	及川 長五郎	宮城県連合中学校教育研究会会長（米山中校長）	委員	影井 広美	共同通信社仙台支社長
委員	大江 広夫	宮城県連合小学校特別活動研究会会長（大野田小学校長）	委員	宮坂 一平	時事通信社仙台支社長

平成28年度教育委員会担当者

<敬称略>

宮城県	穀 田 長 彦	宮城県教育庁高校教育課主幹
宮城県	二階堂 浩一郎	宮城県教育庁義務教育課課長補佐
仙台市	岩 田 光 世	仙台市教育局教育指導課主幹兼教育課程係長

平成28年度 宮城県N I E推進委員会 運営委員会

<敬称略>

役 職	氏 名	学 校 名 (職名)
委員長	森屋 勝治	仙台市立七北田小学校 (校長)
副委員長	佐々木 静輝	仙台市立三条中学校 (校長)
副委員長	大江 広夫	仙台市立大野田小学校 (校長)
副委員長	木越 研司	仙台市立北中山小学校 (校長)
副委員長	柴田 裕之	仙台市立高砂中学校 (校長)
副委員長	小野寺 文晃	登米市立佐沼中学校 (校長)
副委員長	岡崎 徹	仙台市立五橋中学校 (校長)
副委員長・小部会長	相澤 経利	仙台市立郡山小学校 (校長)
運委・小副部会長	高橋 淳	仙台市立北仙台小学校 (校長)
運委・小副部会長	鍵 頼信	石巻市立大川小学校 (校長)
運委・会計	大友 浩美	仙台市立上野山小学校
運 委	伊藤 公一	柴田町立柴田小学校 (校長)
運 委	中辻 正樹	仙台市立七郷小学校 (教頭)
運 委	阿部 謙	仙台市立若林小学校 (教頭)
運 委	大場 陽子	川崎町立前川小学校 (教頭)
運 委	千葉 久美子	仙台市立北六番丁小学校
運委・実践指定校	今藤 正彦	仙台市立七北田小学校
運 委	加勢 徳寿	涌谷町立涌谷第一小学校
運 委	山本 十和子	仙台市立片平丁小学校
運 委	青木 茂	仙台市立高砂小学校
運 委	高橋 和歌子	仙台市立向陽台小学校
運 委	鈴木 誠	多賀城市立多賀城東小学校
運 委	齋田 淳一	仙台市立大倉小学校
運 委	松本 瑞雅	仙台市立柳生小学校
運 委	三塚 理恵	美里町立小牛田小学校
運 委	秋場 文東	松島町立松島第一小学校
運 委	福田 英明	大和町立吉岡小学校
運 委	小山 順一	登米市立北方小学校
運 委	千葉 修	大崎市立三本木小学校
運 委	行本 忠司	仙台市立大野田小学校
運委・実践指定校	佐々木 恵	塩竈市立第一小学校
運委・実践指定校	佐藤 秀明	登米市立上沼小学校
運委・実践指定校	根岸 健太	仙台市立中野柴小学校
運委・実践指定校	坂本 謙	柴田町立船岡小学校
運委・実践指定校	松永 秀子	柴田町立柴田小学校
副委員長・中部会長	石井 宜	仙台市立八木山中学校
運委・中部部会長	清野 和俊	仙台市立住吉台中学校
運委・中部部会長	進藤 千枝	仙台市立長町中学校
運委・会計	菅原 久美	仙台市立八乙女中学校
運 委	佐々木 成行	仙台市立第一中学校 (校長)
運 委	相澤 和男	石巻市立蛇田中学校
運 委	須藤 浩司	仙台市立八木山中学校
運 委	木下 晴子	仙台市立高森中学校
運 委	齋藤 美佳	大崎市立岩出山中学校
運 委	庄司 涉	大崎市立松山中学校
運委・実践指定校	菅原 恵	利府町立利府西中学校
運委・実践指定校	丸山 仁	宮城学院中学校
副委員長・高部会長	平居 高志	宮城県水産高等学校
運委・実践指定校 高副部会長	鈴木 理恵	仙台北南高等学校
運委・会計	大槻 欣史	宮城県名取北高等学校

運委	山上 隆司	宮城県泉高等学校
運委	木村 誠	宮城県仙台南高等学校
運委	柴田 隆一	東北学院高等学校
運委	加藤 寿	東北学院高等学校
運委・実践指定校	三嶋 廣人	宮城県気仙沼高等学校
運委・実践指定校	山田 如意	聖和学園高等学校

N I Eアドバイザー

<敬称略>

氏 名	学 校 名
阿部 謙	仙台市立若林小学校 (教頭)
中辻 正樹	仙台市立七郷小学校 (教頭)
今藤 正彦	仙台市立七北田小学校
木下 晴子	仙台市立高森中学校
菅原 久美	仙台市立八乙女中学校
齋藤 美佳	大崎市立岩出山中学校
大槻 欣史	宮城県名取北高等学校

宮城県N I E事務局

氏 名	所 属 役 職
武田 真一	河北新報社防災・教育室長
鈴木 淳	河北新報社防災・教育室部長
佐々木 可奈子	河北新報社防災・教育室
大槻 俊順	河北新報社防災・教育室
藤田 和彦	河北新報社防災・教育室
大泉 大介	河北新報社防災・教育室
齋藤 昭雄	宮城県N I E委員会コーディネーター
笠原 奈緒子	河北新報社防災・教育室
佐藤 麻美	河北新報社防災・教育室
主藤 綾	河北新報社防災・教育室
天野 路子	河北新報社防災・教育室

Ⅶ 宮城県N I Eの歩み

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成元年度	県N I E委 員会・推進 委員会設立 事務局河北	小 9 中 17	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録1号
平成2年度		小 22 中 17 計 39	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ	○芦口小 H2・10 ○八幡中 H2・10 ○中野中 H3・1		○県研究集録2号 ○紀要 芦口小 八幡小
平成3年度	高校部会 発足	小 24 中 26 高 9 計 59	○長町中	○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録3号 ○実践実例集 小グループ1号
平成4年度		小 27 中 22 高 10 計 59	○長町中 ○旭丘小	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○長町中 H5・1 ○旭丘小 H5・1	○小学校N I E研修会	○県研究集録4号 ○実践実例集 小グループ2号
平成5年度	朝日・読売 毎日・共同 時事の各社 加盟	小 56 中 30 高 16 計 102	○長町中 ○旭丘小 ○折立小 ○八軒中	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H5・10 ○長町中 H6・1 ○旭丘小 H6・2	○小・中学校N I E研修会	○県研究集録5号 ○実践実例集 小グループ3号
平成6年度	日経・産経 の各社加盟	小 68 中 49 高 18 他 1 計 136	○折立小 ○上杉山通小 (パイロット校) ○八軒中 ○向陽台中 (パイロット校) ○泉高 (パイロット校)	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H6・10 ○泉高 H6・11 ○折立小 H7・2	○小・中・高校N I E研修会	○県研究集録6号 ○紀要 折立小 ○実践実例集 小グループ4号 中N I E部1号 ○みやぎN I Eだより 1・2・3号
平成7年度		小 105 中 47 高 19 他 5 計 176	○上杉山通小 (パイロット校) ○向陽台中 (パイロット校) ○袋原小 ○茂庭台中 ○泉高 (パイロット校)	○小・中・高部会の 研究活動	○向陽台中 H7・12 ○上杉山通小 H8・1	○宮城県N I E研修会 ○地区研修会(古川) ○地区研修会(七ヶ浜)	○県研究集録7号 ○紀要 上杉山通小 ○実践実例集 小学校部会5号 中学校部会12号 ○みやぎN I Eだより 4・5号
平成8年度		小 113 中 54 高 22 他 7 計 196	○袋原小 ○上杉山通小 ○将監小 ○古川一小 ○茂庭台中 ○生出中 ○宮中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動 (授業研究)	○茂庭台中 H8・10 ○上杉山通小 H8・10 ○桜丘中 H8・11 ○将監小 H9・1 ○袋原小 H9・2	○宮城県N I E研修会 (仙台市) ○宮城県N I E白石研修会 (白石二小) ○宮城県N I E石巻研修会 (住吉小)	○県研究集録8号 ○紀要 袋原小 ○実践実例集 小学校部会6号 ○みやぎN I Eだより 6・7・8・9号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成9年度		小 122 中 60 高 28 他 7 計 217	○将監小 ○古川一小 ○桂小 ○大鷹沢小 ○生出中 ○宮中 ○蒲町中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動	○将監小 H9・11 ○桂小 H10・2	○宮城県NIE研修会 (常盤木学園高) ○宮城県NIE白石研修会 (大鷹沢小) ○宮城県NIE石巻研修会 (石巻中) ○中・高部会研修会 (田子中)	○県研究集録9号 ○紀要 将監小 ○みやぎNIEだより 10・11・12・13号
平成10年度		小 132 中 61 高 27 他 7 計 227	○桂小 ○大鷹沢小 ○女川四小 ○蒲町中 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動	○女川四小 (授業公開) H10・5 ○桂小 (授業公開) H10・11 ○常盤木学園高 H10・11 ○大鷹沢小 (授業公開) H11・1	○第3回NIE全国大会 (メルパルク SENDAI) ○宮城県NIE石巻研修会 (稲井小) ○中・高部会研修会 (七郷中) ○小部会研修会 (桂小)	○県研究集録10号 ○NIE実践事例集 「やってみよう!NIE」 小学校部会 ○みやぎNIEだより 14・15・16・17号
平成11年度		小 132 中 60 高 28 他 10 計 230	○女川四小 ○東長町小 ○しらかし台小 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○山田中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの研 究)	○常盤木学園高 (授業公開) H11・11 ○しらかし台小 (授業公開) H11・11・26 ○女川四小 (授業公開) H11・11・29 ○七郷中 (授業公開) H11・12・1	○宮城県NIE研修会 H11・6・16(明成高) ○小部会プロジェクト提案 H11・8・24(東六小) ○宮城県NIE石巻研修会 H11・11・22(蛇田小) ○宮城県NIE大河原研 修会 H11・12・1(金ヶ瀬中) ○中部会授業研究会 H11・12・1(七郷中) ○小部会実践発表会 H11・1・12(東長町小)	○県研究集録11号 ○みやぎNIEだより 18・19・20・21号
平成12年度		小 128 中 60 高 31 他 13 計 232	○東長町小 ○しらかし台小 ○大沢小 ○蛇田小 ○山田中 ○秋保中 ○明成高 ○仙台南高 ○蔵王高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの研 究)	○しらかし台小 (授業公開) H12・11・28 ○秋保中 (授業公開) H12・11・30 ○東長町小 (授業公開) H13・1・31	○小部会研修会 (データベース活用) H12・9・13(大沢小) ○宮城県NIE研修会 H12・10・4(八木山小) ○宮城県NIE仙台地区 研修会 H12・11・6 (しらかし台小) ○宮城県NIE石巻地区 研修会 H12・11・8(蛇田小)	○県研究集録11号 ○みやぎNIEだより 18・19・20・21号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 13 年 度		小 128 中 61 高 34 他 16 計 239	○大沢小 ○蛇田小 ○月見ヶ丘小 ○秋保中 ○塩竈一中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高 ○仙台函南萩陵高	○小・中・高部会の 研究活動	○仙台向山高 (授業公開) H13・10・2 ○明成高 (授業公開) H13・12・12	○宮城県NIE研修会 H13・11・28 (明成高) ○宮城県NIE石巻地区 研修会 H13・11・5 (蛇田小) ○宮城県NIE仙台地区 研修会 H13・12・7 (塩竈一中)	○県研究集録13号 ○みやぎNIEだより 26・27・28・29号
平成 14 年 度		小 129 中 62 高 34 他 14 計 239	○月見ヶ丘小 ○逢隈小 ○小野小 ○塩竈一中 ○将監中 ○筆甫中 ○東北朝鮮学校 ○仙台函南萩陵高 ○女川高	○小・中・高部会の 研究活動 (小部会「NIEお しゃべり広場」 H14・8・19 「インターネット の活用」 H14・8・20 中・高部会「公開 講演会」 H14・12・3)		○宮城県NIE研修会 H14・11・7 (河北新報社) ○宮城県NIE仙台大河 原地区研修会 H14・11・28 (逢隈小) ○宮城県NIE石巻古川 地区研修会 H15・1・24 (鳴瀬町中央公民館)	○県研究集録14号 ○みやぎNIEだより 30・31・32・33号
平成 15 年 度		小 129 中 53 高 34 他 14 計 230	○小野小 ○逢隈小 ○嵯峨立小 ○将監中 ○筆甫中 ○五橋中 ○東北朝鮮学校 ○女川高 ○仙台白百合 学園中・高	○小・中・高部会の 研究活動		○宮城県NIE研究大会 H15・8・20 (青葉体育館) ○宮城県NIE大河原地 区研修会 H15・8・22 (逢隈小) ○宮城県NIE石巻・古 川地区研修会 H16・1・23 (鳴瀬町中央公民館)	○県研究集録15号 ○みやぎNIEだより 34・35・36・37号
平成 16 年 度		小 124 中 57 高 31 他 11 計 223	○嵯峨立小 ○五橋中 ○仙台白百合 学園中・高 ○越河小 ○広瀬小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○五橋中 (授業公開) H16・11・2	○宮城県NIE研究大会 H16・11・2 (五橋中) ○宮城県NIE大河原地 区研修会 H16・8・20 (白石市中央公民館) ○宮城県NIE古川地区 研修会 H16・8・24 (田尻中)	○県研究集録16号 ○みやぎNIEだより 38・39・40・41号
平成 17 年 度		小 123 中 54 高 28 他 12 計 217	○越河小 ○広瀬小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高 ○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動 ○小学校部会授業研 究 H18・2・10 (鹿野小)	○仙台白百合 学園中・高 (授業公開) H17・11・9	○宮城県NIE研究大会 H17・11・9 (仙台白百合学園) ○宮城県NIE古川地区 研修会 H17・8・23 (田尻中) ○宮城県NIE大河原地 区研修会 H17・8・24 (大河原中)	○県研究集録17号 ○みやぎNIEだより 42・43・44・45号

	組 織	推 進 委 員 (人)	協 力 校 実 践 校	研 究 グ ル ー プ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成18年度		小 125 中 53 高 28 他 11 計 217	○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校 ○本吉・大谷小 ○仙台・中田中 ○南中山中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動 ○小学校部会授業研究 H18・12・6 (原町小)	○仙台市立南中山中学校 (授業公開) H18・11・9	○宮城県NIE研究大会 H18・11・9 (仙台市立南中山中) ○宮城県NIE本吉地区研修会 H18・8・3 (大谷小) ○宮城県NIE大河原地区研修会 H18・8・22 (大河原中)	○県研究集録18号 ○みやぎNIEだより 46・47・48・49号
平成19年度		小 124 中 52 高 27 他 10 計 213	○本吉・大谷小 ○仙台・中田中 ○南中山中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中 ○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院女子中・高	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立黒松小学校 (授業公開) H19・10・3	○宮城県NIE研究大会 H19・10・3 (仙台市立黒松小) ○宮城県NIE本吉地区研修会 H19・8・2 (大谷小) ○宮城県NIE大崎地区研修会 H19・8・23 (涌谷町立涌谷第一小)	○県研究集録19号 ○みやぎNIEだより 50・51・52・53号
平成20年度		小 126 中 53 高 28 他 8 計 215	○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院中・高 ○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○大沢中 (奨励校)	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立大沢中学校 (授業公開) H20・11・17 ○涌谷町立涌谷第一小学校 (授業公開) H21・1・22	○宮城県NIE研究大会 H20・11・17 (仙台市立大沢中) ○宮城県NIE仙台北地区研修会 H20・8・11 (富谷町立成田中) ○宮城県NIE仙台南地区研修会 H20・8・21 (亘理町立図書館)	○県研究集録20号 ○みやぎNIEだより 54・55・56・57号
平成21年度		小 140 中 54 高 23 他 10 計 227	○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○涌谷一小 (奨励校)	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立榴岡小学校 (授業公開) H21・11・25 ○仙台市立旭丘小学校 (授業公開) H21・12・10	○宮城県NIE研究大会 H21・11・25 (仙台市立榴岡小) ○宮城県NIE地区研修会 H21・8・20 (石巻市立河南東中) ○小部会研究交流会 H21・12・10 (仙台市立旭丘小)	○県研究集録21号 ○みやぎNIEだより 58・59・60・61号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成22年度	宮教大加盟 高校長協会 加盟	小 121 中 50 高 18 大 4 他 12 計 205	○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○仙台第一高 ○横山小 (奨励校)	○小・中・高部会研 究活動	○仙台市立南 小泉中学校 (授業公開) H22・11・11 ○仙台市立蒲 町小学校 (授業公開) H22・11・26	○宮城県N I E 研究大会 H22・11・11 (仙台市若林区文化センター) ○宮城県N I E 地区研修会 H22・8・18 (塩竈市立塩竈第三小) ○小部会研究交流会 H22・11・26 (仙台市立蒲町小)	○県研究集録22号 ○みやぎN I E だより 62・63・64・65・66号
平成23年度	小学校国語 研究会加盟	小 120 中 50 高 17 大 4 他 14 計 205	○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○仙台第一高 ○東宮城野小 ○小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院榴 ヶ岡高 ○石巻北高 ○泉高 ○榴岡小 (奨励校)	○小・中・高部会研 究活動	○仙台市立榴 岡小学校 (授業公開) H23・10・18 ○仙台市立東宮 城野小学校 (授業公開) H23・12・7 ○大河原町立大 河原小学校 (授業公開) H24・1・24 ○大崎市立古川 第三小学校 (授業公開) H24・2・23	○宮城県N I E 研究大会 H23・12・7 (仙台市立東宮城野小) ○宮城県N I E 地区研修会 H23・8・17 (河北新報社)	○県研究集録23号 ○みやぎN I E だより 67・68・69・70号
平成24年度	宮城県中学 校国語研究 会加盟	小 114 中 51 高 16 大 4 他 15 計 200	○東宮城野小 ○美里小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院榴 ヶ岡高 ○石巻北高 ○泉高 ○北中山小 ○大和町吉岡小 ○登米東郷小 ○大崎古川東中 ○水産高 ○大河原小 (奨励校)	○小・中・高部会研 究活動	○仙台市立八 乙女中学校 (授業公開) H24・11・9 ○美里小牛田小 (授業公開) H24・11・28 ○北六番丁小 (授業公開) H25・1・16	○宮城県N I E 研究大会 H24・11・9 (仙台市立八乙女中学校) ○宮城県N I E 地区研修会 H24・8・20 (大和町立吉岡小学校) ○小部会研究交流会 H25・1・16 (仙台市立北六番丁小学校) ○公開実践発表会 (協力校) H25・2・15 (河北新報社)	○東北・北海道地区N I Eアドバイザー会議 H24・9・22 (河北新報社) ○県研究集録24号 ○みやぎN I E だより 71・72・73・74号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 25 年 度		小 111 中 46 高 17 大 5 他 12 計 191	○北中山小 ○大和吉岡小 ○登米東郷小 ○大崎古川東中 ○宮城水産高 ○荒町小 ○大崎古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ学 院英智小中 ○富沢中 ○東北学院高 ○美里小牛田小 (奨励校) ○八乙女中 (奨励校)	○小・中・高部会研 究活動	○仙台市立八 乙女中学校 (自主公開) H25・11・8 ○美里小牛田小 (自主公開) H25・11・14 ○登米東郷小 (自主公開) H26・2・13	○宮城県NIE研究大会 H25・11・22 (仙台市立北中山小学校) ○宮城県NIE地区研修会 H25・8・20 (吉野作造記念館) ○小部会研究交流会 H26・2・25 (仙台市立郡山小学校) ○公開実践発表会 H26・2・20 (河北新報社)	○東北・北海道地区NIE アドバイザー会議 H25・9・21 (岩手県一関市) ○県研究集録 25 号 ○みやぎNIEだより 75・76・77・78号
平成 26 年 度		小 115 中 49 高 19 大 5 他 14 計 202	○荒町小 ○大崎古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ学 院英智小中 ○富沢中 ○東北学院高 ○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○大和吉岡小 (奨励校) ○登米東郷小 (奨励校)	○小・中・高部会研 究活動 ※小学校部会：5年 国語科の提案授業 実践	○仙台市立富 沢中学校 (授業公開)	○宮城県NIE研究大会 H26・11・18 (仙台市立富沢中学校) ○宮城県NIE地区研修会 H26・8・18 (七ヶ浜国際村) ○小部会提案授業① H26・6・24 (仙台市立泉松陵小) ○小部会提案授業② H26・6・30 (仙台市立七北田小)	○東北・北海道地区NIE アドバイザー会議 H26・9・20 (秋田魁新報社) ○実践報告集 26 号 ○みやぎNIEだより 79・80・81・82号 ○日本NIE学会 H26・12・6・7 (東北福祉大学)
平成 27 年 度		小 106 中 46 高 18 大 5 他 11 計 186	○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○宮城学院中 ○東北学院高 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 5年国語科の 提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学 英語科授業実践 講演会の実施	○仙台市立田 子小学校 (授業公開) ○5年国語科 提案授業の 公開 (運営委員 在籍校) ○仙台青陵中 等 教育学校の 実践発表会	○宮城県NIE研究大会 H27・12・2 (仙台市立田子小学校) ○宮城県NIE地区研修会 H27・8・18 (塩竈市立第一小学校) ○小部会提案授業公開 ※14校で実施 ○高部会実践発表会 H28・1・23	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H27・10・3 (北海道新聞社) ○実践報告集 27 号 ○みやぎNIEだより 83・84・85・86号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 28 年度		小 98	○塩竈一小 ○上沼小	○小・中・高部会 研究活動	○宮城学院中 の実践報告	○宮城県N I E 研究大会 H28・11・9 (宮城学院中学校)	○東北・北海道地区N I Eアドバイザー会議 H28・9・24 (福島民報社)
		中 41	○中野栄小 ○七北田小	・小学校部会 5年国語科の 提案授業実践	○登米市立上 沼小学校の 授 業 公 開 (5年)	○宮城県N I E 地区研修会 H28・8・24 (柴田町立柴田小学校)	○実践報告集 28号
		高 20	○利府西中 ○宮城学院中				
		大 5	○船岡小 ○柴田小	・高校部会			
		他 6	○気仙沼高 ○聖和学園高	新聞社見学 専門紙を学ぶ (河北新報社)	○仙台城南高 の I C T 公 開 (N I E との関連)	○七北田小提案授業 H28・6・9	○みやぎN I E だより 87・88・89・90号
		計 170	○仙台城南高			○上沼小提案授業 H28・6・17	

Ⅷ 編集後記

「宮城県N I E委員会実践報告書第28号」をお届けいたします。ご多用の中、原稿執筆をお引き受けいただきました各学校の先生方、関係の皆様にご心から感謝申し上げます。

さて私自身、昨年11月9日に宮城学院中学校で行われた宮城県N I E研究大会に参加する機会を得て、実践報告と講演会を拝聴させていただきました。平成27年・28年度日本新聞協会実践指定校として実践された特色ある取組について、指導者の丸山先生と学習活動を進めた生徒自身も登壇し発表が行われました。

- ・新聞社と連携した「職場体験や出前授業」の実施。
- ・平和を願うメッセージとともに、長崎への校外研修旅行を通じた「長崎新聞」作りなど。

N I Eが、計画的に平和教育や総合的な学習活動に位置づけられた素晴らしい実践発表でした。

今後N I E活動が多くの学校現場で実践され、成果を上げていくには、何か「しかけ」が必要なようです。(活動内容の具体化。学習カリキュラム等への位置づけ。学校以外の機関との連携など。)

この報告書には、実践指定校での毎日の取組の紹介をはじめ、小・中・高等学校の各部会、地区研修会など、いいアイデアや内容の濃い報告が多数収録されています。それぞれのページをご覧くださいことで、日々の実践に活かしていただけることでしょう。

また、最近の中央教育審議会からの「学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の答申を見ると、

- ・「生きる力」の育成に向けた教育課程の課題。
- ・主体的・対話的で深い学びの実現。

(アクティブ・ラーニングの視点)

などについて方向性を示し、各学校での改訂への具体的な計画策定も急務となっています。各教科の授業改善にN I Eの取組が大変有効に活用できそうです。

幸いここにある多くの玉稿は、実践を通じてまとめられたものであり、各学校実践での力強いナビゲーターになるものと確信しております。今後さらにN I Eが深められ発展することを祈念し、編集後記といたします。

(仙台市立高砂小学校 青木 茂)

<編集委員>

委員長	青木 茂	(高砂小)
委員	秋場 文東	(松島一小)
〃	木下 晴子	(高森中)
〃	進藤 千枝	(長町中)
〃	加藤 寿	(東北学院高)

<事務局>

防災・	武田 真一	
教育室長	(河北新報社防災・教育室長)	
事務局長	鈴木 淳	(河北新報社防災・教育室部長)
事務局	佐々木 可奈子	(河北新報社防災・教育室)
	大槻 俊順	(河北新報社防災・教育室)
	藤田 和彦	(河北新報社防災・教育室)
	大泉 大介	(河北新報社防災・教育室)
	齋藤 昭雄	(宮城県N I E委員会コーディネーター)
	笠原 奈緒子	(河北新報社防災・教育室)
	佐藤 麻美	(河北新報社防災・教育室)
	主藤 綾	(河北新報社防災・教育室)
	天野 路子	(河北新報社防災・教育室)

N I E実践報告書〈第28号〉

平成29年3月発行

編集	宮城県N I E推進委員会
発行	宮城県N I E委員会
事務局	宮城県N I E委員会事務局 仙台市青葉区五橋一丁目2-28 (河北新報社内) TEL. 022-211-1331 FAX. 022-211-1339
印刷	株式会社東北堂 仙台市太白区鉤取1-2-12 TEL. 022-245-0229



Newspaper in Education